熊本城調査研究センター年報８

令和３年度

2022

熊本市熊本城調査研究センター

熊本城調査研究センター年報８

令和３年度

2022

熊本市熊本城調査研究センター

目次

Ⅰ．組織(令和３年度)
1. 熊本城調査研究センターの組織……1
2. 熊本城調査研究センターの構成……1
3. 熊本城調査研究センター施設概要……1

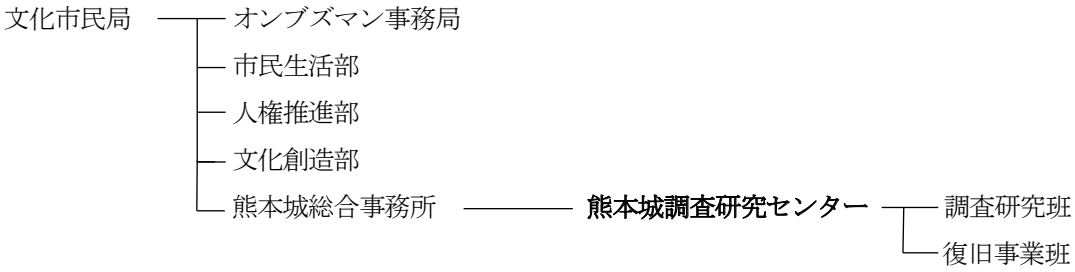
Ⅱ．令和３年度の事業
1. 調査研究・復旧事業
(1) 図書刊行……2
(2) 資料調査……2
(3) 復旧事業……2
(4) 発掘調査・工事立会など……4
(5) 学会など、外部団体による調査……107
2. 委員会運営
(1) 委員会の目的……108
(2) 審議内容……109
3. 啓発事業
(1) 刊行物……111
(2) ホームページ公開……111
(3) SNS 公開……112
(4) 研究ノート・連載他……112
(5) 報道……113
(6) 視察……121
(7) 講演・講座・説明会……121
(8) その他の啓発事業……122
4. 寄贈資料
(1) 資料……123
(2) 図書……123

Ⅲ．研究ノート
1. 櫓台増設方法の一例－熊本城飯田丸五階櫓台石垣解体調査成果から－ ……129
2. 史料紹介「関家・宇野家文書」 ……152(1)

本書は、熊本市文化市民局熊本城総合事務所熊本城調査研究センターが令和３年度に実施した業務の概要を記したものである。

Ⅰ．組織（令和３年度）

1. 熊本城調査研究センターの組織



2. 熊本城調査研究センターの構成

令和３年度

所長（兼務）		網田　龍生（考古）	
副所長		小関　秀典（事務）	
調査研究班	主査	林田　和人（考古）	
	主査	山下　宗親（考古）	
	主任主事	村上　里美（事務）	
	文化財保護主任主事	木下　泰葉（文献）	
	文化財保護主事	永島さくら（考古）	
	会計年度任用職員	奥山穂津美（事務）	
	会計年度任用職員	竹田　知美（美術）	
	会計年度任用職員	後藤　　恵（考古）	
復旧事業班	主査	金田　一精（考古）	
	文化財保護主任主事	下高　大輔（考古）	
	文化財保護主任主事	嘉村　哲也（考古）	
	文化財保護主事	佐伯　孝央（考古）	
	文化財保護主幹	阿部　泰之（考古）	（福岡県福岡市から派遣：令和２年10月～令和３年９月）
	文化財保護参事	中村　幸弘（考古）	（熊本県から派遣：令和３年４月～令和４年３月）
	文化財保護主事	井　　大樹（考古）	（大分県から派遣：令和３年４月～令和４年３月）

計17名

３．熊本城調査研究センター施設概要

熊本城調査研究センター執務室	SPring 熊本花畑町３階（熊本市中央区花畑町９－６）
熊本城調査研究センター作業室	旧国税局分室２階（熊本市中央区千葉城町３－36）
熊本城調査研究センター収蔵庫	三の丸プレハブ（熊本市中央区古京町3-3）
	合同庁舎跡地プレハブ（熊本市中央区二の丸1）

Ⅱ. 令和３年度の事業

1. 調査研究・復旧事業

(1) 図書刊行

a. 熊本城調査研究センター年報作成

事業概要：熊本城調査研究センターの令和２年度事業内容を記載した年報を刊行。

成　　果：『熊本城調査研究センター年報７（令和２年度)』（令和３年 11 月）

b. 熊本城復旧記録誌作成

事業概要：熊本日日新聞社との連携協定により、平成 28 年熊本地震で被災した特別史跡熊本城跡の被害状況、復旧工事の様子、調査研究の成果を記録した記録集を刊行。

成　　果：『復興 熊本城 vol.５長塀編』（令和３年 12 月）

c. 熊本城復興パンフレット作成

事業概要：平成 28 年熊本地震で被災した特別史跡熊本城跡の被害状況、復旧工事の経過、略年表などを掲載したパンフレットを作成。定期的に刊行を予定。

成　　果：「熊本城 ～復興に向けて～ 令和３年春夏号」（令和３年４月）

「熊本城 ～復興に向けて～ 令和３年度秋冬号」（令和３年 10 月）

d. 報告書作成

事業概要：熊本城跡に関係する発掘調査報告書の調査成果をまとめ、歴史的・文化財的な評価と総括を行った報告書の第４分冊を刊行。

成　　果：『特別史跡熊本城跡総括報告書　調査研究編』第４分冊（令和４年３月）

(2) 資料調査

事業概要

令和３年度は千葉城地区の整備基本計画策定に向けて、千葉城地区に関する古文書・絵図・古写真等の調査を実施した。また、平左衛門丸確認調査で出土した陸軍衣料品関係の遺物の類例調査として、現存する軍服の調査を実施した。

主な調査先

令和３年 ６月 18 日 熊本博物館（熊本市）寄託・所蔵の古写真・陸軍関係資料の調査

７月５日　熊本県立図書館（熊本市）所蔵の文献資料の調査

７月 13 日 熊本博物館（熊本市）寄託の軍服調査

８月 12 日 熊本市文化財課植木分室（熊本市）所蔵の軍服調査

(3) 復旧事業

令和３年度の復旧事業は次頁の a. 令和３年度復旧事業一覧の通りである。

飯田丸五階櫓石垣復旧工事では、令和２年度に石垣解体を行った要人櫓石垣の復旧を行った。令和４年度からは飯田丸五階櫓石垣復旧を実施する予定である。

監物櫓石垣復旧工事では、石垣の被害が小規模であったことから、崩落石材回収、令和元年度に熊本城文化財修復検討委員会で解体範囲が承認された石垣の解体調査、石垣復旧までを一連で実施した。石垣復旧完了後の 10 月からは国指定重要文化財建造物監物櫓の組立工事を行っている。

平左衛門丸確認調査は、令和２年度に熊本城文化財修復検討委員会で調査計画が承認された宇土櫓の埋没石垣の確認を目的として調査を実施した。

平櫓石垣解体工事では、令和２年度に熊本城文化財修復検討委員会で解体範囲が承認された石垣の解体調査

を実施した。令和5年度から石垣復旧を実施する予定である。

崩落石材回収としては、棒庵坂周辺と竹の丸五階櫓周辺の2か所で実施した。今後復旧設計を進めた後、石垣解体、復旧工事を進めていく予定である。

a. 令和3年度復旧事業一覧

工区名他	
飯田丸要人櫓石垣復旧	要人櫓下石垣復旧に伴う工事立会　令和3年5月～7月
監物櫓下石垣解体・復旧	監物櫓下石垣解体・復旧工事立会　令和3年7月～9月
平左衛門丸確認調査	遺構確認調査　令和3年6月～9月
平櫓下石垣解体	平櫓下石垣解体工事立会　令和3年9月～令和4年2月
棒庵坂周辺崩落石材回収	棒庵坂周辺崩落石材回収工事立会　令和3年10月～令和4年2月
竹の丸五階櫓台周辺崩落石材回収	竹の丸五階櫓台周辺崩落石材回収工事立会　令和3年10月～令和4年3月

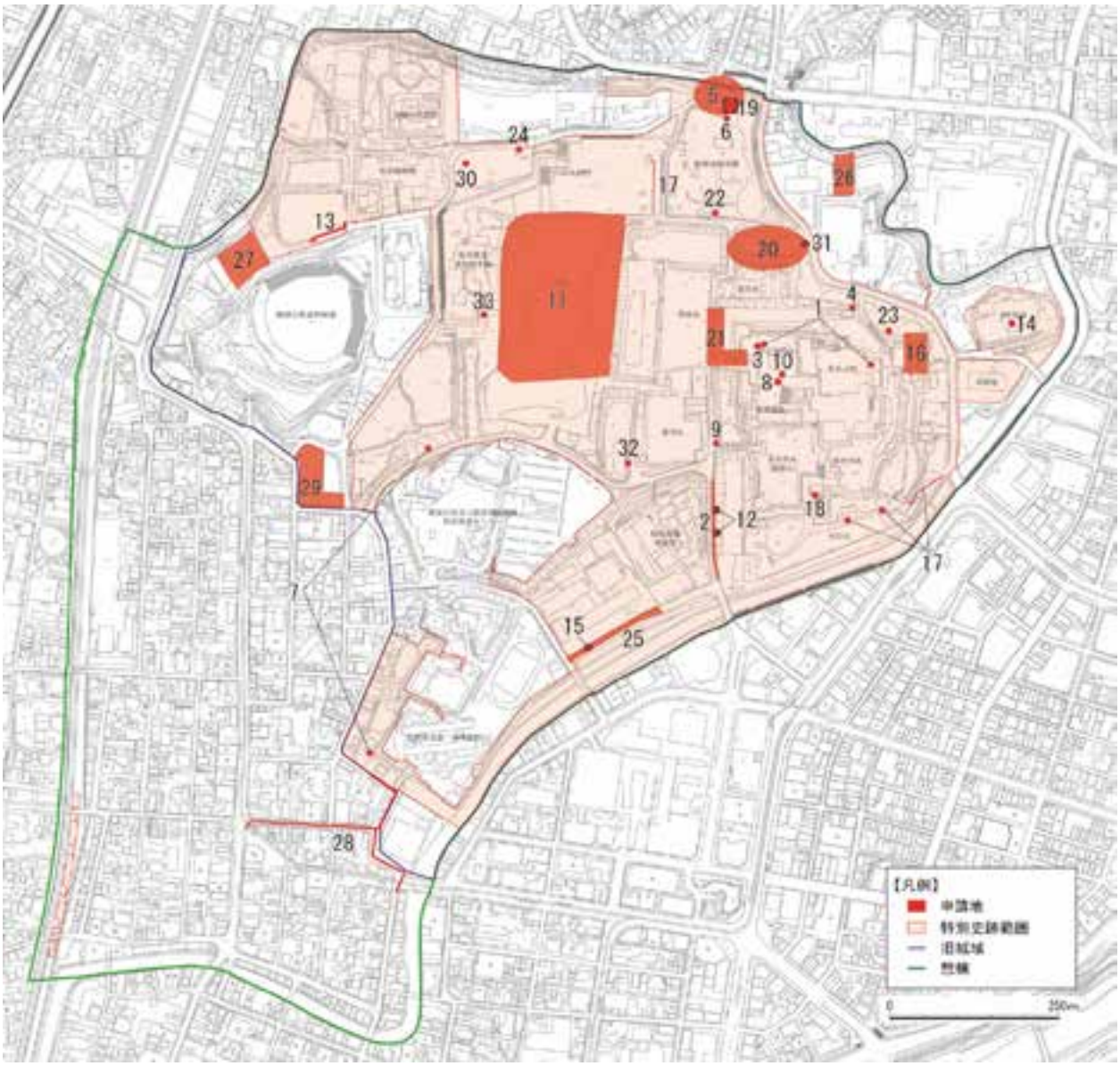
(4) 発掘調査・工事立会など

令和3年度（前年度未完了分含む）は33件の発掘調査・工事立会・確認調査・地質調査を行った。このうち文化財保護法第33条に伴うものが1件、同第93条に伴うものが2件、同第94条に伴うものが1件、同第125条に伴うものが28件、存在状況確認調査が1件である。

a. 調査一覧表

番号	調査名称	文化財保護法・その他	申請日	許可日	調査・立会期間	担当者
1	熊本城内屋外照明設備改修工事立会	125条	R2.11.11	R2.11.20	R3.4.23・5.18	山下
2	熊本城行幸坂法面対策工事立会（歩道改良）	125条	R3.1.12	R3.2.12	R3.7.13～26	林田・金田・山下
3	平左衛門丸発掘調査	125条	R3.2.12	R3.3.19	R3.6.2～9.22	嘉村・佐伯・中村・井
4	国指定重要文化財熊本城平櫓下石垣解体工事立会	125条	R3.2.12	R3.3.19	R3.9.3～ R4.2.3	佐伯・中村・嘉村
5	監物櫓下石垣解体工事立会	125条	R3.2.12	R3.3.19	R3.7.12～ R4.8.6	嘉村・阿部
6	国指定重要文化財熊本城監物櫓下石垣解体修理工事に伴う放水銃ポンプ室周り石積等撤去立会	125条	R3.2.12	R3.2.17	R3.10.19～22・11.1	嘉村
7	熊本城解説板更新業務工事立会	125条	R3.3.3	R3.3.19	R3.4.15	山下
8	熊本城平左衛門丸排水設備修繕工事立会	125条	R3.3.26	R3.3.30	R3.4.12	山下
9	熊本城西櫓門前汚水槽電気設備修繕工事立会	125条	R3.4.2	R3.4.7	R3.4.18	山下
10	熊本城宇土櫓放水銃用電動弁栓修繕工事立会	125条	R3.4.28	R3.5.7	R3.6.3	山下
11	熊本城二の丸広場雨水排水管等更新工事立会	125条	R3.5.19	R3.7.9	R3.12.9～R4.3.1	山下・金田
12	熊本城行幸坂安全対策工事立会（支障物撤去再設置）	125条	R3.6.1	R3.6.2	R3.6.4・7.6	山下
13	熊本城三の丸南棟便所給排水衛生その他設備改修工事立会	125条	R3.6.10	R3.6.16	R3.7.28～30・8.23～9.6	山下・林田
14	NHK跡地雨水排水施設設置及び法面対策工事立会	125条	R3.6.17	R3.6.18	R3.7.7～R4.1.31	林田・山下
15	合庁跡地前舗装補修工事立会	125条	R3.6.30	R3.7.2	R3.8.23	佐伯
16	北十八間櫓・東十八間櫓台石垣復旧設計に伴う地質調査立会	125条	R3.6.30	R3.7.2	R3.7.15～8.11	嘉村
17	竹の丸・二の丸給排水設備改修工事立会	125条	R3.8.2	R3.8.11	R3.12.6～R4.2.4	山下・金田
18	竹の丸五階櫓台周辺崩落石材回収工事立会	125条	R3.8.5	R3.9.9	R3.10.14～R4.3.10	嘉村・井
19	監物櫓周辺控柱確認調査・緊急養生工事立会	125条			R3.9.24・27	嘉村
20	棒庫坂周辺崩落石材回収工事立会	125条			R3.10.12～R4.3.4	嘉村・井
21	宇土櫓続櫓台石垣復旧設計に伴う地質調査立会	125条	R3.9.14	R3.9.17	R3.11.5～12.2	嘉村
22	監物台樹木園入り口石畳補修工事立会	125条	R3.10.5	R3.10.7	R3.10.11	嘉村
23	東十八間櫓台等石垣復旧設計に伴うコンクリート構造物基礎構造掘削調査	125条	R3.11.10	R3.12.17	R3.12.22・R4.1.5	下高・嘉村・佐伯
24	熊本城三の丸駐車場防護柵修繕工事立会	125条	R3.6.3	R3.6.7	R3.6.18	山下
25	合同庁舎跡地道路舗装修繕工事立会	125条	R3.8.24	R3.8.26	R3.9.1	山下

番号	調査名称	文化財保護法・その他	申請日	許可日	調査・立会期間	担当者
26	九州財務局分室存在状況確認調査	存在状況確認調査	R3.8.25	—	R3.11.16・17	文化財課
27	三の丸街灯設置工事立会	93条	R3.10.6	—	R3.11.4・5	文化財課
28	新町2丁目水道施設更新事業工事立会	94条	R3.10.20	—	R3.11.18～R4.2.24	文化財課
29	熊本YMCA跡地確認調査	93条	R3.11.19	—	R4.1.26～28	文化財課
30	三の丸駐車場舗装陥没箇所復旧に伴う工事立会	33条	R3.12.6	—	R4.1.12	山下
31	棒庵坂フェンス修繕工事立会	125条	R3.12.14	R3.12.17	R4.1.19	山下
32	薬研堀横舗装補修工事立会	125条	R4.1.4	R4.1.5	R4.1.18	山下
33	熊本県立美術館横舗装補修工事立会	125条	R4.3.3	R4.3.8	R4.3.14	山下



申請地点位置図

1. 熊本城内屋外照明設備改修工事立会

地　　点：本丸地区（平左衛門丸、本丸上段）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 2 年（2020 年）11 月 11 日
申請番号：熊本城発第 289 号　　**原　因**：屋外照明改修
許 可 日：令和 2 年（2020 年）11 月 20 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）4 月 23 日・5 月 18 日
許可番号：指令（文化財）第 289 号　　**担当者**：山下宗親

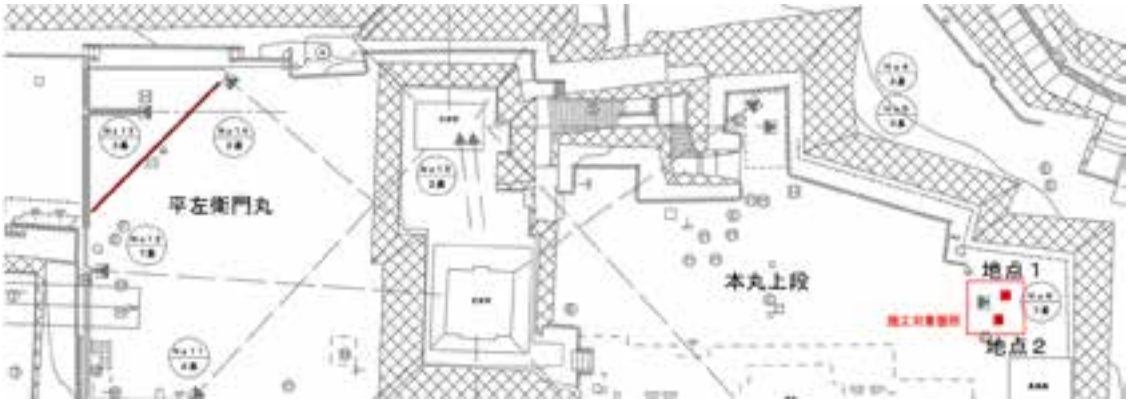
方　法・概　要

申請地は本丸地区の平左衛門丸と本丸上段の 2 か所である。平左衛門丸の申請地は、江戸時代は平左衛門丸台所が位置していた。本丸上段の申請地は、長局櫓より西側の空閑地に位置していた。屋外既存照明設備の改修に伴い、電気設備配線の設置が計画された。内容は、平左衛門丸で長さ約 15 m、幅約 70 ㎝、本丸上段の地点 1 では一辺約 40 ㎝の範囲、地点 2 では長さ約 70 ㎝、幅約 45 ㎝の範囲で既存掘削範囲内を掘削し、電気設備設置を行う計画である。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

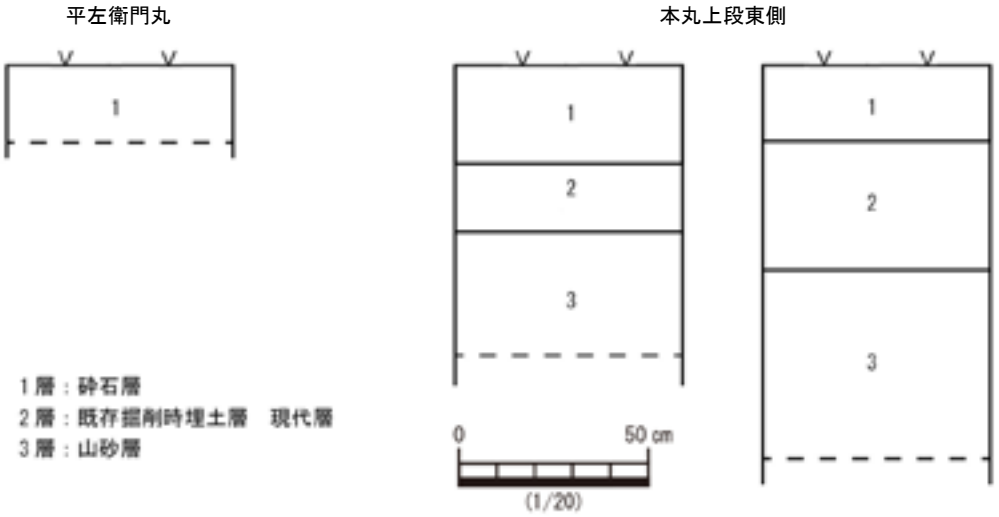
申請地位置図（■：申請地 □：特別史跡範囲）

成　果

立会の結果、掘削深度は平左衛門丸で約 25 ㎝、本丸上段の地点 1 では約 85 ㎝、地点 2 では約 95 ㎝であった。平左衛門丸では全て現代の砕石層内で収まる事を確認した。本丸上段東側では、既存の電気設備用枡設置時の掘削範囲内で収まることを確認した。



掘削地点位置図



土層略図

平左衛門丸掘削状況

本丸上段東側状況　（南から）

地点 1 土層断面　（南から）

地点 2 土層断面　（東から）

2. 熊本城行幸坂法面対策工事立会（歩道改良）

地　　点：本丸地区（行幸坂）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）1 月 12 日
申請番号：熊本城発第 375 号
許 可 日：令和 3 年（2021 年）2 月 12 日　　**原　因**：歩道改良工事
（令和 3 年（2021 年）7 月 6 日変更承認）　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）7 月 13 日～7 月 26 日
許可番号：2 文庁第 1690 号　　**担当者**：林田和人・金田一精・山下宗親

方　法・概　要

申請地は、本丸西側の行幸坂（江戸時代の南坂）である。南坂は、明治 35 年（1902）の明治天皇行幸に先立ち傾斜を緩やかにして行幸の馬車を通りやすくするために盛土が行われ、後に行幸を記念して名称を南坂から行幸坂と変更した。行幸坂は昭和 57 年度まで合わせて最大約 8 ｍの盛土工事が行われて現在に至っている。平成 28 年熊本地震後、備前堀側の斜面が崩れる危険性が生じたため、安全対策工事としてコンクリート製の張出し歩道構造物を設置する工事と、歩道の法肩浸食防止工事が計画された。張り出し歩道構造物の工事は幅約 4.6 ｍ、長さ約 80 ｍ、深さ約 1.3 ～ 1.5 ｍの範囲で行われ、歩道法肩浸食防止工事は地表面に土木シートを敷設し縁切りをしたうえで、盛土により調整を行い天端にコンクリートの打設を行うものである。工事は本質的価値に影響のない範囲で、熊本城文化財修復検討委員会で検討・了承されたものである。張り出し歩道構造物の工事に際し道路中央の掘削壁面について、壁面全ての写真撮影と図化を行った。法面については 5 ｍ間隔で土層を観察し、写真撮影等記録作成を行った。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

今回約 80 ｍの土層観察の結果、以下の 2 点について成果が得られた。一つ目は、現在の行幸坂から約 80 ㎝下にアスファルト舗装される以前の路面を発見したこと、二つ目は坂の造成方法が判明したことである。

基本層序は以下の通りとなる。

1 層：アスファルト（1-1）及び砕石（1-2）
2 層：戦後の嵩上げ土（2-1）、配管工事による山砂（2-2）
3-1 層：路面
3-2 層：路床、4 つの層に細分可能
3-3 層：暗灰黄色土（2.5YR4/3）を主体とする造成土、上段に存在
4 層：にぶい黄褐色粘土（10YR4/3）管状鉄含む、下段に存在
5 層：褐灰色土（7.5YR4/2）多量の瓦と少量の陶器含む、中段に存在
6 層：にぶい褐色土（7.5YR6/3）火砕流堆積物を主体とする造成土、主に中段に存在
7 層：黒褐色土（10YR3/1.5）均質な火砕流堆積物による造成土、下段に存在

行幸坂のアスファルト舗装以前の路面は№3 から№4 の間に 10.7 ｍと 2.4 ｍ、№4 から№5 の間に 2 ｍ、№5 以降に 4 ｍの路面を確認した。路面は 2 面あり、上の面は砕石を主体とし、下の面は火砕流砕石物を薄く敷いていた。№3 から№4 の路面直上には、戦後に坂を嵩上げした際の土層（2a 層）も残存していた。路面の下は 10 ～ 20 ㎝の厚さで均質の土が複数堆積していて、路床を意図したと判断できる。

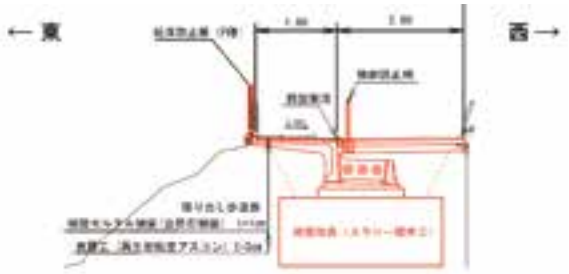
南坂から行幸坂へ造成した方法として、上段・中段・下段に 3 通りの方法が確認できた。上段は土砂が

斜めに堆積し、かつそれぞれの単位も厚いことから、上から土を落として造成を進めたと考えられる。この造成方法は 13 mの長さで確認した。中段は 10 ～ 20 ㎝の厚さの土層が緩やかな傾斜で堆積していた。また路面や路床も確認でき、路床の一番下の層には瓦が多く含まれていた。中段の造成方法は 33 mと最も長く確認している。下段は崖面を削ったような火砕流堆積物で一気に積み上げている。これは 21 mの長さで確認したほか、下段と中段の接点には水田耕作土のような粘土が 5 mほど見受けられた。

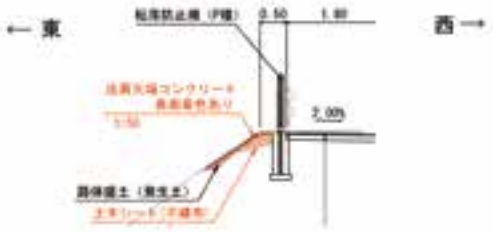
法面側の土層観察では下位に 6 層が認められ、その上に褐色砂質土を確認した。褐色砂質土は白川流域に堆積する阿蘇由来の火山灰土であり、南側対岸の花畑地区から持ち込まれた可能性が高い。

歩道法肩浸食防止工事については、盛土後法肩天端にコンクリートを打設する作業が行われ、既存の掘削範囲に収まることを確認した。

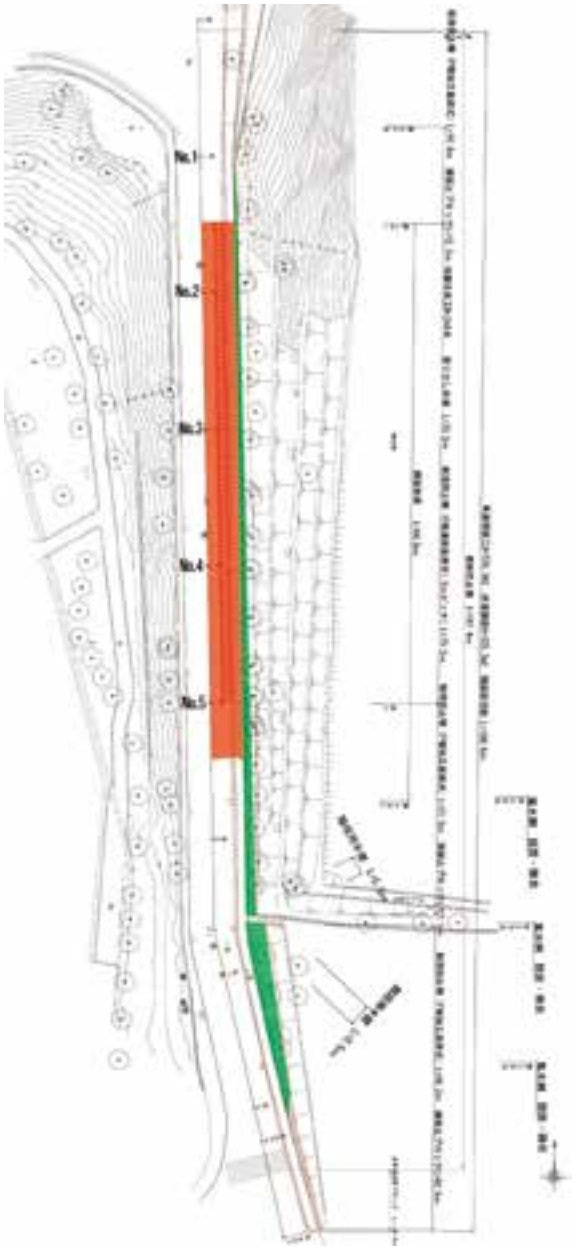
申請地位置図
（■：申請地 □：特別史跡範囲 ―：旧城域 ―：惣構）



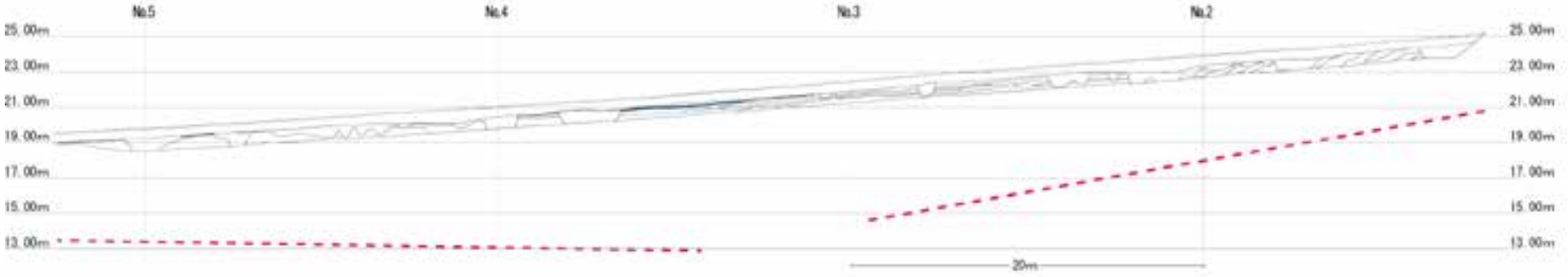
張り出し歩道構造物施工断面



法肩施工断面図



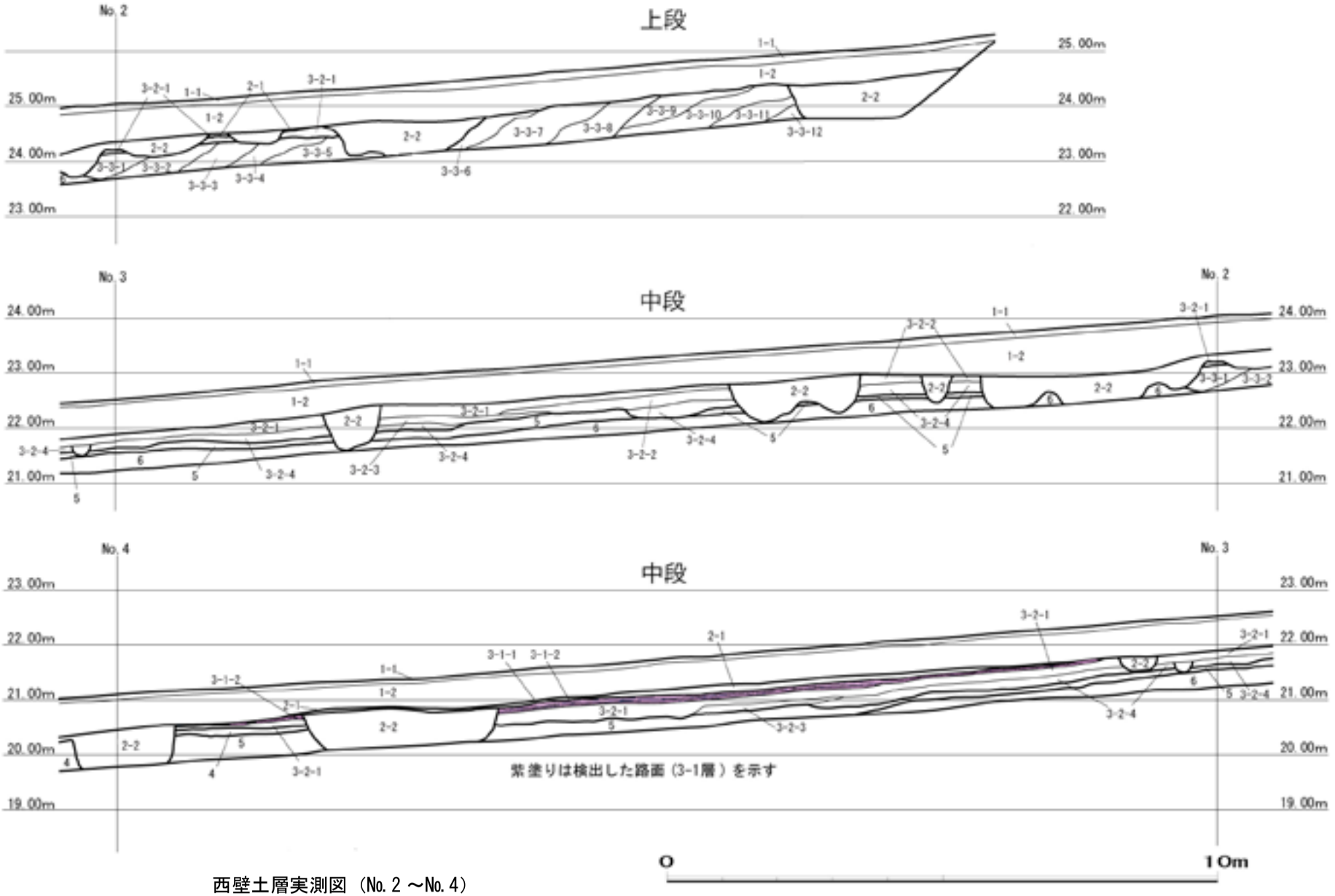
立会地点図



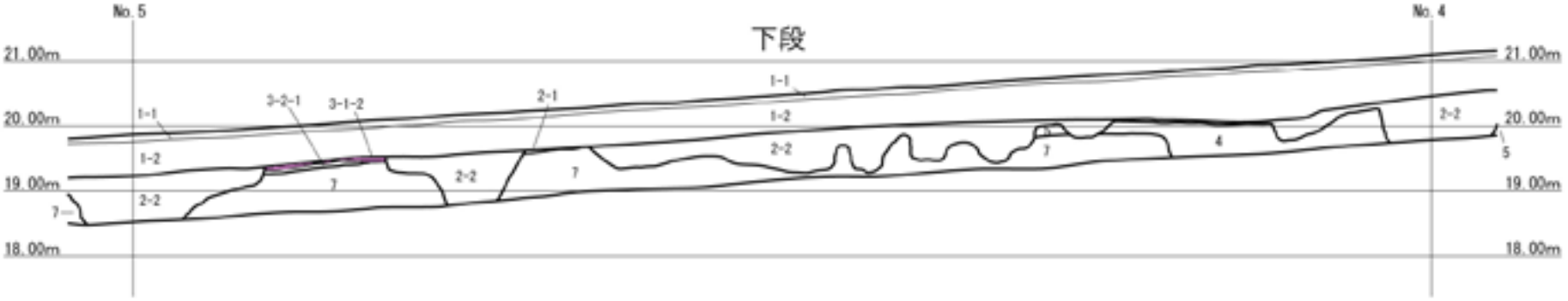
土層図は今回観察を行った範囲、青塗り部分は検出した路面

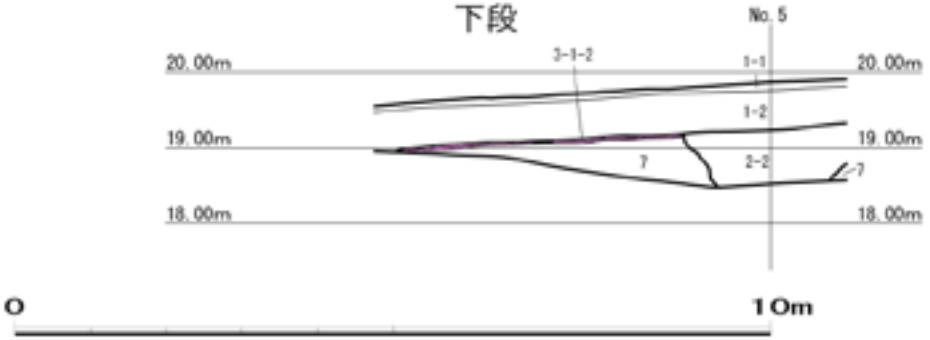
下破線（- - -）はボーリング調査の結果をもとにした南坂の推定位置

南坂と行幸坂の位置関係



西壁土層実測図（No. 2 ～No. 4）





1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
2-1 層：にぶい赤褐色～赤褐色土（5YR/5）
ローム土主体
昭和 30 年代～ 50 年代の路盤
2-2 層：下水道工事埋め戻しの山砂
3-1-1 層：明褐色色砕石
旧路面
表面に薄いシルト層が覆う
3-1-1 層：褐色シルト（5YR4/1）
火砕流堆積物を薄く敷いた下位の路面
3-2-2 層：にぶい黄褐色土（7.5YR6/3）
火砕流堆積物由来
しまりよい
3-2-2 層：暗褐色土（7.5RY5/2）
火砕流堆積物由来
しまりよい
3-2-3 層：にぶい黄橙色（10RY6/3）
火砕流堆積物由来
しまりよい
3-2-4 層：にぶい橙土（5RY6/4）
ピンク色の火砕流堆積物主体
しまりよい

3-3-1 層：暗オリーブ褐色土（2.5Y4/3）
3-3-2 層：暗灰黄色土（2.5Y5/2）
3-3-3 層：暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）
3-3-4 層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）
3-3-5 層：暗オリーブ褐色土（2.5Y4/3）
3-3-6 層：暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）
しまりよい
3-3-7 層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）
しまりよい
3-3-8 層：黄灰色土（2.5Y4/1）
しまり悪い
3-3-9 層：オリーブ褐色土（2.5Y4/3）
しまりよい
3-3-10 層：暗灰黄色土（2.5Y5/2）
しまりよい
3-3-11 層：暗灰黄色土（2.5Y5/2）
しまりやや悪い
3-3-12 層：暗灰黄色土（2.5Y5/2）
しまり悪い

4 層：にぶい黄褐色色粘土（10YR4/3）
水田耕作土のような粘土
5 層：褐灰色土（7.5Y4/2）
漆喰等含む
瓦・陶磁器等含む
6 層：にぶい褐色土（7.5YR6/3）
火砕流堆積物を主体とする造成土
7 層：黒褐色土（10YR3/1.5）
均質な火砕流堆物による造成土

西壁土層実測図（No.4 ～No.5）

掘削状況　（北から）

張り出し歩道部分掘削状況　（南から）

路面状況　（東から）

路面近景　（北東から）

現地確認

法肩工事盛土造成終了　（南から）

法肩工事盛土造成終了　（北から）

法肩工事コンクリート施工状況　（南から）

3. 平左衛門丸発掘調査

地　　点：本丸地区（平左衛門丸）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）2 月 12 日　　**原　因**：宇土櫓周辺石垣解体修理工事
申請番号：熊本城発第 425 号　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）6 月 2 日～
許 可 日：令和 3 年（2021 年）3 月 19 日　　令和 3 年（2021 年）9 月 22 日
許可番号：2 文庁第 1913 号　　**担当者**：嘉村哲也・佐伯孝央・中村幸弘・井大樹

方　法・概　要

平左衛門丸は本丸地区の小天守西側に位置し、曲輪内には築城以来唯一現存する多層櫓である宇土櫓がそびえる。今回の発掘調査はこの宇土櫓及び続櫓台を復旧するにあたり、その復旧方法の検討とともに本質的価値も含めた情報収集を目的として実施した。

整備に伴い何度か平左衛門丸の調査は行われているが、最も大規模なものは宇土櫓修理工事に伴う平成元年（1989）の調査である。曲輪内を縦断する 6 本の排水溝や漆喰張りの池、礎石等が検出され、今回調査のトレンチ配置はこれら既往の調査成果と、発掘前に実施した地中レーダー探査の成果を基に 3 本のトレンチを設定した。なお、調査の進捗に応じて熊本城文化財修復検討委員会に現地指導を頂き、掘削範囲・深度の変更を行った。

調査では平成 28 年熊本地震によって生じた地割れ、中世前期～明治時代にかけての造成土等を検出した。また、加藤期と考えられる版築層も確認され、今後の詳細な出土資料等の検討が期待される。

成　果

【1 トレンチ】

平左衛門丸北西隅に設定したトレンチである。調査以前から平成 28 年熊本地震による地割れが地表面に確認され、この地割れの深さ、石垣への影響を把握するため一辺 2 ｍのトレンチを設けた。調査区を 50 ㎝ほど水平に掘削した段階で、阿蘇 4 火砕流堆積物（Aso-4）を主体とした盛土が東側で確認され、地割れも相当深く生じていることが確認されたためこれ以上の掘削は行わなかった。地割れを断面で確認すると、やや弧を描くように深くなるにつれ西側石垣に向かって潜っていることが明らかになった。表土から 25 ㎝程の深さには瓦溜りがあり、九曜紋を含むことから細川期の層と考えられる。遺構としては礎石の抜き取り痕かと考えられる土坑を確認したが、土層精査の結果抜き取り痕ではなかった。

【2 トレンチ】

平左衛門丸西側に設定したＬ字形のトレンチである。平成元年（1989 年）の調査でも東西に延びるトレンチが設けられた部分であり、今回はこの旧トレンチを検出するためこの位置に設定した。旧トレンチは赤灰色の栗石交じりの土に掘り込まれ、山砂を主体として埋め戻されていた。旧トレンチ内部をさらに掘削し精査した結果、赤灰色土層の下から軍用品を含む炭化物層が検出されたため、赤灰色土層は明治時代の埋土であることが明らかになった。この明治時代の埋土の状況を明らかにするため、熊本城文化財修復検討委員会の現地指導を受け 2 トレンチから 1 トレンチ方向に調査区を拡張した。拡張部では明治時代の埋土の掘方を検出し、最深部では矢穴のある築石大の石材の集中をみた。

【3 トレンチ】

平左衛門丸南側に設定した 2 ｍ× 25 ｍのトレンチである。ここも平成元年の調査で東西に延びるトレンチが設けられた部分であり、旧トレンチを検出するためこの位置に設定した。旧トレンチの壁面精査から調査区西側は 2 トレンチで確認された明治時代の埋土が確認され、東側では黒色土と黄色土を交互に突

き固めた版築層を検出した。調査前の地中レーダー探査の成果から、トレンチ中程に埋没石垣と考えられる反応があったため、熊本城文化財修復検討委員会の現地指導を受け掘削範囲・深度の拡張を行った。拡張部分では明治時代埋土の下層から西方向へ傾斜する阿蘇４火砕流堆積物を主体とした凝灰岩礫層、またその下層から版築層を確認した。いずれの層からも明確な時期を示す出土遺物は確認されていないが、層の相対的な切り合い関係から加藤期の造成と考えられる。版築層の下からは水平に堆積する褐色土層を検出しており、中国産擂鉢、鉄滓、土師器、東播系捏鉢、青白磁四耳壺、無鎬連弁青磁碗等の出土があり、熊本城築城以前である中世前期の造成と考えられる。

申請地位置図
（■：申請地 □：特別史跡範囲 ―：旧城域 ―：惣構）

平左衛門丸発掘前状況　（南東から）

１トレンチ完掘状況　（南西から）

宇土櫓前地割れ状況　（南から）

2 トレンチ内旧トレンチ検出状況　（西から）

2 トレンチ内旧トレンチ掘削状況　（西から）

2 トレンチ拡張部土層　（南西から）

2 トレンチ拡張部集石状況　（東から）

3 トレンチ完掘状況　（西から）

3 トレンチ拡張部完掘状況

3 トレンチ拡張部北壁土層

3 トレンチ拡張部南壁土層

4. 国指定重要文化財熊本城平櫓下石垣解体工事立会

地　　点：本丸地区（東竹の丸・平櫓）
種　　類：文化財保護法 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）2 月 12 日　　**原　因**：石垣解体工事
申請番号：熊本城発第 425 号　　**期　因**：令和 3 年（2021 年）9 月 3 日～
許 可 日：令和 3 年（2021 年）3 月 19 日　　令和 4 年（2022 年）2 月 3 日
許可番号：２文庁第 1913 号　　**担当者**：佐伯孝央・中村幸弘・嘉村哲也

方　法・概　要

申請地は、東竹の丸北側に位置し、国指定重要文化財建造物平櫓が載る石垣である。本工事は平櫓下石垣復旧事業に伴うものであり、解体範囲については、熊本城文化財修復検討委員会で諮問及び現地指導により検討・了承されたものである。今回の解体中に一部追加で解体が必要となった部分についても委員会に諮り、承認を得た上で解体を行った。栗石直上の埋土の調査については、令和元年度と令和２年度の調査成果を参考にした。石垣の解体時には、築石同士の接点の把握と記録、背面の裏込めの状況の把握と記録を、発掘調査に準じた方法で行った。

成　果

＜昭和 28 年（1953 年）の平櫓解体修理について＞

平櫓は過去に屋根の葺き替えや部分修理が行われているが、最後に解体修理が行われたのは昭和 28 年である。当時は元の形状に復することを目的として現状変更許可申請が提出されている。昭和 53 年 (1978) 刊行の『重要文化財熊本城平櫓修理工事報告書』では、「第 3 節昭和二十八年の解体修理について　修理の概要（三）基礎石垣は積直しを行わず上端石の整備に止めた。」と記述があったため、解体前は天端石程度が修理されている想定であった。

解体調査の結果、昭和 28 年解体修理時に新設された礎石下の基礎コンクリート（『重要文化財熊本城平櫓修理工事報告書』には「(四)軸部の礎石は不動沈下を来していたので一旦掘起し部分的に根巻コンクリートによる補強を施した」とある）は約 1.3 ｍの高さがあり、コンクリート側面に吊り上げ用の穴がないことや設置状況から、コンクリートが現場打ちされたものである可能性が極めて高い。また、同じレベルでビニール等の近代以降の遺物や古い様相ではあまり混ざらない凝灰岩が栗石内に含まれていることからコンクリート打設に伴う掘削が石垣解体・積み直しに伴うものであったと考えられる。

解体範囲南側については、令和 2 年度の調査段階では江戸期と考えていた層位の下層よりコンクリート片が出土した。また、令和 2 年度に検出した現礎石下の旧礎石についてもコンクリートが出土した層位よりも上層に据えられていることから建物南側の柱を受ける礎石も昭和 28 年に掘り起こされ、据え直されたと考えられる。

＜各期の石垣背面の特徴＞

今回の解体調査では 4 種類の石垣の背面構造を確認した。昭和 28 年の修理に伴うと考えられる部分では 10 ～ 20 ㎝大の円礫主体であり、栗石同士のかみ合わせが悪い。熊本城石垣 6 期と考えられる部分では、2 種類見出した。すなわち、東側の一部で検出した栗石の様相は、15 ～ 20 ㎝大の角礫主体であり、栗石同士のかみ合わせが良い。平櫓中央から西側にかけて検出した栗石の様相は、15 ～ 20 ㎝大の角礫・円礫混在で土が混入し、石列を伴う。栗石の差異や石列の有無が時期差を示すものかは解体時出土遺物と石垣立面の様相などから今後検討する。

築石に接しないが、解体時の平面上の切り合い関係より構築当初と考えられる部分では、15 ～ 20 ㎝の円礫主体で、石列を伴う。

＜石列について＞

12 段目から 22 段目解体時にかけて石列を検出した。石列は 2 列で構成されており、石列と石列は 1.3 m～ 2.0 mの間隔がある。石列は 3 期の石垣と 6 期の石垣の背面で確認した。

3 期石垣と考えられる部分で検出した石列は 15 ～ 25 ㎝大の楕円状の円礫で構成されている。6 期と考えられる部分で検出した石列は角礫主体で円礫が混在する。また、解体範囲南側の盛土内でも石列を確認し、20 ～ 25㎝ の軽石が栗石内で確認した石列と接続している。盛土内の石列は栗石内の石列と一連のものである可能性が高い。そして、3 期と 6 期の境界部分では 3 期の石列の軸がずれるようにして 6 期の石列を確認した。

＜盛土について＞

解体範囲南側で曲輪造成時の可能性がある盛土を確認した。褐灰色と暗灰黄色の凝灰岩砂質土が互層状になっており、解体作業時に遺物は出土していないことから曲輪造成時の盛土である可能性がある。

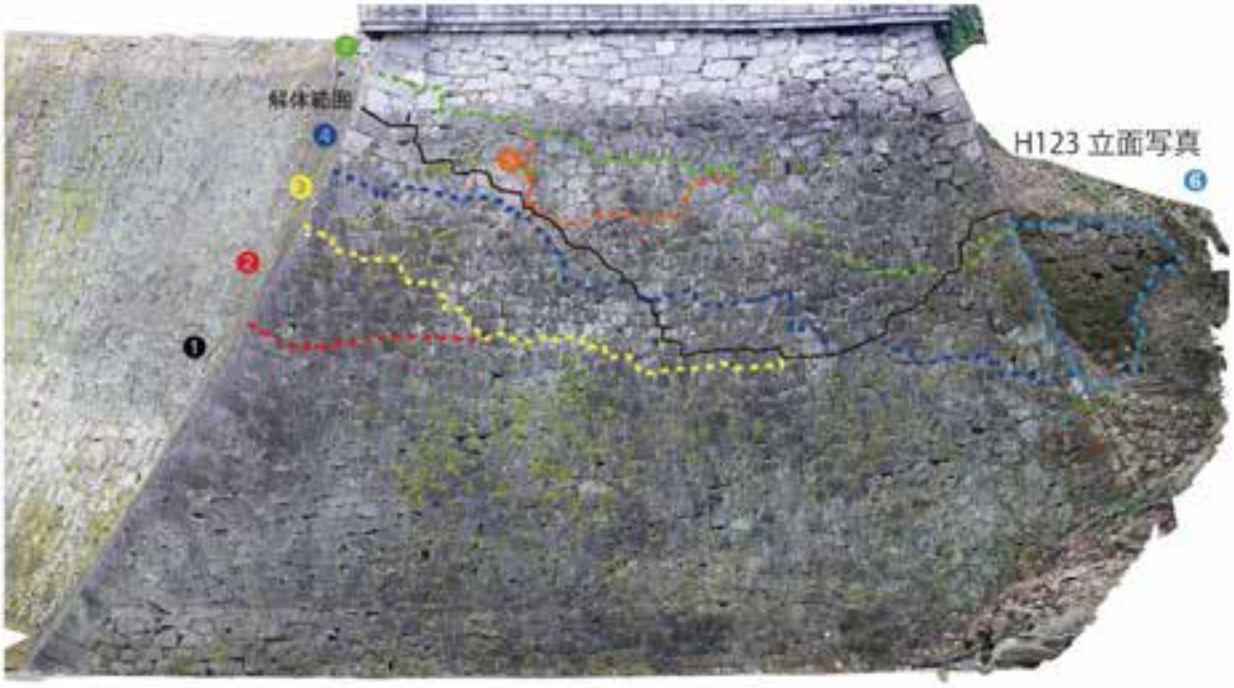
また、H122 と H438 の入隅部分に堆積していた盛土の調査を行い、出土遺物より明治 10 年（1877）以降のものであることを確認した。H438 前面に 30 ～ 40㎝ 大の石材が密集する部分を確認した。用途については現状不明だが、層序と出土遺物より、明治以前の遺構面を形成している可能性があったため、検出した石材以下の掘削は行わなかった。

申請地位置図

（■：申請地 □：特別史跡範囲 ―：旧城域 ―：惣構）

昭和 28 年設置のコンクリート基礎

平櫓解体時平面写真（18 段目解体前）※写真上が南



H121 立面オルソ図

＜石垣履歴把握について＞

❶ 熊本城石垣３期（1606～1607年）【構築当初】

❶/❷ 熊本城石垣２期（1599～1600）または３期（1606～1607年）【構築当初】

❸ 熊本城石垣５期（1625～1632年）または６期（1632～1671年）【修理１】
築石部：水平方向に横目地が通る一方形を呈した築石を積む

❹ 熊本城石垣６期（1632～1671年）【修理２】
築石部：斜め方向に横目地が通る一方形を呈した築石を積む

❹ 熊本城石垣６期（1632～1871年）【修理３】
築石部：横目地が通らない→非方形を呈した築石を多く積む

❺ 熊本城石垣６期（1632～1871年）【修理４】
築石部：水平方向に横目地が通る一方形を呈した築石を積む

❻ 熊本城石垣７期（1871～1960）【近代以降増築石垣】

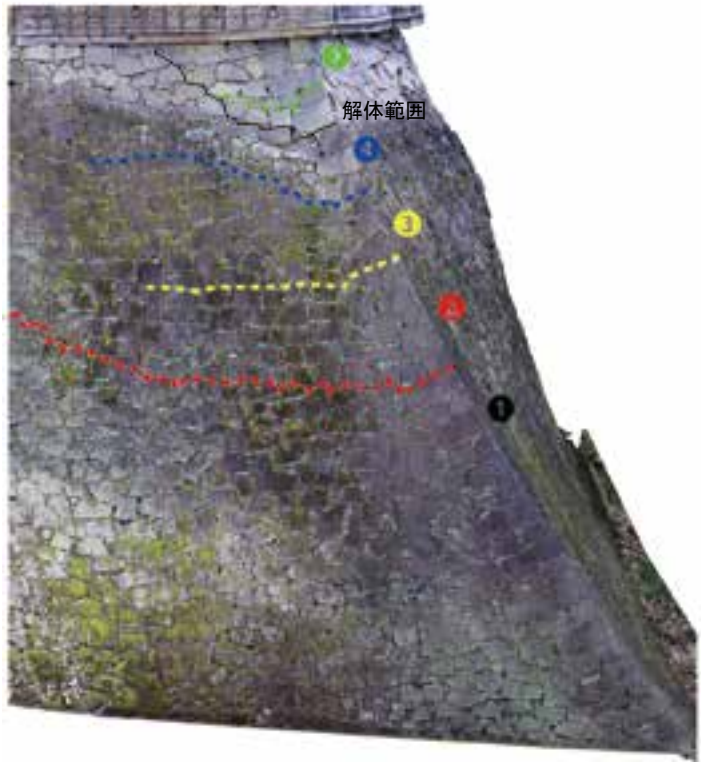
❼ 文化財修理（昭和29年）【修理５】
H22面石垣は明治期に撮影された写真と比較してほぼ変化なし

上：石垣解体成果に基づく石垣背面の時期

下：石垣解体成果に基づく修復履歴（H121）

※黒線：解体範囲

石垣解体成果に基づく修復履歴（H122）



石垣解体成果に基づく修復履歴（H124）

石垣解体成果に基づく修復履歴（H438）

※黒線：解体範囲

写真下　軽石による石列

15 段目解体時検出石列

H438 前検出石敷

5. 監物櫓下石垣解体工事立会

地　　点：二の丸地区（監物櫓）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）2 月 12 日
申請番号：熊本城発第 425 号
許 可 日：令和 3 年（2021 年）3 月 19 日
許可番号：2 文庁第 1913 号
原　　因：監物櫓下石垣解体修理工事
期　　間：令和 3 年（2021 年）7 月 12 日～
　　令和 3 年（2021 年）年 8 月 6 日
担当者：嘉村哲也・阿部泰之

方　法・概　要

監物櫓は、特別史跡指定範囲の北縁辺部に位置する。監物櫓の周辺は江戸時代を通じて上級家臣の屋敷地として利用されており、江戸時代における名称は「長岡図書預櫓」である。明治時代には櫓周辺の屋敷は解体が進み、陸軍歩兵第二十三連隊の施設が設置された。同部隊は明治 27 年（1894 年）に城外に移転、陸軍幼年学校が置かれるが、これも昭和 2 年に廃校となった。戦後、周辺は林野庁の所管となり、監物台樹木園として現在に至っている。

申請地位置図
（■：申請地 □：特別史跡範囲 ―：旧城域 ―：惣構）

監物櫓が位置する石垣（以下､監物櫓下石垣）は、新堀橋に臨む 2 面（以下、城外側石垣）と監物台側の 14 面（以下、城内側石垣）で構成される。外郭側石垣は安山岩質の石材を用いて構築されており、2 面とも江戸期に 2 回の修理を受け、明治期以降は修理がされていないことが修理履歴の検討結果からわかっている。城内側石垣は凝灰岩質で、直方体の切石や転用材とみられる石材が多い。令和元年度に実施された確認調査の結果から、近代以降に設置されたことがわかっている。

今回の工事立会の目的は、本質的価値を構成する枢要の要素のき損を防ぐとともに、各石垣の時期及び修理履歴等を確認するものである。立会時は石垣の飼い石・裏込め・背面の土層に留意するとともに、解体した築石各面及び接点等の写真撮影を行った。

なお、調査区平面及び土層断面の記録については写真測量による作図を行うとともにオルソ写真を作成している。

石垣解体工事は崩落石材及び石垣上の挿し石を回収したうえで熊本城文化財修復検討委員会で承認された範囲内で行われた。築石等の揚重を除き全て人力で行った。掘削幅は解体する築石の背後 30 ㎝まで、深さは解体する築石の背面が露出するまでとし、解体に必要な最小限の範囲に留めた。

成　果

外郭側石垣

新堀橋を望む石垣 N79・80 の背面では、解体の結果、上部から灰黄褐色土層（第 1 層。第 1 層の中には第 2 層としてにぶい橙色を呈する粘質土が認められたが、面的に広がるものではなく第 1 層構築時にブロック状に入ったものと考えられる）、その直下で裏込めの栗石層である第 3 層が検出された。

栗石は割石が多く、間隙が目立つ。間隙については地震によるゆるみの可能性もあるが、飯田丸五階櫓、要人櫓下石垣における江戸時代修理範囲の裏込めの様相と類似しており、江戸時代理石垣の特徴とみたい。なお、石垣 N79・80 は相互に連続する石垣であり、第 1 層と第 3 層は共通するものと考えられる。N79 背面の土層では現在櫓台上に確認できる束石が第 1 層上に乗ることが確認できた。

出土遺物より、昭和 29･30 年（1954･1955 年）に行われた全解体修理時に整地された層の可能性がある。第 2・3 層から遺物は出土しなかった。掘削深度は深い地点で 70 ㎝を測る。

曲輪側石垣

監物台側の石垣で解体の対象となったのは石垣 N83 ～ 88、90 ～ 96 である。うち N91 には東端にトレンチを設定し根石の確認・土層の観察及び N95 西側面の確認を行った。

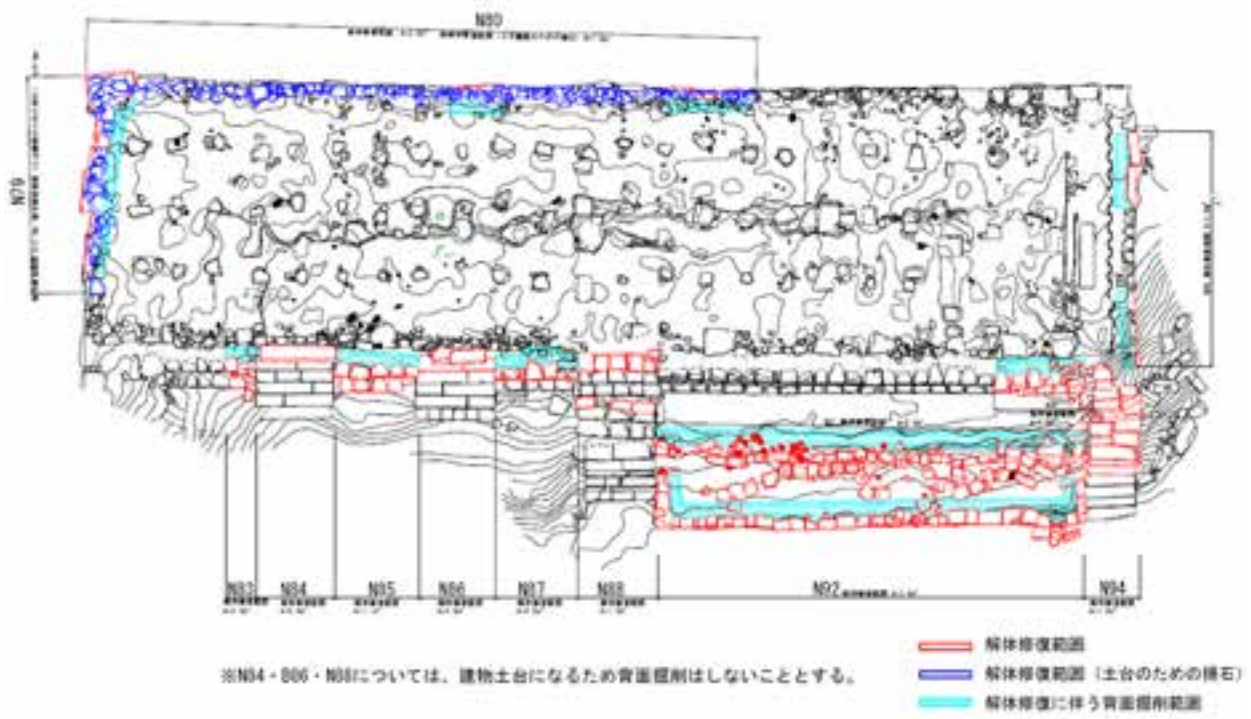
石垣 N90 の背面では、避雷針掘方（暗褐色土、第 1 層）、これに切られる形で灰黄褐色土層（第 2 層、N90 の裏込め）、橙色土層（第 3 層）、灰黄褐色土層（第 4 層）が確認できた。第 2 層は隣接する石垣 N96 の背面に続いており、N96 は N90 とほぼ同時に構築されたと推測される。第 3・4 層は阿蘇 4 火砕流を主体とするしまりのよい粘質土で近代以前の盛土層と推測され、N90 構築時に南面を削られている。掘削深度は深い地点で 60 ㎝である。なお、石垣裏込めの第 2 層からはレンガや瓦片がほとんど出土せず、後述する N91・92 とは対照的である。

N91 東端トレンチでは上から黒褐色土層（第 1 層、現代の盛土）、黒褐色土層（第 2 層、レンガ・瓦・モルタル片を非常に多く含む。N91 の裏込め）、黒褐色土層（第 3 層、N91 根石設置時の盛土）、黄橙色土層（第 4 層）が確認できた。第 4 層は阿蘇 4 火砕流を主体とするしまりのよい粘質土で、N91 構築時に南面を削られており近代以前の盛土と考えられる。掘削深度は深い地点で 40 ㎝である。

櫓台の城内側は、江戸時代の絵図から芝土居状であったと考えられるが、トレンチ及び N91 背面の観察からは石垣構築以前の表土層は確認できず、N90・91 の構築時に削られ、失われたものと推測される。また、N91・92 の背面からはレンガ・瓦片が多量に出土し、令和元年度確認調査の成果と併せ、近代以降に構築されたと考えられる。N90 は背面にレンガ･瓦片をほとんど含まないが、石垣を構成する石材の石質･形態は N91・92 と同一であり、構築時期に差はないものと推測される。

N91・92 背面から出土したレンガにはモルタルが面的に付着し、レンガ積み建物の一部と考えられる。監物櫓が位置する監物台一帯は昭和 2 年（1927 年）まで熊本陸軍地方幼年学校が置かれており、閉校後解体された施設の一部を裏込めに転用した可能性がある。また、築石の凝灰岩は転用材が多く、モルタルが付着するものがあることから、校舎等に用いられていた部材の一部であった可能性もある。

遺物は今後水洗、接合等の作業を行ったうえで詳細な内容の把握・時期の検討等を行う予定である。



石垣解体・復旧範囲位置図（上が北）

N79 解体範囲　（北から）

N79 解体範囲東壁土層　（北西から）

1：10YR4/2 灰黄褐　昭和 29・30 年修理時の整地土か

3：10YR3/1 黒褐　　裏込めの栗石層

N79 解体範囲南端部　（北から）

N79 解体範囲東端部　（西から）

N80 解体範囲中央部南壁　（北から）

1：10YR4/2 灰黄褐　昭和 29・30 年修理時の整地土か

3：10YR3/1 黒褐　　裏込めの栗石層

N80 解体範囲中央部南壁　（北から）

N91 東端トレンチ北壁上部　（南から）

1：10YR3/2 黒褐　現代の盛土

2：10YR2/2 黒褐　レンガ・瓦片等多く含む　N91 裏込め

N91 東端トレンチ北壁下部　（南から）

3：10YR3/1 黒褐　N91 根石設置時の盛土

4：10YR8/6 黄橙　阿蘇 4 火砕流主体盛土層　江戸時代か

N90 東端北壁　（南から）

1：10YR3/3 暗褐　　避雷針設置時掘方

2：10YR4/2 灰黄褐　N91・96 裏込め

3：7.5YR6/6 橙　　阿蘇 4 火砕流主体盛土層　江戸時代か

4：10YR4/2 灰黄褐　阿蘇 4 火災流主体盛土層　江戸時代か

N91 背面北壁　（南から）

2：10YR2/2 黒褐　レンガ・瓦片等多く含む　N91 裏込め

3：10YR8/6 黄橙　阿蘇 4 火砕流主体盛土層　江戸時代か

6. 国指定重要文化財熊本城監物櫓下石垣解体修理工事に伴う放水銃ポンプ室周り石積等撤去工事立会

地　　点：二の丸（監物櫓周辺）

種　　類：文化財保護法第 125 条

申 請 日：令和 3 年（2021 年）2 月 12 日

申請番号：熊本城発第 425 号

許 可 日：令和 3 年（2021 年）2 月 17 日

許可番号：指令（文化財）第 65 号

原　　因：放水銃ポンプ室周り石積み等撤去工事

期　　間：令和 3 年（2021 年）10 月 19 ～ 22 日・11 月 1 日

担当者：嘉村哲也

方　法・概　要

国指定重要文化財監物櫓は二の丸地区北側に位置している。その重要文化財建造物を火災から守るための放水銃ポンプ室は監物櫓南東にあり、ポンプ室周りを石積み等で覆ったため、湿気により機材が老朽化した。ポンプ室内の湿気対策を行い、機材の老朽化を防ぐため工事が計画された。ポンプ室は高さ 2 m、径 4 mほどの盛土で覆われていた。ポンプ室入口付近より東に 2 m、高さ約 1.8 mの範囲で石が積まれており、石積み等の撤去範囲は約 100 ㎡である。石積み等の解体及び掘削については熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、石積み背面に栗石はなく、背面は盛土のみであることが判明した。盛土はコンクリート片、ガラス片等を含んでいる。撤去範囲は平成 11 年（1999 年）のポンプ室施工に伴う盛土及び石積み範囲であることを確認した。盛土撤去直下はレンガ片等を含む造成土である。石積みに使用されていた石材は輝石安山岩で、矢穴が確認できるものや、ペンキによる番付がなされているものがあるが、城内の石垣に用いられていたものか不明である。

掘削地点位置図

撤去前現況　（東から）

撤去前現況　（南から）

石積み状況　（北から）

盛土土層断面　（西から）

撤去作業状況　（西から）

撤去後　（南西から）

7. 熊本城解説板更新業務工事立会

地　　点：古城地区・二の丸地区（古城堀端公園・法華坂脇）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）3 月 3 日
申請番号：城調発第 131 号　　**原　因**：解説板設置
許 可 日：令和 3 年（2021 年）3 月 19 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）4 月 15 日
許可番号：指令（文化財）第 71 号　　**担当者**：山下宗親

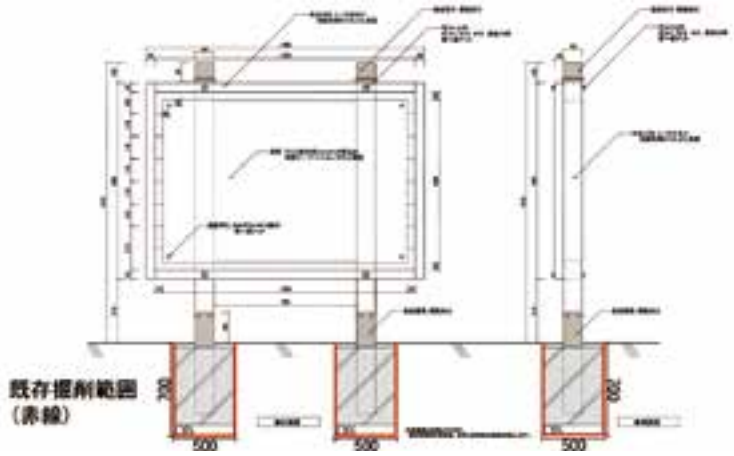
方　法・概　要

申請地は、古城地区の古城堀端公園と二の丸地区の法華坂脇に位置する。前者は江戸時代も水堀が存在した場所である。後者は江戸時代も現在と同じく法華坂にあたるが、現在とは異なり直線的な坂ではなく蛇行した坂であった。解説板更新業務に伴い、古城堀端公園と法華坂脇にある既存解説板の支柱に腐食被害を確認したことから、支柱の交換が計画された。内容は支柱の既存掘削範囲内を掘削し、新規の支柱に交換するものである。一辺約 40 ㎝、深さ約 70 ㎝の範囲で、それぞれ 2 か所の掘削が予定されていた。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、手作業で行われた。

成　果

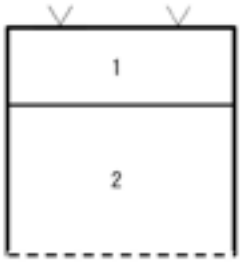
古城堀端公園の掘削深度は約 60 ㎝、法華坂脇の掘削深度は、約 50 ㎝であった。古城堀端公園では表土層の下に現代のコンクリート層を確認し、法華坂脇ではコンクリート片、礫などを含む土層を確認した。いずれも、既存の解説板支柱を設置した時の土層である。

申請地位置図（■：申請地 □：特別史跡範囲 ―：旧城域 ―：惣構）



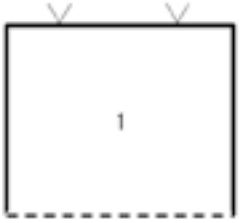
既存掘削範囲

古城堀端公園



1層：表土層
2層：コンクリート層

法華坂脇



1層：表土層
コンクリート片、礫などを含む

土層略図

古城堀端公園　掘削状況

法華坂脇　掘削状況

古城堀端公園　土層断面

法華坂脇　土層断面

8. 熊本城平左衛門丸排水設備修繕工事立会

地　　点：本丸地区（平左衛門丸）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）3 月 26 日
申請番号：熊本城発第 526 号　　**原　因**：排水設備修繕
許 可 日：令和 3 年（2021 年）3 月 30 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）4 月 12 日
許可番号：指令（文化財）第 80 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

申請地は、本丸西側頬当御門から平左衛門丸へ通じる園路に位置する。江戸時代は通路として利用された場所である。排水設備に機能不良が生じたため、修繕のため枡蓋 2 か所、一辺約 1.2 ｍの範囲の掘削が予定されていた。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

工事立会の結果、枡蓋の修繕工事は既存の掘削範囲内で実施され、掘削深度は約 10 ㎝であった。工事立会の結果、掘削範囲は全て既存のアスファルト・砕石層内に収まることを確認した。

申請地位置図（■：申請地　□：特別史跡範囲）

掘削地点位置図

掘削状況　（北から）

掘削断面　（北から）

9. 熊本城西櫓門前汚水槽電気設備修繕工事立会

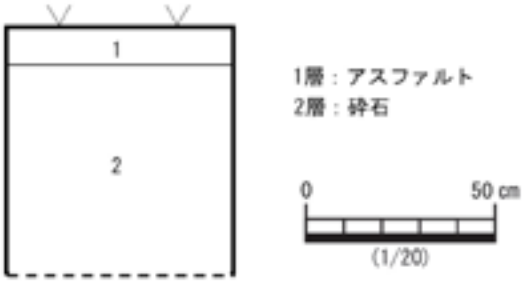
地　　点：本丸地区（西櫓門西側）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）4 月 2 日
申請番号：熊本城発第 9 号　　**原　因**：電気設備修繕
許 可 日：令和 3 年（2021 年）4 月 7 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）4 月 18 日
許可番号：指令（文化財）第 2 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

申請地は西櫓門西側の、飯田丸と行幸坂（江戸時代の南坂）をつなぐ陸橋の西側に位置する。江戸時代も現在同様陸橋部分にあたる。汚水槽電気設備の一部破損に伴い修繕工事が計画された。工事は、既存の配管経路部分の掘削を伴う電気設備の更新で、長さ約 4.2 m、幅約 80 ㎝の掘削が予定されていた。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

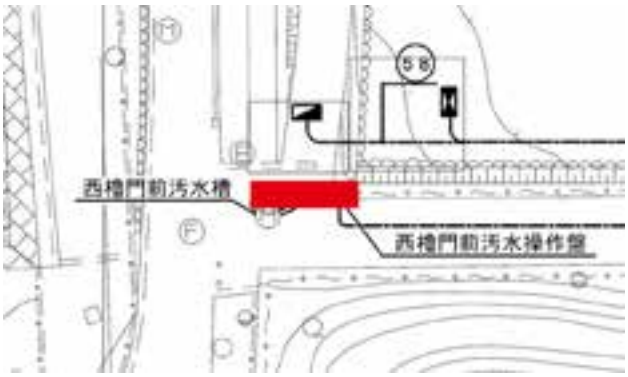
立会の結果、掘削深度は約 65 ㎝であった。約 10 ㎝のアスファルトの下は全て砕石層で、今回の掘削は既存の掘削範囲内に収まることを確認した。



土層略図

申請地位置図
（■：申請地　□：特別史跡範囲　—：旧城域　—：惣構）

完掘状況　（西から）



掘削地点位置図

土層断面　（南から）

10. 熊本城宇土櫓放水銃用電動弁枡修繕工事立会

地　　点：本丸地区（平左衛門丸）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）4 月 28 日
申請番号：熊本城発第 73 号　　**原　因**：消火設備修繕
許 可 日：令和 3 年（2021 年）5 月 7 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）6 月 3 日
許可番号：指令（文化財）第 7 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

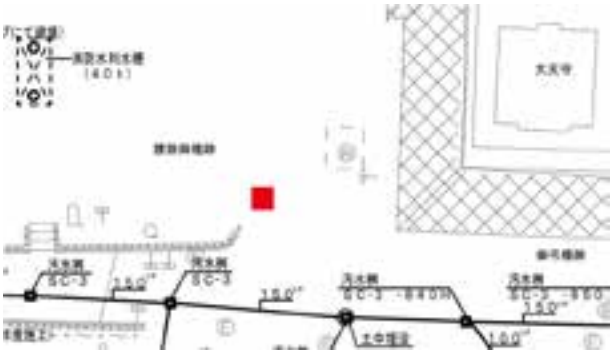
申請地は平左衛門丸の南側で、江戸時代に腰掛蔵が存在した場所である。宇土櫓放水銃用電動弁枡が使用不能となったため、一辺 1.5 mの範囲で修繕工事が計画された。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、掘削深度は約 26 ㎝であった。アスファルト・砕石層を確認し、修繕工事は、全て既存の掘削範囲内に収まることを確認した。

申請地位置図（■：申請地　□：特別史跡範囲）

掘削状況　（東から）


掘削地点位置図

掘削断面　（東から）

11. 熊本城二の丸広場雨水排水管等更新工事立会

地　　点：二の丸地区（二の丸広場）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）5 月 19 日
申請番号：熊本城発第 107 号
許 可 日：令和 3 年（2021 年）7 月 9 日
（令和 4 年（2022 年）1 月 12 日変更承認）
許可番号：指令（文化財）29 号
原　　因：雨水排水管、暗渠排水管、境界ブロック、給水管更新工事
期　　間：令和 3 年（2021 年）12 月 9 日～令和 4 年（2022 年）3 月 1 日
担 当 者：山下宗親・金田一精

方　法・概　要

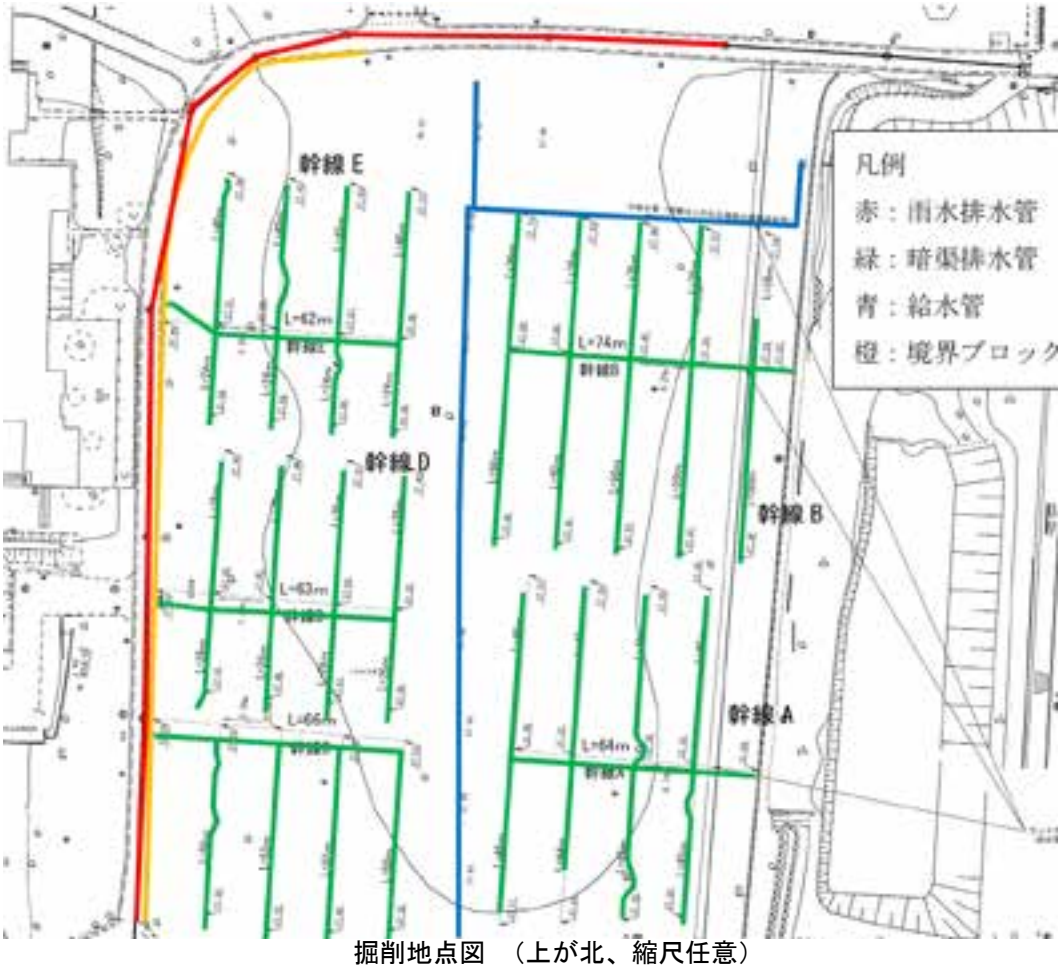
申請地は、二の丸地区の二の丸広場と広場の脇を通る園路部分である。江戸時代には、武家屋敷と屋敷地の間を通る通路が存在していた。二の丸広場内の雨水排水機能の低下に伴う暗渠排水管更新、園路の雨水排水管・水路内蔵型境界ブロックの改修工事と、広場中央の給水管の改修工事が計画された。

申請地位置図（■：申請地 □：特別史跡範囲）

広場内の暗渠排水管更新工事では、既存暗渠排水管敷設部分を幹線 A から E と呼称し、幹線 A 区：延べ 420 m、幹線 B 区：延べ 478 m、幹線 C 区：延べ 271 m、幹線 D 区：延べ 319 m、幹線 E 区：延べ 318 mの長さで、幅約 40 ㎝の掘削が予定された。給水管改修工事では、長さ約 320 m、幅約 40 ㎝の範囲で掘削が予定された。園路部分の雨水排水管改修工事では、幅約 1.1 m、長さ約 370 mで掘削が予定された。境界ブロック改修工事では、長さ約 255 m、幅約 1 mの範囲で掘削が予定された。いずれも既存管埋設時の掘削範囲内に収まる計画で、熊本城調査研究センター職員立会のもと既存の給排水管を確認しながら重機で掘削を行った。

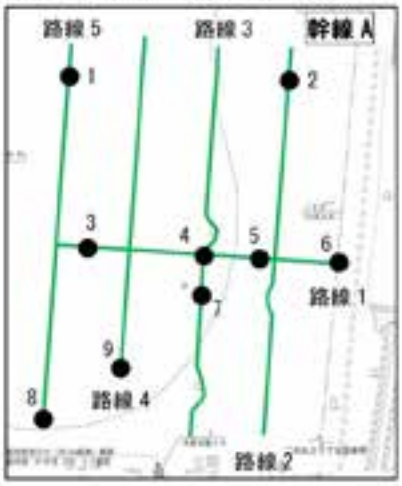
成　果【暗渠排水管更新工事】

暗渠排水管更新工事の掘削深度は約 45 ㎝で、約 10 mごとに幹線 A 区で 40 地点、幹線 B 区で 47 地点、幹線 C 区で 24 地点、幹線 D 区で 25 地点、幹線 E 区で 28 地点の土層観察を実施した。ほとんどの地点で平成 6 年施工暗渠排水管設置時の埋設土（山砂・砕石層）であった。表土の下に、昭和 40 年代に実施された二の丸広場整備事業に伴う可能性が高い整地層を確認した。また幹線 A・B 区では昭和 40 年代の整地層の下から、昭和 2 年（1927 年）から昭和 40 年代まで二の丸広場に存在していた、旧陸軍の建物のレンガ基礎を確認した。昭和 30 年代の航空写真にも写る南北方向に長大な建物で、今回全長 129 mと確認できた。今回の工事立会では、江戸時代の遺構は確認していない。また、昭和 50 年（1975 年）調査時（『熊本城二の丸・三の丸遺跡調査報告書』に報告）の遺構の追認もできていない。



掘削地点図　（上が北、縮尺任意）

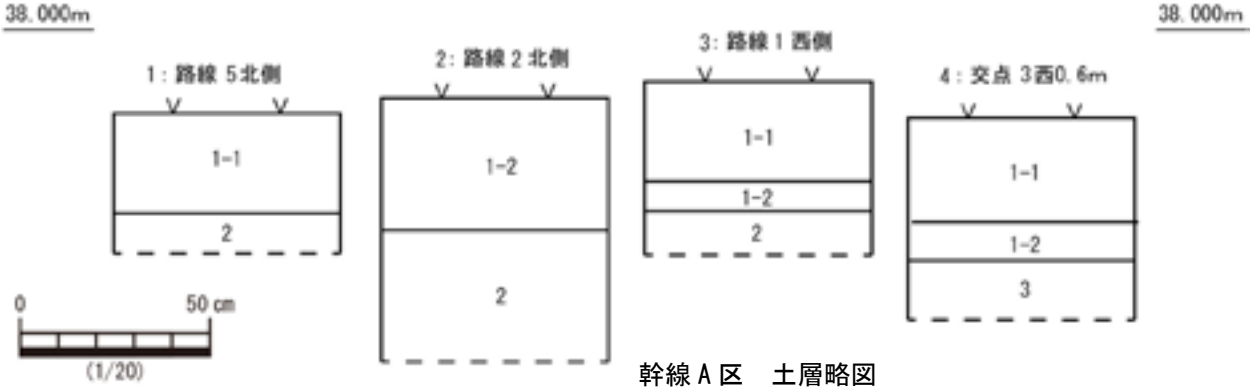
〔暗渠排水管〕＊上が北、縮尺任意



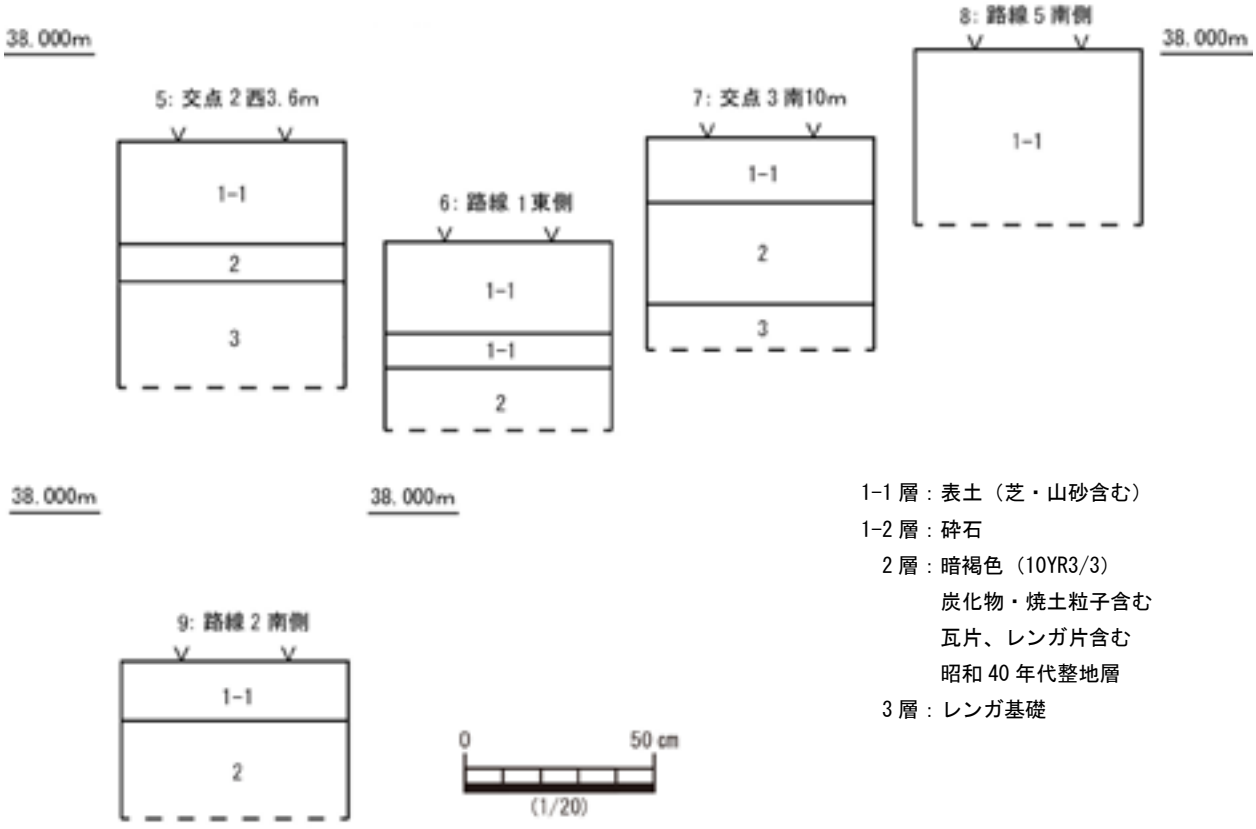
凡例

各幹線東西方向暗渠を「路線１」、南北方向暗渠を東から西に「路線２」「路線３」の順で呼称。さらに路線１と路線２が交わる箇所を「交点２」、路線３が交わる箇所を「交点３」（以下交点 4、5、6 ）とし、交点を基点として工事立会を実施した。

各路線端部の土層断面（黒丸部分）を記載する。



幹線 A 区　土層略図



幹線 A 区　土層略図

幹線 A　2：路線 2 北側　土層断面

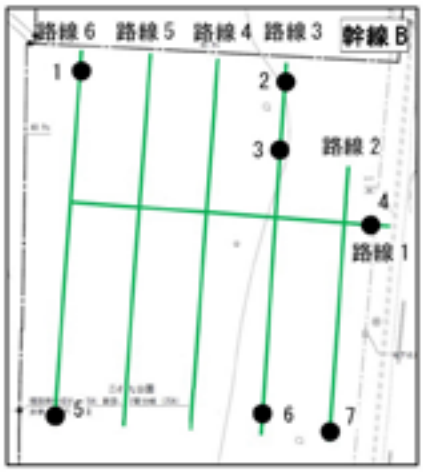
幹線 A　4：交点 2 西 3.6 m地点　レンガ基礎

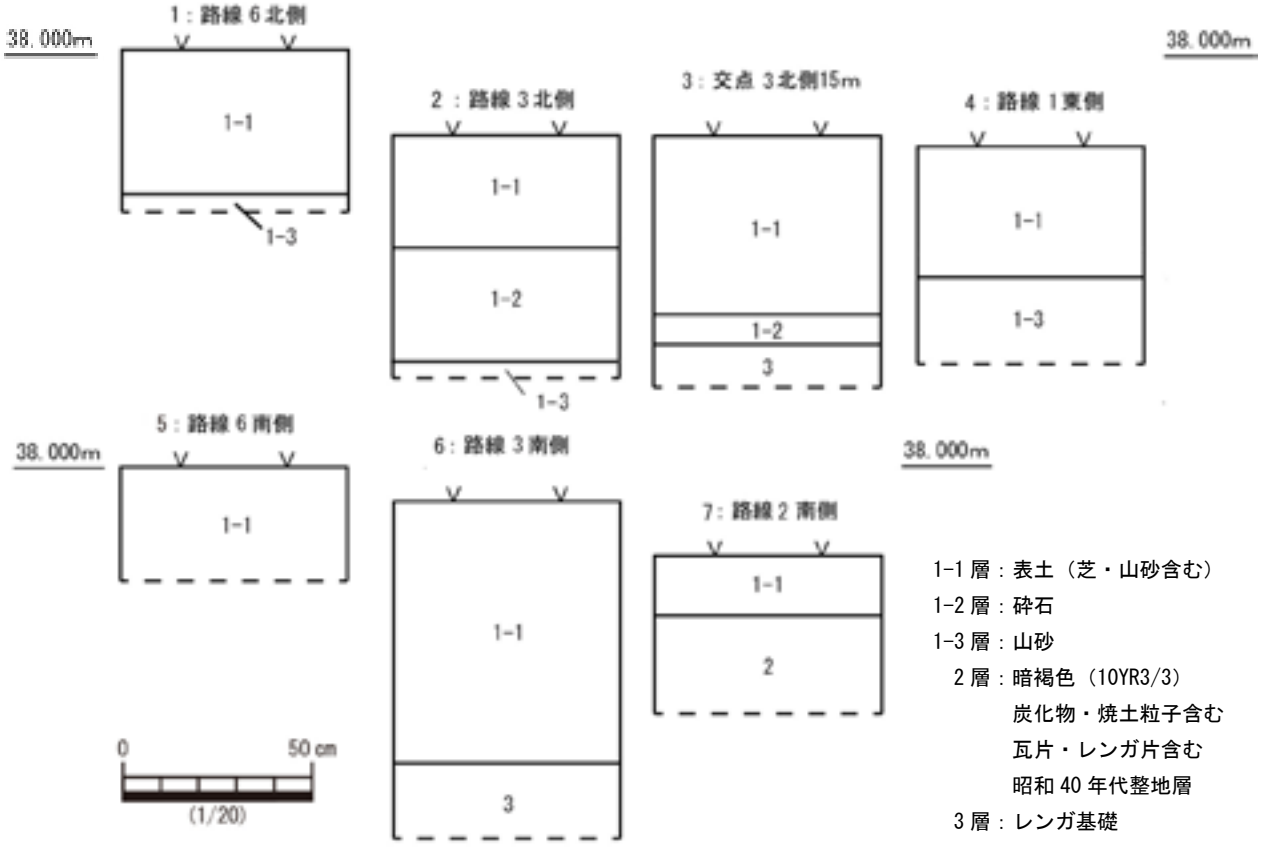
幹線 A　7：交点 3 東 0.6 m地点　レンガ基礎

幹線 A　8：路線 2 南側　土層断面

幹線 A　路線 5 北側　土層断面

幹線 A　路線 5 南側　土層断面





幹線 B 区　土層略図

幹線 B　2：路線 3 北側　土層断面

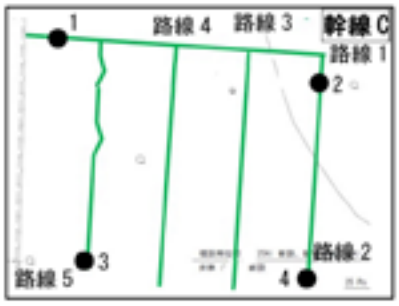
幹線 B　3：交点 3 北 15 m　レンガ基礎

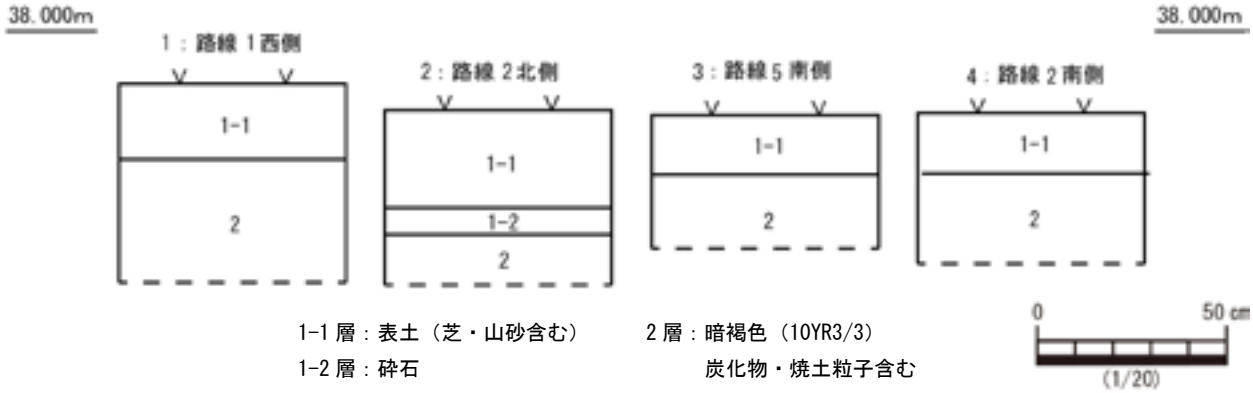
幹線 B　6：路線 3 南側　レンガ基礎

幹線 B　路線 4 北側　土層断面

幹線 B　路線 4 南側　土層断面

幹線 B　路線 5 南側　土層断面



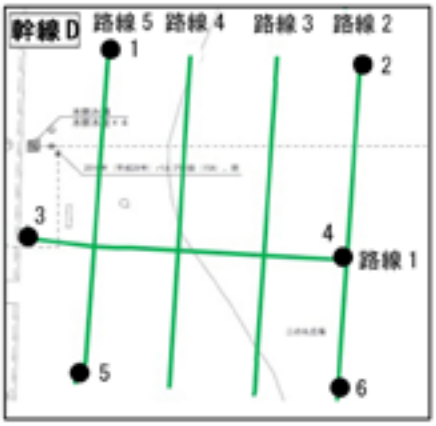


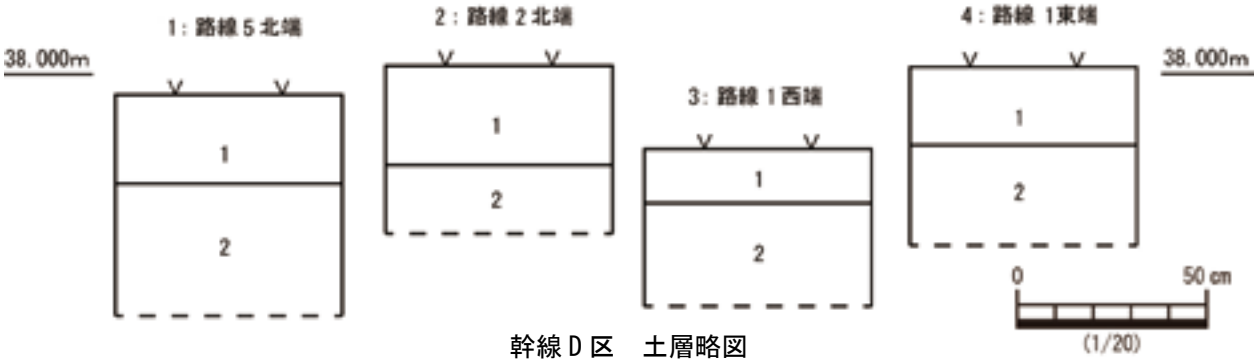
1-1 層：表土（芝・山砂含む）
1-2 層：砕石
2 層：暗褐色（10YR3/3）
炭化物・焼土粒子含む
瓦片、レンガ片含む
昭和 40 年代整地層

幹線 C 区　土層略図

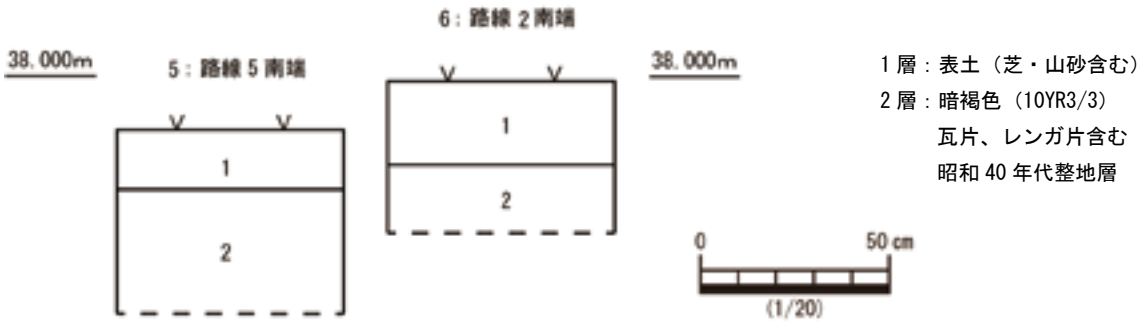
幹線 C　2：路線 2 北側　土層断面

幹線 C　3：路線 5 南側　土層断面





幹線 D 区　土層略図



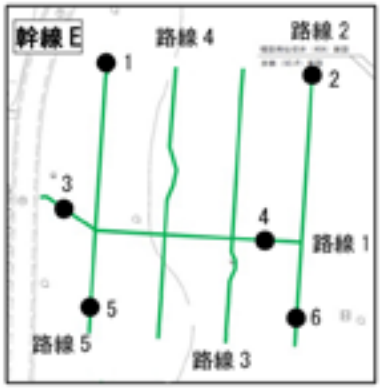
幹線 D 区　土層略図

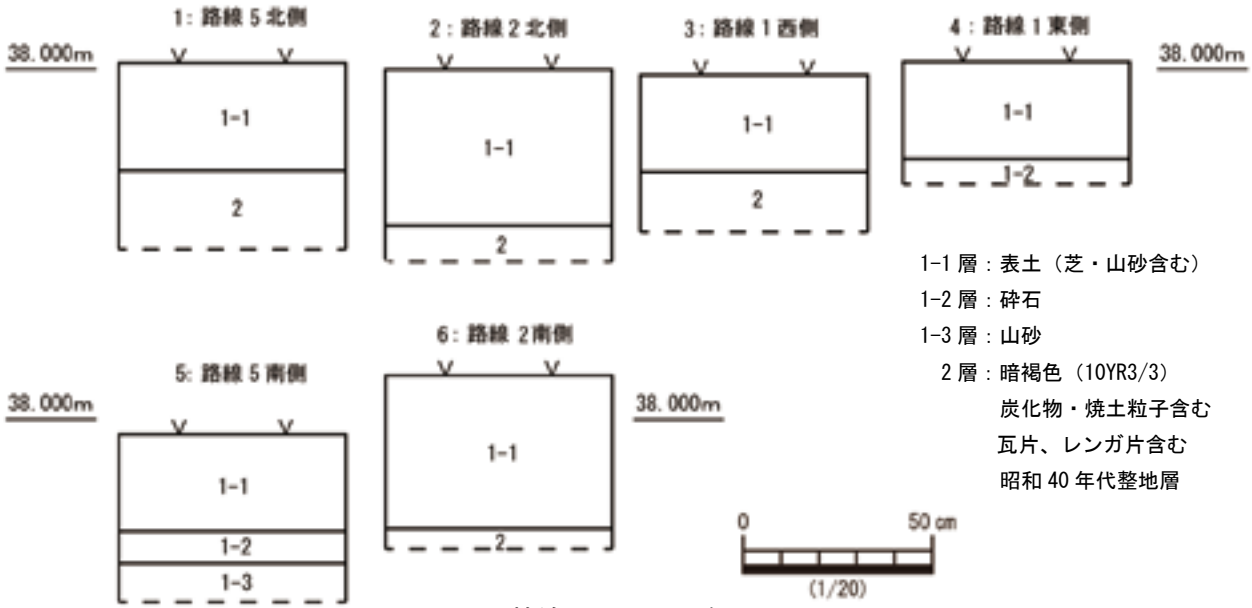
幹線 D　1：路線 5 北側　土層断面

幹線 D　2：路線 2 北側　土層断面

幹線 D　5：路線 5 南側　土層断面

幹線 D　6：路線 2 南側　土層断面





幹線Ｅ区　土層略図

幹線Ｅ　1：路線５北側　土層断面

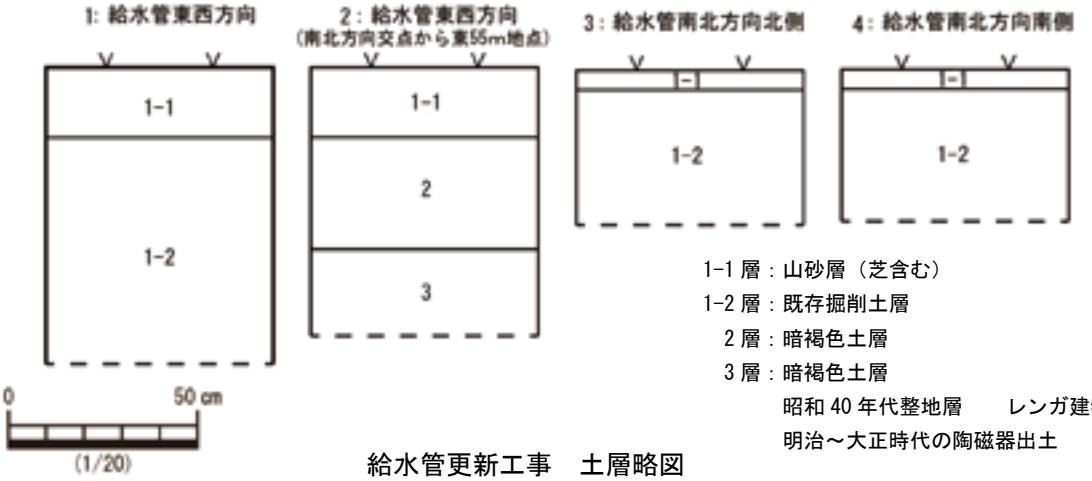
幹線Ｅ　2：路線２北側　土層断面

幹線Ｅ　5：路線５南側　土層断面

幹線Ｅ　6：路線２南側　土層断面

成　果【給水管更新工事】

給水管更新工事の掘削深度は、東西方向で約 90 ㎝、南北方向は約 35 ㎝であった。東西方向の土層は以下の通りである。1 層：山砂層（芝含む）の下に、2 層：既存掘削土層を確認した。2 地点において表土層の下から昭和 40 年代の整地層を確認し、下位に明治時代から大正時代の整地層と考えられる土層を確認した。江戸時代の遺構は確認していない。南北方向については既存掘削囲内の掘削に収まり、全て 1 層を確認した。



1-1 層：山砂層（芝含む）
1-2 層：既存掘削土層
2 層：暗褐色土層
3 層：暗褐色土層
昭和 40 年代整地層　　レンガ建物整地層
明治～大正時代の陶磁器出土

給水管更新工事　土層略図

1：給水管東西方向　土層断面

2：給水管東西方向　南北交点東 55 m地点　土層断面

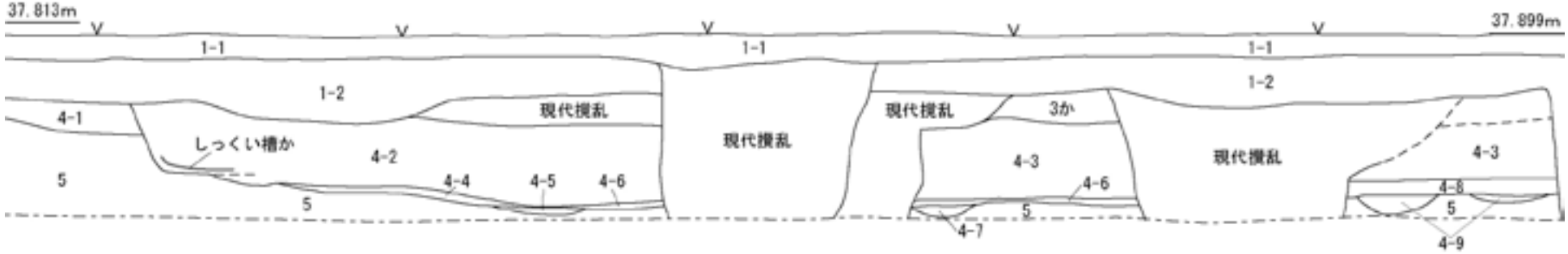
3：給水管南北方向北側　土層断面

4：給水管南北方向南側　土層断面

成　果【雨水排水管更新工事】

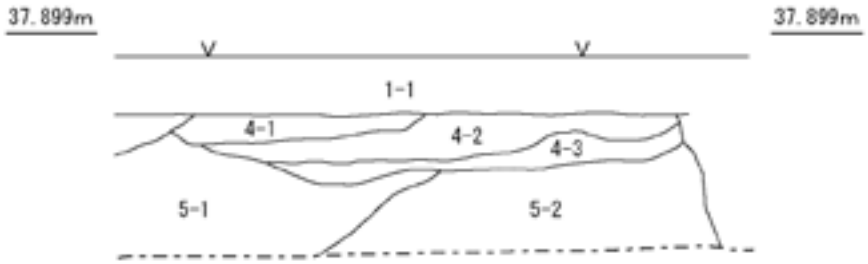
雨水排水管更新工事の掘削深度は約１ｍ～1.２ｍで、掘削は既存掘削範囲内で行われた。現路面の下で現代の整地層と江戸時代から明治時代の整地層を確認し、江戸時代の遺構も確認した。特に熊本県立美術館本館入口南側部分で、現地表面下約１ｍ～1.１ｍの深さで硬化面（道路面）を検出確認した。硬化面は住江門から東側に伸びる道路と考えられ、残存の深さが１m以上の凹道であり底面全体が硬化している。硬化面は、黒褐色土や暗褐色土、ローム自体が硬化した部分もある。硬化面下の掘り込みの基盤は地山のローム土である。硬化面を補修した様子はなく、側溝等の遺構は確認できていない。硬化面南側の立ち上がり部分には江戸時代末から明治時代初頭の陶磁器や瓦が集中している。北側の立ち上がりは現代の掘り込みで破壊されており確認できていないが、掘り込みの幅は少なくとも９m以上である。また、西側から東側へ緩やかに上がっている。明治時代初めの屋敷廃絶時に通路を埋め立てたと考えられる。他にも江戸時代の土坑などを確認した。また園路の南側から北側に向かって同じ高さの地山が、粘性の強いローム土層から砂質感がある火砕流堆積層へと変化しており、旧地形を復元すると二の丸広場は南から北へ上がる地形であったと考えられる。

土層観察地点 2



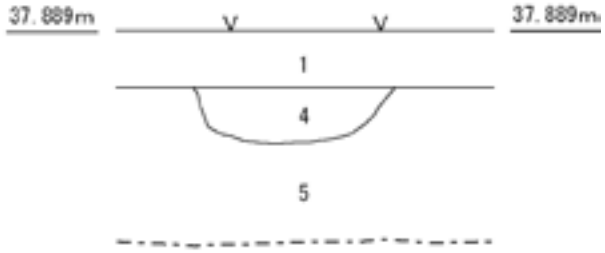
1-1 層：アスファルト、砕石
1-2 層：暗褐色（10YR3/4）
　　現代整地層
3 か層：暗褐色（10YR3/3）
　　漆喰、瓦片などを含む
4-1 層：暗褐色（10YR3/3）
　　近世整地層
4-2 層：暗褐色（10YR3/4）
　　19 世紀中頃から後半の遺物を多量に含む
4-3 層：黒褐色、にぶい橙色、暗褐色
　　互層になる、瓦片、漆喰片含む
4-4 層：硬化面
　　路面
4-5 層：灰黄褐色（10YR4/2）
　　砂質土層
4-6 層：黒褐色（10YR3/2）
　　路面
4-7 層：黒褐色（10YR3/2）
　　貝殻、小礫含む
4-8 層：黒褐色（10YR3/2）
　　19 世紀中頃から後半の遺物を含む
4-9 層：明褐色、暗褐色混在
　　瓦片、漆喰片含む
5 層：明褐色（7.5YR5/8）
　　ローム土層、砂質感あり

土層観察地点 5

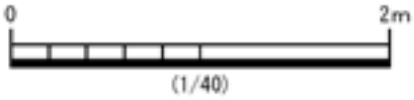


1-1 層：アスファルト、砕石
1-2 層：撹乱
4-1 層：暗灰黄（2.5 Y 4/2）
　　近世陶磁器出土
4-2 層：黄灰（2.5 Y 5/1）
　　シルト質、近世瓦出土
　　砂礫が認められる
4-3 層：褐色（10 Y R 4/6）
　　鉄分の沈着が認められる
5-1 層：赤褐色（5Y4/6）
　　火砕流堆積層
5-2 層：にぶい黄褐色（10YR5/3）
　　砂礫が認められる

土層観察地点 6



1 層：アスファルト、砕石
4 層：暗褐色（10YR3/3）
　　18 世紀代遺物出土
5 層：赤褐色（5Y4/6）
　　火砕流堆積層



土層実測図

2：マンホールNo.8 から南 17 ～ 21 ｍ　西壁土層断面

2：マンホールNo.8 から南 17 ～ 21 ｍ　西壁土層近景

3：マンホールNo.8 から北 14 ～ 17 ｍ　東壁土層断面

4：マンホールNo.7 から南２～５ｍ　西壁土層断面

5：マンホールNo.５から北５～８ｍ　南壁土層断面

6：マンホールNo.５から北 12 ｍ　南壁土層断面

江戸時代の土坑か

7：マンホールNo.４から北 10 ～ 15 ｍ　北壁土層断面

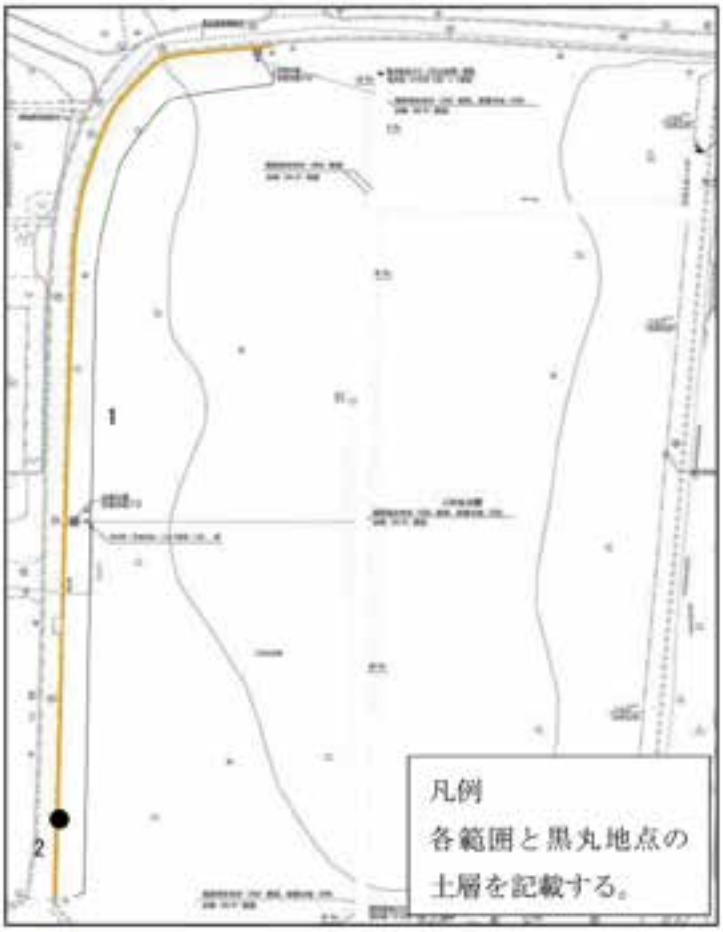
成　果【境界ブロック】

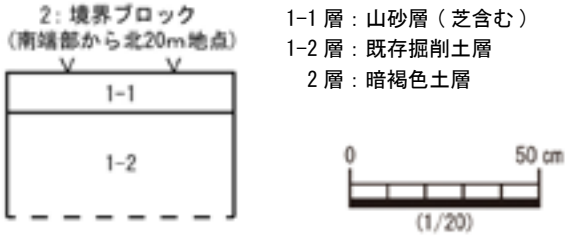
境界ブロックの掘削深度は約 45 ㎝であった。既存掘削範囲内の土層を確認したが、暗渠排水管の土層観察と同様、表土層の下に昭和 40 年代の整地層を検出した。

【総括】

立会の結果、二の丸広場内において、江戸時代の遺構の検出には至っていない。二の丸園路については、江戸時代の道路・土坑と思われる遺構を確認した。

〔境界ブロック〕＊上が北、縮尺任意





土層略図

2：境界ブロック南端から北 20 m地点　土層断面

12. 熊本城行幸坂安全対策工事立会（支障物撤去再設置）

地　　点：本丸地区（行幸坂）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）6 月 1 日
申請番号：熊本城発第 124 号　　**原　因**：支障物撤去再設置
許 可 日：令和 3 年（2021 年）6 月 2 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）6 月 4 日・7 月 6 日
許可番号：指令（文化財）第 16 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

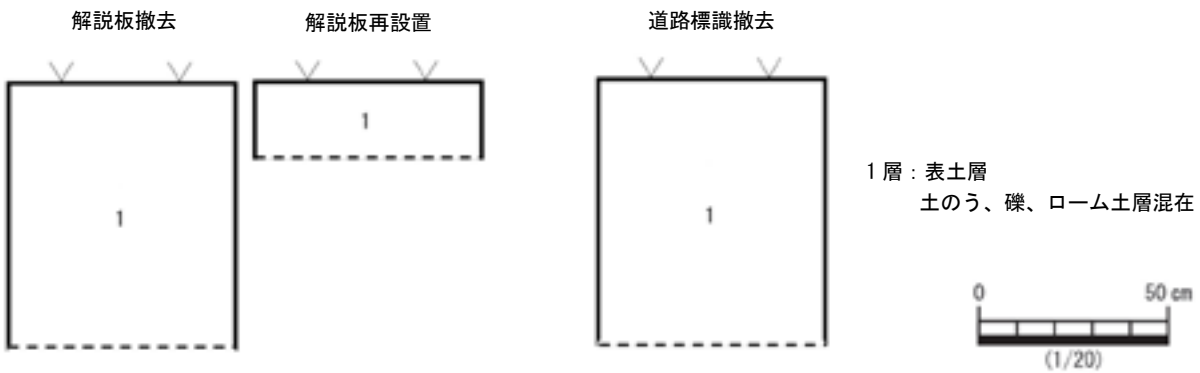
申請地は、本丸西側の行幸坂（江戸時代の南坂）である。南坂は、明治 35 年（1902）の明治天皇行幸に先立ち傾斜を緩やかにして行幸の馬車を通りやすくするために盛土が行われ、後に行幸を記念して名称を南坂から行幸坂と変更した。行幸坂は昭和 57 年度まで合わせて最大約 8 ｍの盛土工事が行われて現在に至っている。行幸坂では安全対策工事として、既設歩道の切り下げと法面の崩落の可能性のある区間約 70 ｍにおいて張出歩道構造物の設置が計画された。安全対策工事に伴い、支障物となる解説板・道路標識の撤去と、解説板の再設置が行われた。解説板の撤去と再設置は、長さ 2.8 ｍ、幅 1 ｍの範囲で掘削が予定され、道路標識の撤去には一辺約 1 ｍの範囲で掘削が予定されていた。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、解説板と道路標識の撤去に伴う掘削深度は、約 70 ㎝であった。さらに解説板の再設置に伴う掘削深度は約 20 ㎝であった。いずれも既存の掘削範囲内に収まることを確認した。

申請地位置図
（■：申請地　□：特別史跡範囲　—：旧城域　—：惣構）

掘削地点位置図



土層略図

解説板撤去前（西から）

解説板撤去土層断面

解説板再設置掘削（南から）

解説板再設置掘削土層断面

道路標識撤去（西から）

道路標識撤去土層断面

13. 熊本城三の丸南棟便所給排水衛生その他設備改修工事立会

地　　点：三の丸地区（三の丸南棟便所）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)6 月 10 日
申請番号：熊本城発第 138 号
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)6 月 16 日
許可番号：指令（文化財）第 21 号
原　　因：給排水衛生・電気設備改修
期　　間：令和 3 年 (2021 年)7 月 28 ～ 30 日、
8 月 23 日～ 9 月 6 日
担当者：山下宗親・林田和人

方　法・概　要

申請地は三の丸地区に位置し、江戸時代は武家屋敷として利用された場所である。三の丸南棟便所で浄化槽の撤去と汚水槽の新設及び、給排水設備・電気設備の改修が計画された。浄化槽部分の掘削範囲は、長さ約 5 m、幅約 2.2 m、給排水設備・電気設備の掘削範囲は、長さ約 70 m、幅約 50 ㎝である。いずれも、既存掘削範囲内で工事を行う計画である。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、掘削深度は浄化槽改修工事で約 2.8 m、給排水及び電気設備工事では、最も深い所で約 80 ㎝であった。土層観察は、①～⑬の地点で行った。

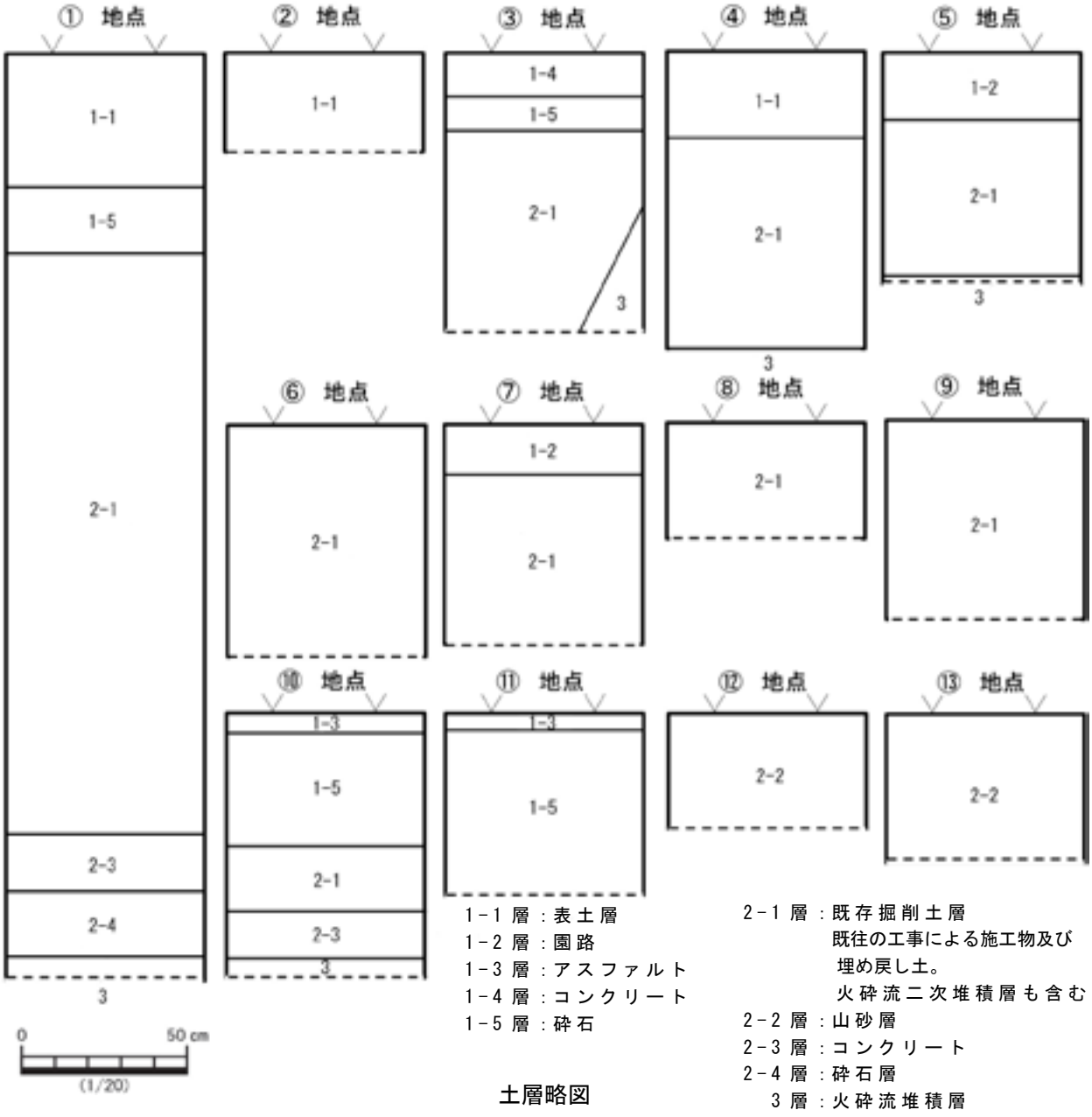
基本層序は、1 層：アスファルト・コンクリート及び園路など現代の層。2 層：既往の工事による施工物及び埋め戻し土。3 層：地山である火砕流堆積層となる。

改修工事はすべて既存の掘削範囲に収まっていたものの、一部の掘削底で 3 層である火砕流堆積層を確認できた。3 層を確認したのは①地点、③地点、④地点、⑤地点、⑩地点であり、最も浅い③地点で深さ 45 ㎝であった。

申請地状況　（東から）

申請地状況（南から）

掘削地点位置図・土層観察地点図



土層略図

1－1 層：表土層
1－2 層：園路
1－3 層：アスファルト
1－4 層：コンクリート
1－5 層：砕石

2－1 層：既存掘削土層
既往の工事による施工物及び埋め戻し土。
火砕流二次堆積層も含む
2－2 層：山砂層
2－3 層：コンクリート
2－4 層：砕石層
3 層：火砕流堆積層

①地点　浄化槽掘削状況（東から）

①地点　浄化槽掘削底部分

②地点　土層断面　（南から）

④地点　土層断面　（東から）

⑤地点　土層断面　（南から）

⑩地点　土層断面　（北から）

⑪地点　土層断面　（東から）

⑬地点　土層断面　（西から）

14. ＮＨＫ跡地雨水排水施設設置及び法面対策工事立会

地　　点：千葉城地区（ＮＨＫ跡地）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）6 月 17 日
申請番号：熊本城発第 145 号
許 可 日：令和 3 年（2021 年）6 月 18 日
（同年令和 3 年（2021 年）8 月 19 日・10 月 6 日変更承認）
許可番号：指令（文化財）第 23 号
原　　因：雨水排水施設設置及び法面補修工事
期　　間：令和 3 年（2021 年）7 月 7 日～
令和 4 年（2022 年）1 月 31 日
担当者：林田和人・山下宗親

方　法・概　要

申請地は江戸時代に武家屋敷のほか、掃除方用屋敷として使用された。明治時代以降は主に陸軍関係の工兵営や憲兵本部・偕行社の施設として使用された。昭和 37 年（1962 年）以降は日本放送協会（ＮＨＫ）熊本放送局として使用されたが平成 29 年（2017 年）に移転した。令和元年の特別史跡指定後、令和 2 年度に建物が解体撤去された。

令和 3 年 5 月 17 日の大雨以降、土砂流出、雨水滞水及び法面洗掘が起きていることから、遺構保護のための応急措置として、雨水排水施設の設置及び旧建物建設撤去に伴う法面を保護する工事を行うことになった。雨水排水施設は敷地内の既存掘削範囲内に、集水桝と排水管を設置する計画である。

工事は雨水排水施設の設置、法面補修の順番で行った。なお、工事中排水方法の変更と法面補修の追加により、2 度計画変更が行われた。

工事期間中、掘削に際し立会を実施した。立会日は以下の通りである。

雨水排水施設：a 地点（集水桝）7 月 7 日～ 8 月 23 日、b 地点（集水桝＋側溝）7 月 30 日～ 8 月 2 日、c 地点（集水桝＋排水管）7 月 12 日～ 19 日、d 地点（集水桝＋排水管）7 月 15 日～ 19 日、f 地点（集水桝＋排水管）8 月 6 日。

法面補修工事：e 地点 10 月 8 日、g 地点 9 月 16 日、h 地点令和 4 年 1 月 26 ～ 31 日。

成　果

雨水排水施設の掘削深度及び土層については、以下の通りである。

a 地点：27 ～ 30 ㎝、b 地点：55 ㎝、c 地点：73 ㎝、d 地点：60 ㎝、f 地点：50 ㎝。

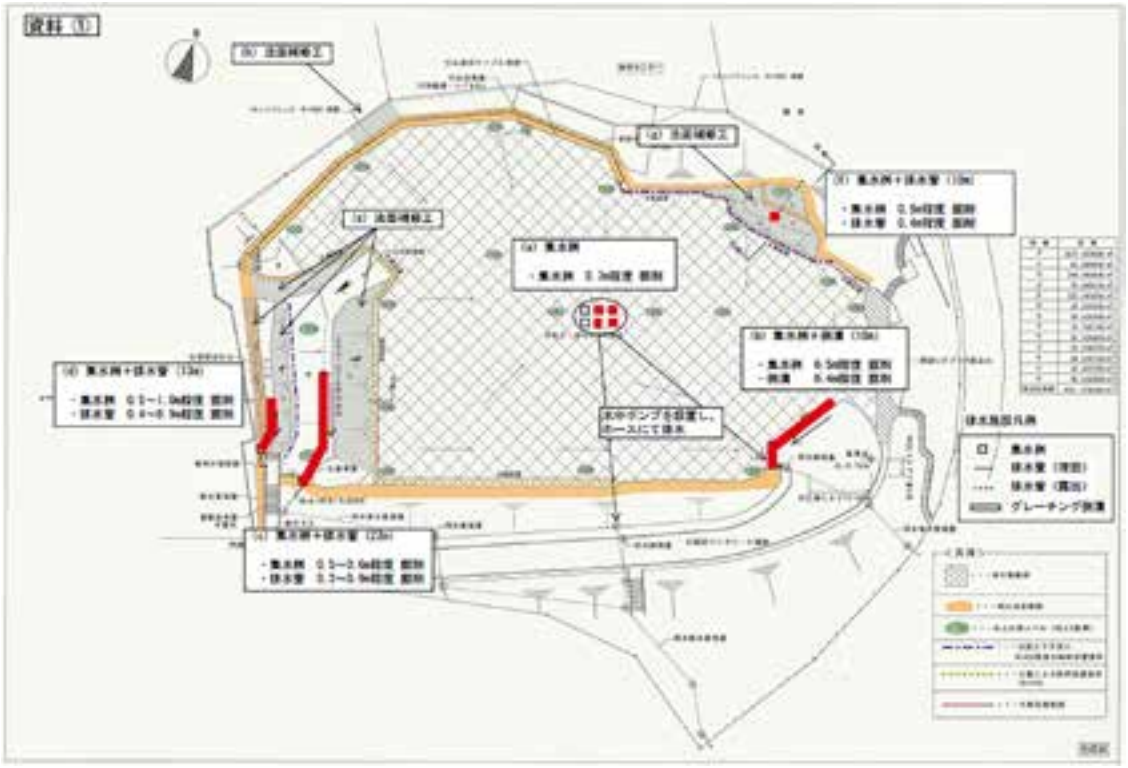
1 層：砕石およびコンクリート

2 層：灰褐色土（7.5YR4/2）火砕流堆積物主体の解体整地土

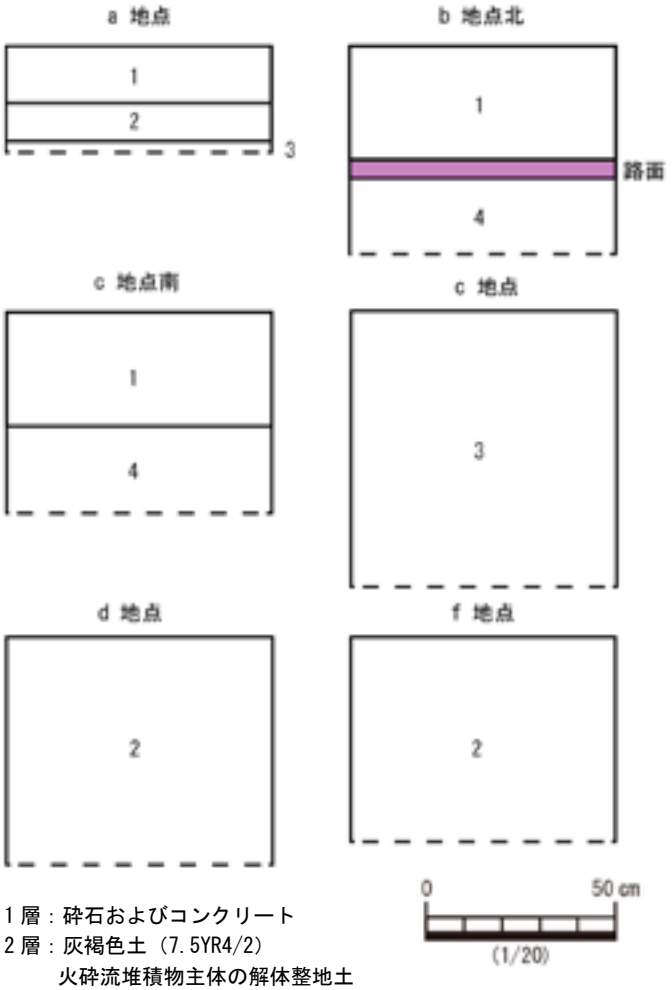
3 層：山砂

4 層：にぶい褐色土（7.5YR5/3）昭和 37 年以前の造成土

掘削は解体撤去後に埋め戻した山砂内に収まるが、b 地点において掘削箇所の北壁で偕行社整備に伴う道路造成土を確認した。また d 地点は解体時の発生土で埋め戻されていた。法面補修については凹凸面の均しのみで、掘削は行われなかった。



掘削地点・法面補修地点図



1 層：砕石およびコンクリート
2 層：灰褐色土（7.5YR4/2）
　　火砕流堆積物主体の解体整地土
3 層：山砂
4 層：にぶい褐色土（7.5YR5/3）
　　昭和 37 年以前の道路造成土

掘削地点土層図

申請地　西から

a 地点掘削状況

b 地点掘削状況

b 地点北端土層断面　（南西から）

c 地点掘削状況

d 地点土層断面　（南から）

e 地点施工状況

f 地点土層断面　（南から）

g 地点補修状況

h 地点補修状況

15. 合庁跡地前舗装補修工事立会

地　　点：古城地区（合同庁舎跡地）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）6 月 30 日
申請番号：熊本城発第 156 号　　**原　因**：舗装補修工事
許 可 日：令和 3 年（2021 年）7 月 2 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）8 月 23 日
許可番号：指令（文化財）24 号　　**担当者**：佐伯孝央

方　法・概　要

申請地は古城地区に位置しており、合同庁舎跡地西側の南に面する歩道である。合同庁舎跡地西側は、飯田丸五階櫓石垣の石材置き場として使用している。工事の目的は出入口前の石張りの舗装に経年劣化による段差が生じていたため、アスファルトで仮舗装をし、段差を解消することである。

補修工事範囲は東西 6 m、南北 2 mである。石張り舗装は、石材に番付をした後に手作業で取り上げた。石材は全 105 石で、取り上げた石材は保管し、今後石張り舗装の復旧時に用いる予定である。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

掘削深度は約 10 ㎝で、厚さ約 6 ㎝の石材の下にモルタルを確認した。モルタルは既存の石敷き舗装施工時に伴うものである。モルタルの下にコンクリートを確認したが、上面の検出までのため、コンクリートの厚さと打設範囲については今回の工事では未確認である。また、東端より西に 45 ㎝の掘削範囲内では、10 ㎝以下においてはコンクリートではなく、モルタルを確認した。

申請地位置図
（■：申請地　□：特別史跡範囲　—：旧城域　—：惣構）

申請地遠景　（南から）

石敷き番付作業状況　（西から）

掘削完了状況　（東から）

工事箇所土層断面　（東から）

アスファルト舗装完了状況　（西から）

16. 北十八間櫓・東十八間櫓台石垣復旧設計に伴う地質調査立会

地　　点：本丸地区（北十八間櫓・東十八間櫓周辺）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)6 月 30 日
申請番号：熊本城発第 158 号　　**原　因**：地質調査
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)7 月 2 日　　**期　間**：令和 3 年 (2021 年)7 月 15 日～ 8 月 11 日
許可番号：指令（文化財）第 25 号　　**担当者**：嘉村哲也

方　法・概　要

申請地は国指定重要文化財建造物北十八間櫓・東十八間櫓の周辺である。平成 28 年熊本地震により被災した東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓の下部石垣の復旧設計に必要な地質資料を採取するため地質調査を実施した。調査地点は計 4 か所で、以下に各調査地点の概要を述べる。

地質調査地点位置図

成　果

No.1（北十八間櫓石垣下）

現地表面の標高は 17.97 ｍである。現地表下 0.3 ｍまでは表土で、その下に約 30 ｍの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。その直下から金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.2（東十八間櫓曲輪側背面）

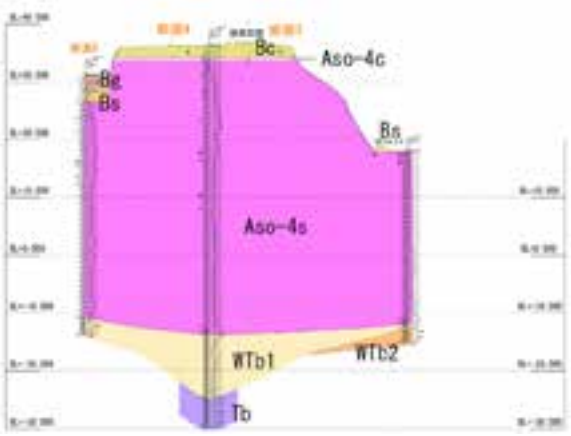
現地表面の標高は 36.23 ｍである。現地表下 2.7 ｍまでは盛土で、その下に 1.7 ｍの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。その直下から標高 -13.77 ｍまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下約 50 ｍより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.3（東櫓御門東側）

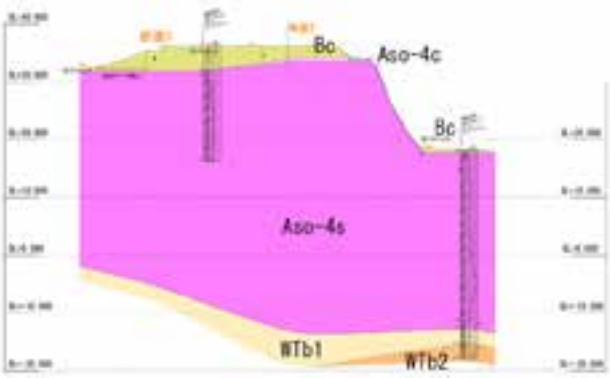
現地表面の標高は 31.79 ｍである。現地表下 2.45 ｍまでは平成 28 年熊本地震後の東十八間櫓下石垣崩落石材回収工事に伴う盛土で、その下に約 20 ㎝の厚さで焼土、炭化物を含む盛土を確認した。その直下では厚さ 30 ㎝の安山岩礫を確認した。安山岩礫下では 5 ㎝の厚さで盛土を確認した。その下に約 39 ｍの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。その直下から金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.4（東十八間櫓石垣下）

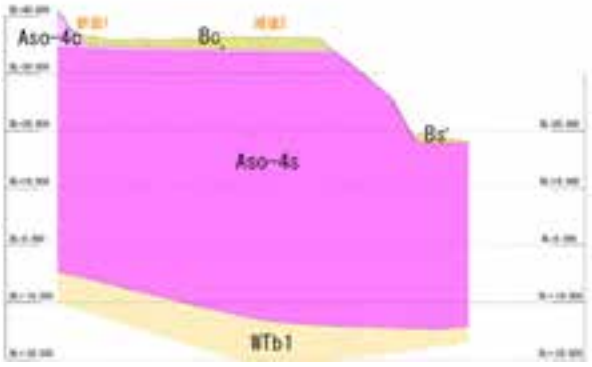
現地表面の標高は 18.44 ｍである。現地表下 0.6 ｍまでは表土で、その下に約 33 ｍの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。その直下から金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。



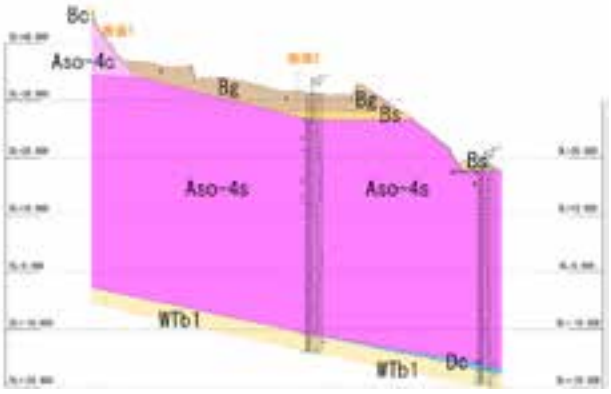
想定地質断面図（断面 1）



想定地質断面図（断面 2）



想定地質断面図（断面 3）



想定地質断面図（断面 4）

No.3（東櫓御門東側）0～8ｍコア写真

No.4（東十八間櫓石垣下）0～8ｍコア写真

17. 竹の丸・二の丸給排水設備改修工事立会

地　　点：本丸地区（竹の丸、須戸口）・二の丸地区（二の丸催し広場）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）8 月 2 日
申請番号：熊本城発第 211 号
許 可 日：令和 3 年（2021 年）8 月 11 日
許可番号：指令（文化財）33 号
原　　因：給排水設備改修工事
期　　間：令和 3 年（2021 年）12 月 6 日～
令和 4 年（2022 年）2 月 4 日
担当者：山下宗親・金田一精

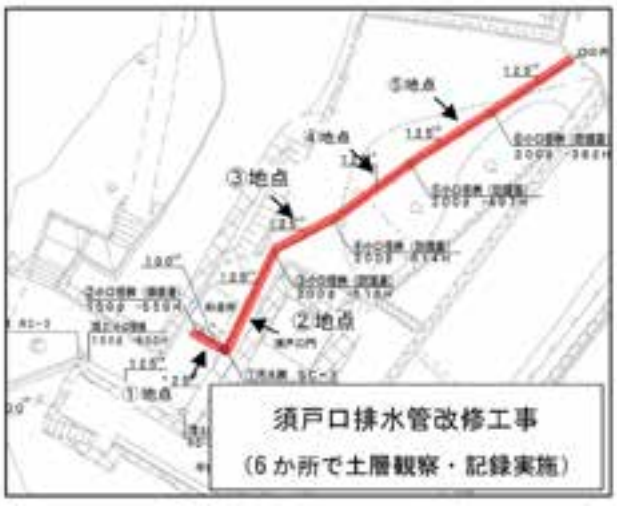
方　法・概　要

申請地は、本丸地区の竹の丸・須戸口周辺と、二の丸地区の二の丸催し広場である。本丸地区の申請地は、江戸時代は曲輪内部と須戸口の通路上に位置する。二の丸地区の申請地は、武家屋敷内に位置する。両地区の給排水設備に老朽化による機能不全が確認されたため、改修工事が計画された。竹の丸の給水用蓋改修工事は 3 か所で一辺約 30 ㎝四方の範囲を予定し、須戸口の排水管改修工事は幅約 60 ㎝、長さ約 69 m の範囲で予定された。二の丸排水管改修工事は、幅約 60 ㎝、長さ約 80 mの範囲で予定された。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、既存の給排水設備を確認しながら重機で行った。

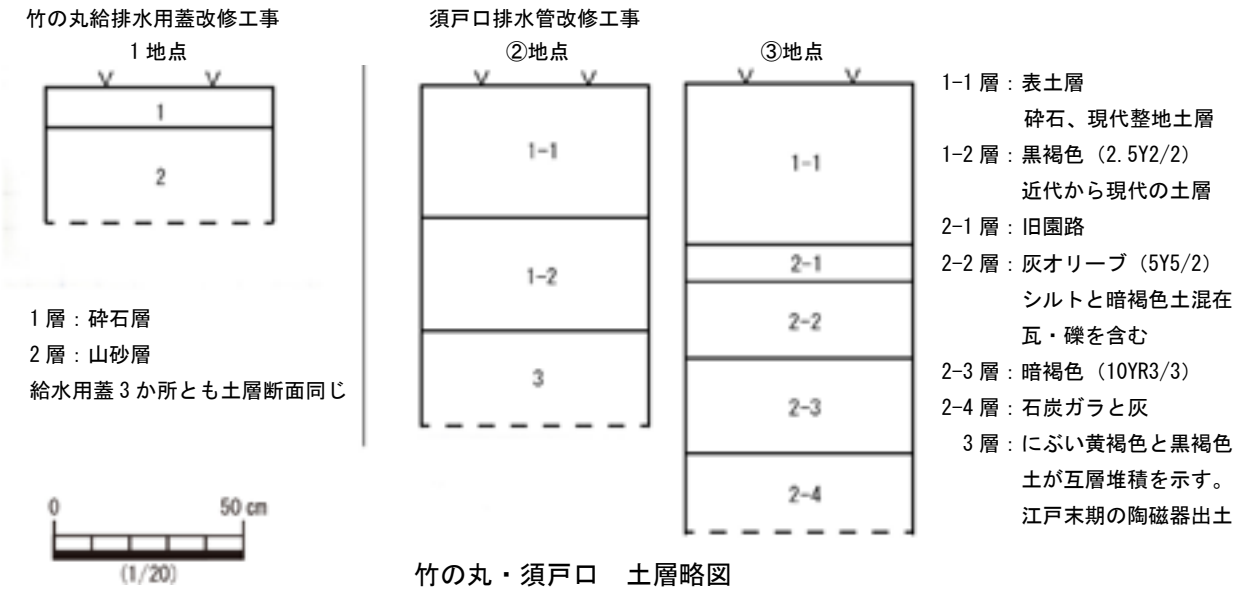
成　果　【竹の丸・須戸口】

竹の丸給水用蓋改修工事の掘削深度は約 35 ㎝で、立会の結果既存施工範囲内に収まることを確認した。須戸口排水管改修工事の掘削深度は約 90 ㎝～ 130 ㎝で既存掘削範囲内に収まることを確認し、②地点と③地点で既存掘削範囲の壁面で土層を確認した。②地点では現地表面下約 65 ㎝（標高 13.370 m）において、江戸時代の造成土と考えられる土層（3 層）を確認した。③地点では現地表面下約 40 ㎝で旧園路（2-1 層）、約 1 m下に石炭ガラの集中（2-4 層）を確認した。石炭ガラは明治 24 年（1891）に須戸口付近で開業した、火力発電所に関連する可能性がある。

申請地位置図
（■：申請地　□：特別史跡範囲　—：旧城域　—：惣構）



竹の丸・須戸口　掘削地点位置図



竹の丸・須戸口　土層略図

竹の丸給水蓋改修工事

須戸口排水管改修工事　②地点土層断面

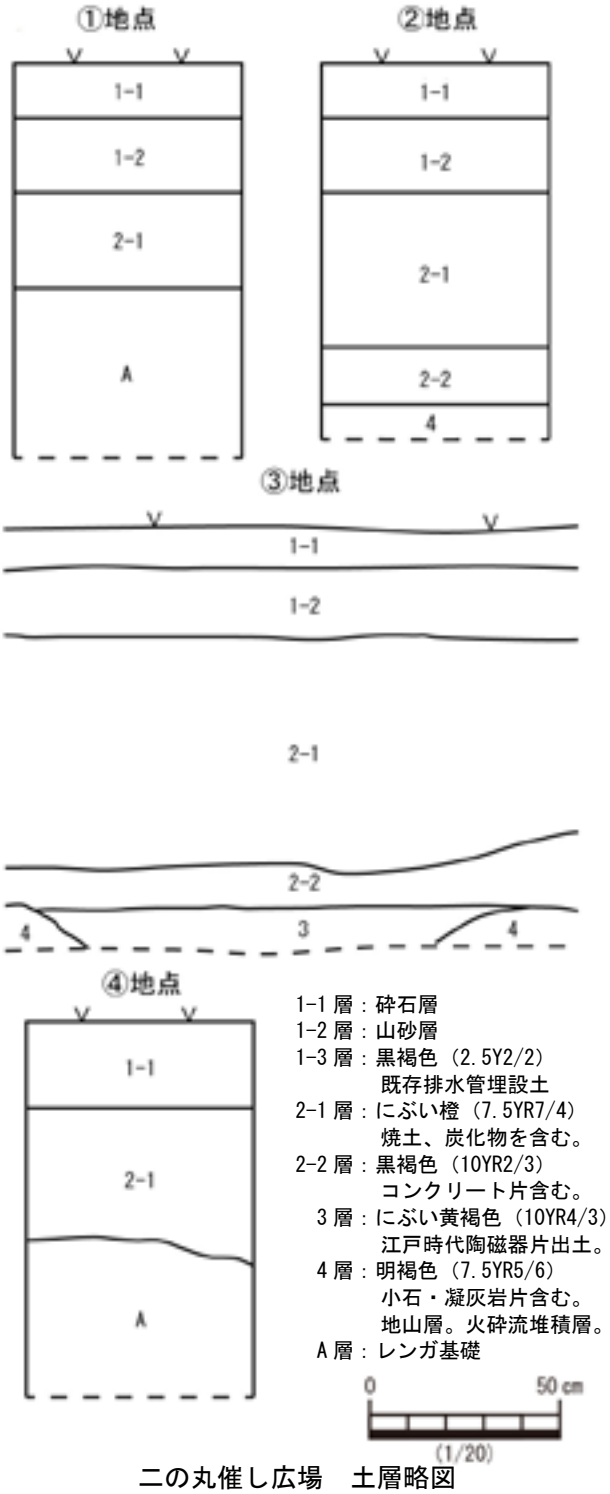
須戸口排水管改修工事　④地点土層断面

成　果　【二の丸催し広場】

二の丸排水管改修工事の掘削深度は、約 80 ㎝～120 ㎝である。立会の結果、既存の掘削範囲内に収まることを確認した。一部既存掘削範囲の壁面で遺構を確認した。①④地点で陸軍時代のレンガ基礎（A 層）や、③地点で江戸時代の土坑と考えられる遺構（3 層）を確認した。

申請地位置図
（■：申請地　□：特別史跡範囲　—：旧城域　—：惣構）

二の丸催し広場　掘削地点位置図



二の丸催し広場　土層略図

二の丸催し広場排水管改修工事　①地点土層断面

二の丸催し広場排水管改修工事　③地点土層断面

二の丸催し広場排水管改修工事　④地点土層断面

18. 竹の丸五階櫓台周辺崩落石材回収工事立会

地　　点：本丸地区（竹の丸五階櫓周辺）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)8 月 5 日
申請番号：熊本城発第 210 号
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)9 月 9 日
許可番号：3 文庁第 1085 号
原　　因：竹の丸五階櫓台周辺崩落石材回収工事
期　　間：令和 3 年 (2021 年)10 月 14 日～
令和 4 年 (2022 年)3 月 10 日
担当者：嘉村哲也・井大樹

方　法・概　要

竹の丸五階櫓周辺は飯田丸と東竹の丸の間に位置し、竹の丸から飯田丸へ上る際の重要な出入り口として機能し、枡形が 6 連続で連なる複雑な構造を呈している。平成 28 年熊本地震では竹の丸五階櫓周辺も複数の石垣面が変状･崩落し大きな被害を受けた。今回の工事ではこれらの被害を受けた石垣石材の回収･記録作成を行い、回収後の崩落法面はこれ以上の被害拡大を防ぐためモルタル吹付による養生をする。加えて、将来の石垣修復に備え周辺石垣と地形の測量調査等を行うものである。

対象となる石垣は竹の丸五階櫓北側に位置する石垣面 H204・H206・H207・H208・H209 と竹の丸五階櫓下石垣の西面（H233)・南面（H234）である。被害としては竹の丸五階櫓北側が大きく、複数の石垣面の石材が入り混じった状態であったため回収の際に注意を払った。調査方法としては測量による記録作成と築石・栗石回収を交互に繰り返しながら、全ての築石の崩落位置を把握・記録し、同時に崩落パターンの検討を行うものである。また、石材回収範囲には 5 m四方でグリッドを作成し、石材回収中に出土した遺物はグリッド番号・回収階層・日付を記録することで遺物の立体的な分布の把握に努めた。なお今回の崩落石材回収工事では 961 点の石材を記録・回収した。

成　果

【崩落状況】

竹の丸五階櫓台北側の石垣については、崩落石材回収前の測量写真から崩落状況を推察することができる。石材の上に三日月状に伸びる土の帯(①)は本来 H208 から南側方向に L 字状に伸びる石塁上面盛土で、この形状から地震時には南西方向に力が働き石垣が崩落したものと考えられる。石材の分布状況も F5 区･G5 区に角石が集中しており H209 と H204 の隅角部を構成する石材と考えられる。一方、①の内側では栗石上面に崩落した石材（②）が確認でき、これは H207・H206 のものと判断できる。

竹の丸五階櫓台については昭和 50 年（1975）に石垣の解体修理が行われており、今回崩落した西面、南面もこの修理の範囲内での崩落であった。

それぞれの石垣面の崩落状況を観察するとさらに詳細な状況を確認できる。H209 では築石面が U 字状に抉られ、他の崩落石材回収工事でも指摘されている築石面中頃から崩れる「く」の字状の崩落パターンが確認できたが、単純に前方向に倒れるだけでなく前述した斜め方向（南西）の力も働くため“ねじれ”が生じ 、H208 の築石と思われる石材も比較的南側で回収された。この“ねじれ”は石垣上段になるにつれ顕著にみられた。一方、H204 については石垣面の西側半分が失われ、隅角部についても完全に崩落していた。ここでも同様に「く」の字状の崩落パターンが確認でき、築石面西側は H209 に引きずられるように下段に石材が崩落したものと考えられる。ただし、築石面東側（I5 区）についてはほぼ前面方向に崩落していた。H233・H234 については様相が異なり 2 面とも前面に崩落し、斜め方向（南西）への“ねじれ”は確認できなかった。

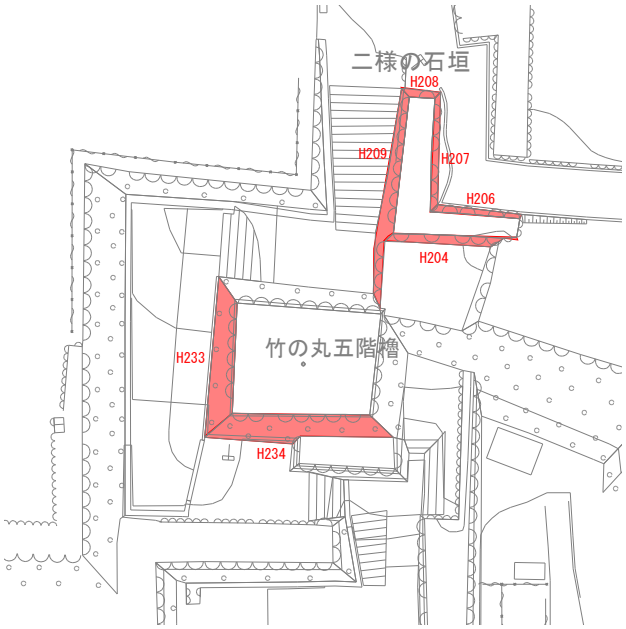
【石垣構造・出土遺物】

被災前の写真や崩落石材回収後の石垣面観察から、竹の丸五階櫓台北側の石垣については何度か積み直しが行われている痕跡を確認した。最も古い痕跡はH209の下から3～4石目の位置まで達している。また、栗石内には今回の崩落に伴わない矢穴等が残る築石が数点確認されており、これも過去の積み直しの際に紛れ込んだものと考えられる。ここでの出土遺物はほとんどが瓦で圧倒的に九曜紋の軒丸・軒平瓦が多く、少数ではあるが桔梗紋の施された瓦も出土している。瓦の多くは三日月状に伸びる土の帯（①）から出土し、栗石内にはほとんどみられなかった。一方、栗石内からは凝灰岩製石造物がいくつかみられ、その位置からこれも過去の積み直しの際に紛れ込んだものと考えられる。また、特筆すべき遺物として金彩の施された釘隠金具も確認されており、どのような建造物に付属するかを含めて今後の検討が必要な遺物である。H209は当初、石垣背面が総栗石であると想定していたが、法面の回収を進める過程で栗石内部に阿蘇4火砕流堆積物（Aso-4）を主体とする盛土と思われる箇所を一部確認しており、石垣背面構造を考える上で重要な知見を得た。

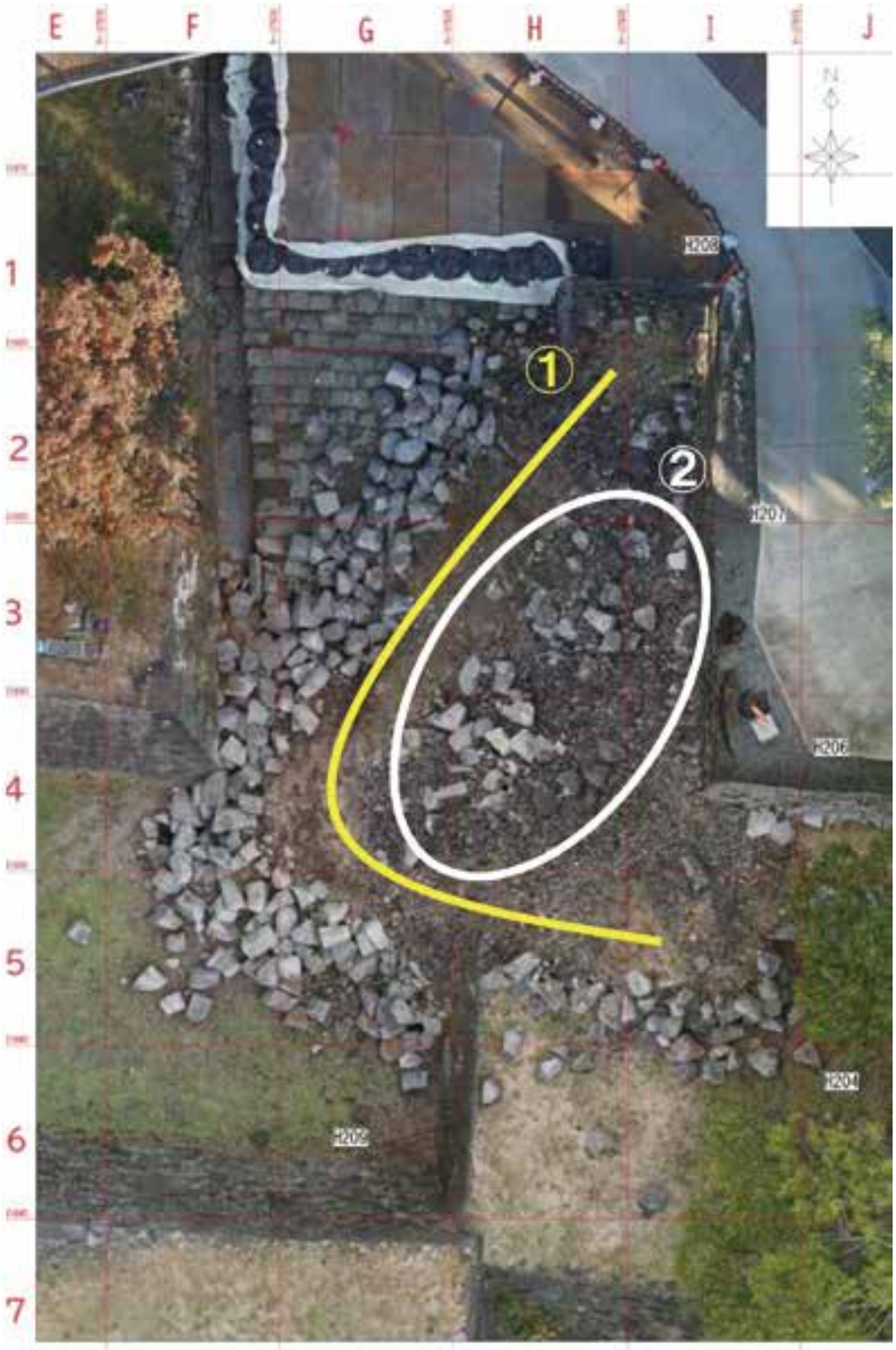
H233・H234については昭和50年に石垣の解体修理が行われており、今回の崩落はこの解体範囲内に留まっていた。したがって、角張った栗石や山砂内からは遺物の出土を見なかった。

申請地位置図

（■：申請地 □：特別史跡範囲 ―：旧城域 ―：惣構）



崩落石材回収石材位置図



竹の丸五階櫓北側石垣崩落状況

H209 石垣崩落状況

H204 石垣崩落状況

H209 石垣石材回収状況

H204 石垣石材回収状況

H209・H204 石垣隅角部

H233 石垣崩落状況

H233・H234 石垣石材回収状況

H234 石垣石材回収状況

19. 監物櫓周辺控柱確認調査・緊急養生工事立会

地　　点：二の丸地区（監物櫓周辺）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)8 月 5 日
申請番号：熊本城発第 210 号　　**原　因**：発掘調査・遺構の緊急的養生
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)9 月 9 日　　**期　間**：令和 3 年 (2021 年)9 月 24・27 日
許可番号：3 文庁第 1085 号　　**担当者**：嘉村哲也

方　法・概　要

監物櫓は、特別史跡指定範囲の北縁辺部に位置する。監物櫓の周辺は江戸時代を通じて上級家臣の屋敷地として利用されており、江戸時代における監物櫓の名称は「長岡図書預櫓」である。

監物櫓台石垣から東へ延びる石垣背面の控柱が 2 年前よりも内側に倒れてきていることを確認したため、遺構の毀損防止、安全確保のために調査を実施し、抜き取り、保管・養生することとなった。

地表面観察より、控柱の掘方を確認することができず、控柱を中心に2ｍ×2ｍの範囲で調査を実施した。調査に際し、掘削中に控柱が転倒することがないよう養生を行った。控柱下端を確認し、土層図、平面図等の記録作成後に控柱を抜き取り、保管した。掘削箇所は控柱再設置のため、土木シートで養生し、山砂、発生土・栗石で埋め戻した。

成　果

調査の結果、控柱の掘方は確認することができず、石垣修理時の裏込め内に設置されていることが確認できた。控柱は裏込め内に約 60 ㎝埋まっていた。石垣裏込めには土が多く含まれ、15 ㎝～ 30 ㎝程度の角礫が主体である。出土遺物は少ないが、控柱前面の石垣は石垣表面観察より、築石形状が方形のものが多く、横方向に目地が通りやすい熊本城石垣 6 期に積み直された石垣であると考えられることから、控柱についても同時期に据え直された可能性が高い。

申請地位置図
(■:申請地 □:特別史跡範囲 ―:旧城域 ―:惣構)

控柱養生作業前　（西から）

控柱養生作業後　（西から）

裏込め検出状況　（南から）

掘削作業　（西から）

控柱回収前西面土層断面　（東から）

控柱回収後北面土層断面　（南から）

控柱回収作業　（西から）

控柱保管状況

20. 棒庵坂周辺崩落石材回収工事立会

地　　点：本丸地区（棒庵坂周辺）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)8 月 5 日
申請番号：熊本城発第 210 号
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)9 月 9 日
許可番号：3 文庁第 1085 号
原　　因：棒庵坂周辺石垣崩落石材回収工事
期　　間：令和 3 年 (2021 年)10 月 12 日～
令和 4 年 (2022 年)3 月 4 日
担当者：嘉村哲也・井大樹

方　法・概　要

棒庵坂は熊本城の北側に位置し、北大手門への入り口として機能していた。平成 28 年熊本地震では特に加藤神社北側裏の石垣面が変状・崩落し大きな被害を受けた。今回の工事ではこれらの被害を受けた石垣石材の回収・記録作成を行い、回収後の崩落法面はこれ以上の被害拡大を防ぐためモルタル吹付による養生をする。加えて、将来の石垣修復に備え周辺石垣と地形の測量調査等を行うものである。

対象となる石垣は H118 で測量による記録作成と築石・栗石回収を交互に繰り返しながら、全ての築石の崩落位置を把握・記録し、同時に崩落パターンの検討を行うものである。また、石材回収範囲には 5 m 四方でグリッドを作成し、石材回収中に出土した遺物はグリッド番号・回収階層・日付を記録することで遺物の立体的な分布の把握に努めた。なお今回の崩落石材回収工事では、1178 点の石材を記録･回収した。

成　果

【崩落状況】

H118 は東西方向に約 60 mを測る細長い石垣で、地震により石垣の高さ三分の一程度を残し全面にわたり崩落していた。H118 の前面には幅十数メートルの平坦面があり、崩落した石材の 9 割はこの平坦面に留まり、いくつかは下段の堀底に転落していた。崩落した石材の位置や傾き等を観察すると他の崩落石材回収工事でも指摘されている築石面中頃から崩れる「く」の字状の崩落パターンが確認でき、H118 は比較的高さが低いために飛び出す距離が短く堀底まで転落する石が少なかったと考えられる。また、崩落石材回収後の石垣面を横から観察すると、崩落を免れた築石面は弧がいくつも連続した形状であった。

【石垣構造・出土遺物】

被災前の写真が十分に残されていないことから正確な状況を知ることは難しいが、崩落石材回収後の石垣面観察から H118 については何度か積み直しが行われている痕跡を確認した。石垣面の中部は比較的築造時のオリジナルに近い面が残り、東西の端に行くにつれ複数の積み直しがみられた。石垣背面の栗石は円礫が主体で内部からは少数の瓦片とレンガ、ガラス等が出土した。明治 22 年熊本地震の被害をまとめた『震災ニ関スル諸報告』において H118 が大規模な被害を受けたとの記録があることから、今回被害を受けた範囲は大半がこの積み直しの範囲で、栗石内に近現代の遺物が多く含まれるのもこのためと考えられる。

申請地位置図
(■:申請地 □:特別史跡範囲 ―:旧城域 ―:惣構)

崩落石材回収石材位置図

H118 石垣崩落状況

H118 石垣崩落状況

H118 石垣石材回収状況

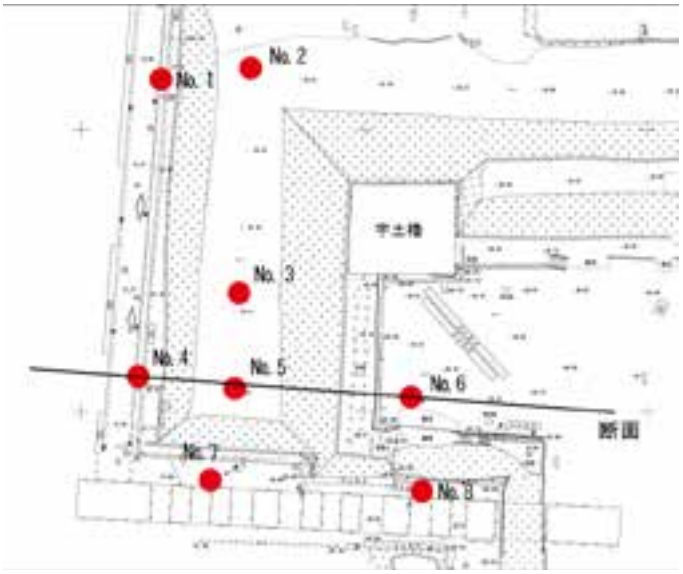
H118 石垣石材回収状況

21. 宇土櫓続櫓台石垣復旧設計に伴う地質調査立会

地　　点：本丸地区（宇土櫓続櫓周辺）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)9 月 14 日
申請番号：熊本城発第 271 号　　**原　因**：地質調査
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)9 月 17 日　　**期　間**：令和 3 年 (2021 年)11 月 5 日～ 12 月 2 日
許可番号：指令（文化財）第 47 号　　**担当者**：嘉村哲也

方　法・概　要

申請地は国指定重要文化財建造物宇土櫓続櫓の周辺である。平成 28 年熊本地震により被災した宇土櫓続櫓周辺石垣の復旧設計に必要な地質資料を採取するために地質調査を行った。ボーリングコアの確認・観察を主とした立会とした。調査地点は計 8 か所で、以下に各調査地点の概要を述べる。



地質調査地点位置図

成　果

No. 1（宇土櫓前面石垣背面北側）

現地表面の標高は 37.76 ｍである。現地表下 30 ㎝までは歩道のコンクリートで、その下に 1 ｍの厚さで現代の盛土が堆積する。その直下から標高 29.06 ｍまでは約 7 ｍの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。その下標高 7.46 ｍまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下 30 ｍより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No. 2（宇土櫓下空堀北側）

現地表面の標高は 26.63 ｍである。現地表下 2.5 ｍまでは粘性土を主体とする盛土が堆積する。その下に約 2.5 ｍの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）を主体とする盛土が堆積する。その直下から標高 4.38 ｍまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下約 22 ｍより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No. 3（宇土櫓下空堀中央）

現地表面の標高は 26.63 ｍである。現地表下 2.45 ｍまでは粘性土を主体とする盛土が堆積する。その下に 2.35 ｍの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）を主体とする盛土が堆積する。その直下から標高 9.85 ｍまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下約 17 ｍより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.4（宇土櫓前面石垣背面北側）

現地表面の標高は 37.67 mである。現地表下 30 cmまでは歩道のコンクリートで、その下に 0.7 mの厚さで現代の盛土が堆積する。その直下から標高 28.79 mまでは約 8 m阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。その下標高 11.01 mまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下 26.75 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.5（宇土櫓下空堀南側）

現地表面の標高は 27.29 mである。現地表下 2.65 mまでは粘性土を主体とする盛土が堆積する。その下に 2.35 mの厚さで阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）を主体とする盛土が堆積する。その直下から標高 11.99 mまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下約 15.3 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.6（平左衛門丸南側）

現地表面の標高は 43.99 mである。現地表下 0.39 mまでは平成元年度発掘調査時の埋め戻し土である。その下に約 2.4 mの厚さで明治時代以降の造成土を確認した。その直下から約 0.7 mは熊本城築城以前の造成土である。その下標高 31.39 mまでは阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。その直下から標高 6.29 mまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下約 37.7 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.7（類当御門周辺）

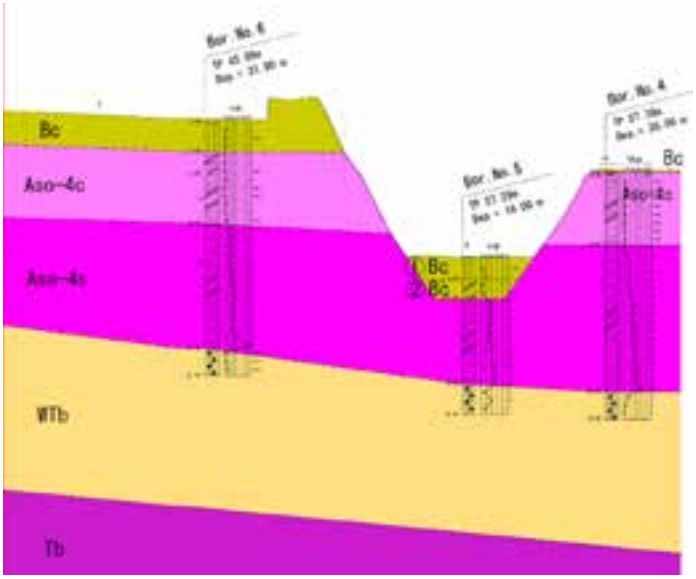
現地表面の標高は 37.98 mである。現地表下 0.35 mまでは現代の表土で、その下に 0.1 mの厚さで現代の盛土が堆積する。その直下から標高 28.18 mまでは約 9 m阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。その下標高 14.18 mまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下 23.8 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

No.8（宇土櫓続櫓南面石垣前面）

現地表面の標高は 39.32 mである。現地表下 0.7 mまでは現代の表土で、その直下から標高 29.82 mまでは約 10 m阿蘇 4 火砕流砂質シルト（Aso-4c）が堆積する。その下標高 22.12 mまでは阿蘇 4 火砕流砂質土（Aso-4s）が堆積する。現地表下 17.2 mより下位は金峰山系の凝灰角礫岩が堆積する。

今回の調査結果より、宇土櫓下空堀内の地山である阿蘇火砕流砂質土（Aso-4s）の上部に、約 5 mの盛土を確認した。盛土は粘性土を主体とするもの（①Bc）、阿蘇火砕流シルト（Aso-4c）を主体とするもの（②Bc）の 2 層に分けられる。②については遺構面形成土の可能性がある。

No.3 コア写真



推定地質断面図

22. 監物台樹木園入り口石畳補修工事立会

地　　点：二の丸（監物櫓周辺）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年) 10 月 5 日
申請番号：熊本城発第 310 号　　**原　因**：石畳補修工事
許 可 日：令和 3 年 (2021 年) 10 月 7 日　　**期　間**：令和 3 年 (2021 年) 10 月 11 日
許可番号：指令（文化財）第 53 号　　**担当者**：嘉村哲也

方　法・概　要

監物台樹木園は二の丸地区北側に位置している。監物櫓下石垣修理の工事車両搬入に際し、ゴムマットによる養生を行っていたが、補修が必要な状況となったため工事が計画された。補修範囲は約 20 ㎡である。石畳の解体及び掘削については熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、掘削深度は約 30 ㎝であった。厚さ 20 ㎝の石材の下は砕石層で、既存の掘削範囲内に収まることを確認した。

掘削地点位置図

掘削状況　（西から）

掘削状況　（東から）

23. 東十八間櫓台等石垣復旧設計に伴うコンクリート構造物基礎構造掘削調査

地　　点：本丸地区（北十八間櫓周辺）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）11 月 10 日
申請番号：熊本城発第 383 号
許 可 日：令和 3 年（2021 年）12 月 17 日
許可番号：3 文庁第 1892 号
原　　因：掘削調査
期　　間：令和 3 年（2021 年）12 月 22 日、
　　令和 4 年（2022 年）　1 月 5 日
担当者：下高大輔・嘉村哲也・佐伯孝央

方　法・概　要

申請地は国指定重要文化財建造物東十八間櫓・北十八間櫓に隣接する五間櫓下の石垣周辺である。平成 28 年熊本地震により被災した東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓下石垣の復旧設計に伴い、五間櫓下石垣にある昭和 34 年に施工された石垣の膨らみを抑え込むためのコンクリート構造物基礎の詳細及び地震の影響等を確認するために掘削調査を行った。調査対象は、10 本のコンクリート支柱のうち、中央付近の支柱 1 本に対して実施し、申請通りの面積 4 ㎡（2 × 2 m）の範囲内において手掘りで実施した。

なお、調査対象のコンクリート構造物が五間櫓下の膨らんだ石垣を抑え込む役割を担っていることから、なるべく最小限の掘削範囲（深度）とした。

成　果

調査の結果、現地表面から 0.6 m程度の箇所でコンクリート構造物基礎の頭が確認できた。そのコンクリートに沿う形でさらに一部を掘削したが、今回掘削した土層は全てコンクリート構造物施工時以降に堆積したものであった。また、橙色土層以上の堆積土については、昭和 34 年（1959）のコンクリート構造物施工時ではなく、ビニール製品等の出土遺物から現在の地上面を覆っている芝生整備に伴う土層と判断した。

本調査の目的であるコンクリート構造物の基礎構造については、0.25 m幅の 10 本の支柱の全ての下部は支柱上部の天端部同様に繋がっている可能性が極めて高いことが確認できた。その規模は支柱同様に 0.25 m幅で高さ 0.7 m、さらにその下部に捨てコンクリートと考えられる 0.03 m程度の幅の広がりも確認できたが、その高さは限界掘削深度に達したため 0.05 m程度しか確認できなかった。

以上のことから、コンクリート構造物の基礎は現在の地表面から 1.35 mよりも下から設置されていることとなる。また、今回目視できたコンクリート基礎部においての地震による影響は確認できなかった。

申請地位置図（■：申請地 □：特別史跡範囲 ―：旧城域 ―：整構）

調査前遠景　（北から）

調査前近景　（北から）

コンクリート基礎頭検出状況　（南から）

コンクリート基礎部検出状況　（南西から）

コンクリート基礎部近景　（西から）

調査区土層堆積状況　（東から）

埋め戻し完了状況（北から）

24. 熊本城三の丸駐車場防護柵修繕工事立会

地　　点：三の丸地区（三の丸第 1 駐車場）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年（2021 年）6 月 3 日
申請番号：（民間申請）　　**原　因**：防護柵修繕
許 可 日：令和 3 年（2021 年）6 月 7 日　　**期　間**：令和 3 年（2021 年）6 月 18 日
許可番号：指令（文化財）第 17 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

申請地は、三の丸第 1 駐車場入り口部分に位置し、江戸時代は武家屋敷が存在した場所である。車両事故による防護柵のき損が生じたため、防護柵修繕工事が計画された。内容は既存のコンクリート部分を 4 か所掘削（直径 16 ㎝）し、防護柵支柱を設置するものである。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、修繕工事の掘削深度は約 28 ㎝であった。掘削範囲は全て既存のコンクリート内に収まる事を確認した。

申請地位置図

立会状況　（東から）

掘削状況　（南から）

掘削断面　（南から）

25. 合同庁舎跡地道路舗装修繕工事立会

地　　点：古城地区（合同庁舎跡地南側道路）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)8 月 24 日
申請番号：中土発第 313 号　　**原　因**：道路舗装修繕工事
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)8 月 26 日　　**期　間**：令和 3 年 (2021 年)9 月 1 日
許可番号：指令（文化財）第 38 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

申請地は古城地区に位置し、合同庁舎跡地南側の道路である。江戸時代は、武家屋敷として利用された場所である。道路に経年劣化による亀裂などが発生していたため、長さ約 120 m、幅約 6 mの範囲で修繕工事が計画された。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

修繕工事は、厚さ約 10 ㎝のアスファルトを削り取るようにして行われた。立会の結果、掘削深度は約 5 ～ 6 ㎝で、全て既存のアスファルト内に収まることを確認した。

申請地位置図

掘削状況　（南から）

掘削断面　（北から）

26. 九州財務局分室存在状況確認調査

地　　点：千葉城地区（九州財務局分室）
種　　類：存在状況確認調査
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)8 月 25 日
申請番号：九財統国 1 第 139 号
許 可 日：―
許可番号：―
原　因：建物解体工事
期　間：令和 3 年 (2021 年)11 月 16 日・17 日
担当者：文化財課

方　法・概　要

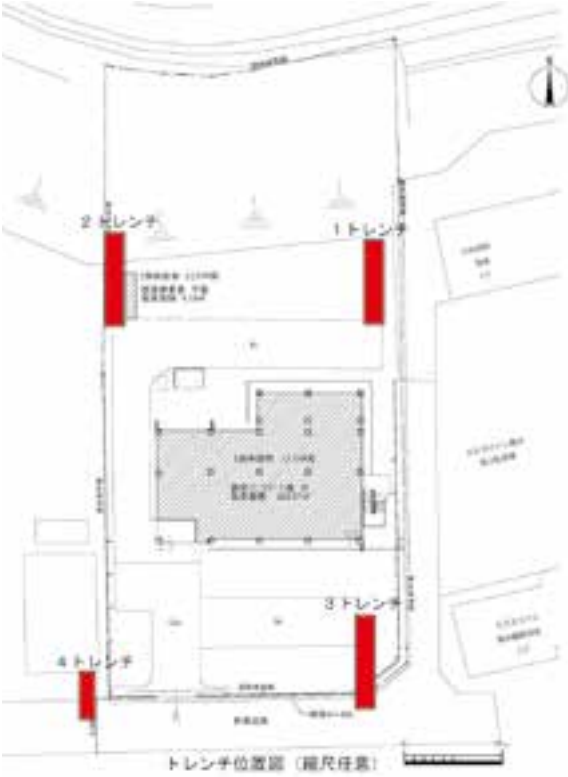
申請地は千葉城地区に位置し、江戸時代には武家屋敷、近代以降は陸軍施設が存在しており、戦後は九州財務局分室として利用されていた場所である。申請地を定期借地として活用するために、現在は使用されていない研修施設の解体工事が計画されたが、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当する土地であるため、九州財務局より存在状況確認調査依頼が提出され、11 月 16 日から 17 日にかけて文化財課により調査が実施された。調査では南北 2 本ずつ計 4 本のトレンチを設定し、重機を用いて掘削を行った。掘削面積は 40.8 ㎡であった。

申請地は旧城域の範囲内であり、特別史跡指定範囲に隣接しているため、文化財課職員とともに熊本城調査研究センター職員（林田・永島）が調査に立ち会った。

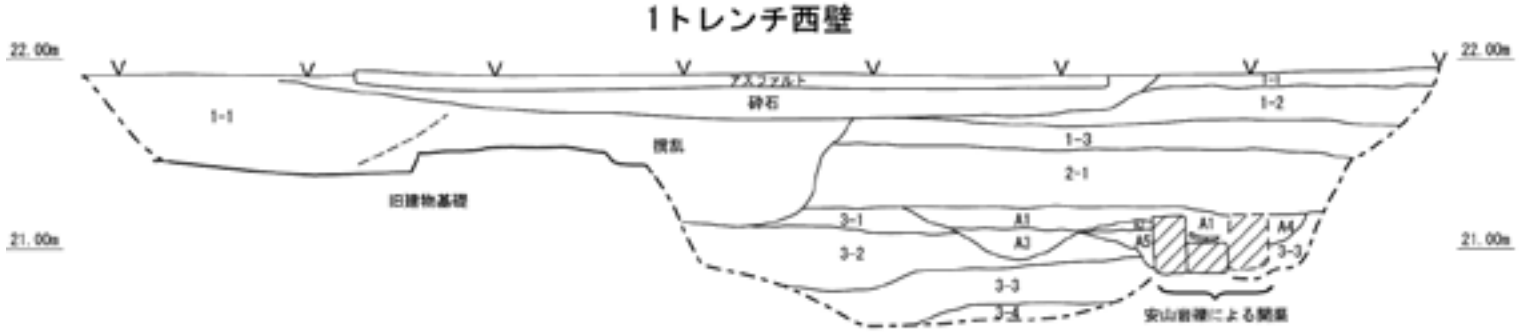
成　果

掘削深度は 1 トレンチで 134 ㎝、2 トレンチで 152 ㎝、3 トレンチで 126 ㎝、4 トレンチで 78 ㎝であった。基本的な層序は以下の通りである。1 層：アスファルト、砕石を含む現代の整地層。2 層:焼土、炭化物、火砕流堆積物を含む近代以降の整地層。(2-1 層・2-2 層・の 2 層に分層できる。) 3-1 層：火砕流堆積物を主体とする幕末～近代初頭の整地層。3-2 層：遺物を含む近世の表土層。3-3 層：火砕流堆積物を主体とし、円礫、炭化物を含む近世の造成土層。3-4 層：火砕流堆積物を主体とする近世の造成土層。

申請地位置図
(■:申請地 □:特別史跡範囲 ―:旧城域 ―:惣構)



掘削地点位置図



土層所見

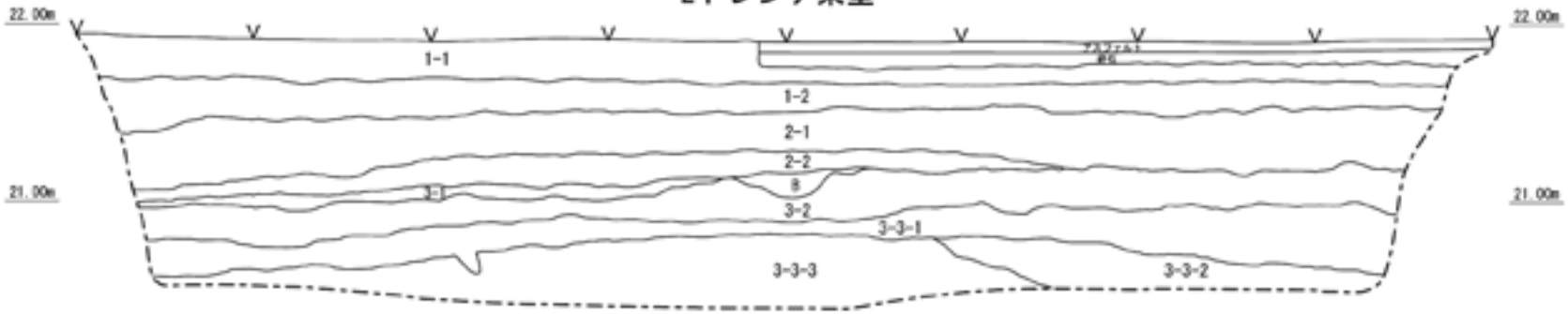
1-1層：暗赤褐色土(Hue5YR3/2) 駐車場建設時の整地層。
1-2層：にぶい赤褐色土(Hue5YR4/3) しまりよい。テニスコート建設時の整地層。（現代の整地層）
1-3層：黒褐色土(Hue10YR3/2) 粒子は粗・細混在し転圧を受けしまっている。粘性はややあり。20cm大以下の礫・焼土・炭・地山の火砕流堆積物・鉄線・ビニール袋を含む。（現代の整地層）
2-1層：黒褐色土(Hue10YR3/1) しまりよい。粘性弱い。粒子粗い。場所により小円礫を少量含む。地山の火砕流堆積物を由来とする。（近代以降の整地層）
3-1層：暗褐色土(Hue7.5YR3/3) しまりよい。粘性やや強い。ロームを少量含む。（近世～近代の造成土）
3-2層：褐色土(Hue7.5YR4/3) 粘性ふつう～やや強い。炭化物を含む。火砕流堆積物由来の造成土。（近世～近代の造成土）
3-3層：灰褐色土(Hue7.5YR4/2) しまりよい。粘性強い。粒子は3-4層よりも粗い。火砕流堆積物由来の造成土。（近世～近代の造成土）
3-4層：にぶい橙色土(Hue7.5YR6/4) しまりよい。粘性強い。色調の異なるブロック土を含む。火砕流堆積物由来の造成土。（近世～近代の造成土）

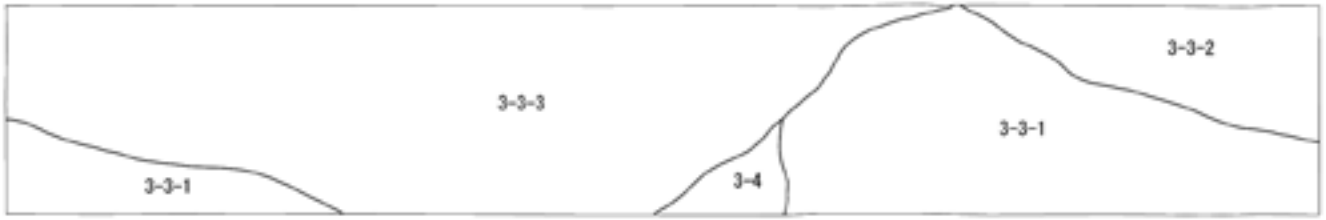
遺構埋土

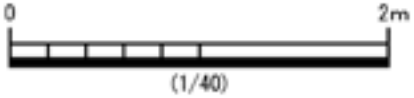
A1層：黒褐色土(Hue7.5YR3/2) しまりやや悪い。礫・漆喰・近代の瓦を含む。開渠の埋土。
A2層：黒褐～暗褐色土(Hue7.5YR3/2.5) 固い。礫・近代の瓦を多く含む。
A3層：黒褐色砂(Hue7.5YR3/1) 礫を多く含む
A4層：黒褐色土(Hue7.5YR3/2) しまりややよい。開渠の掘形。
A5層：黒褐色土(Hue7.5YR3/1.5) しまりよい。粘性弱い。瓦を多く含む。開渠の掘形。

1トレンチ土層図・平面図

2トレンチ東壁







土層所見

1-1層：表土。コンクリート塊、5cm大以下の円礫等含む。

1-2層：黒褐色土(Hue10YR3/2) 粒子は粗・細混在し転圧を受けしまっている。粘性はややあり。20cm大以下の礫・焼土・炭・地山の火砕流堆積物・鉄線・ビニール袋を含む。（現代の表土および整地層）

2-1層：黒褐色土(Hue10YR3/1) しまりよい。粘性弱い。粒子粗い。場所により小円礫を少量含む。地山の火砕流堆積物を由来とする。近代以降の整地層か。（近代以降の整地層）

2-2層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/3) 転圧を受け、しまっている。粘性ややあり。粒子粗い。下位には部分的に灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)が存在する。（近代以降の整地層）

3-1層：褐色土(Hue7.5YR4/4) しまりよい。粘性強い。粒子細かい。小礫・小瓦片等を含む。地山の火砕流堆積物を由来とする。幕末～近代初頭の整地層か。（近世～近代の造成土）

3-2層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3) しまりよい。粘性ややあり。粒子は粗・細あり。地山の火砕流堆積物が混在し、その中に含まれる火山性砕屑物を全体的に含む。
近世の遺物を含んでいる。近世の表土層か。（近世～近代の造成土）

3-3層：にぶい黄褐色土。粘性は3-2層よりも強い。地山の火砕流堆積物を由来とし、その中に含まれる火山性砕屑物を全体的に含むほか、小円礫・炭化物・近世の陶磁器を含む。近世の造成土か。
色調により3層に細分している
- 3-3-1層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3～5/3) ややしまっている
- 3-3-2層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3) 3-3-1・3-3-3層と比べて少し明るい。しまりはやや弱い。
- 3-3-3層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3) ややしまっているが、3-3-1層よりは弱い。

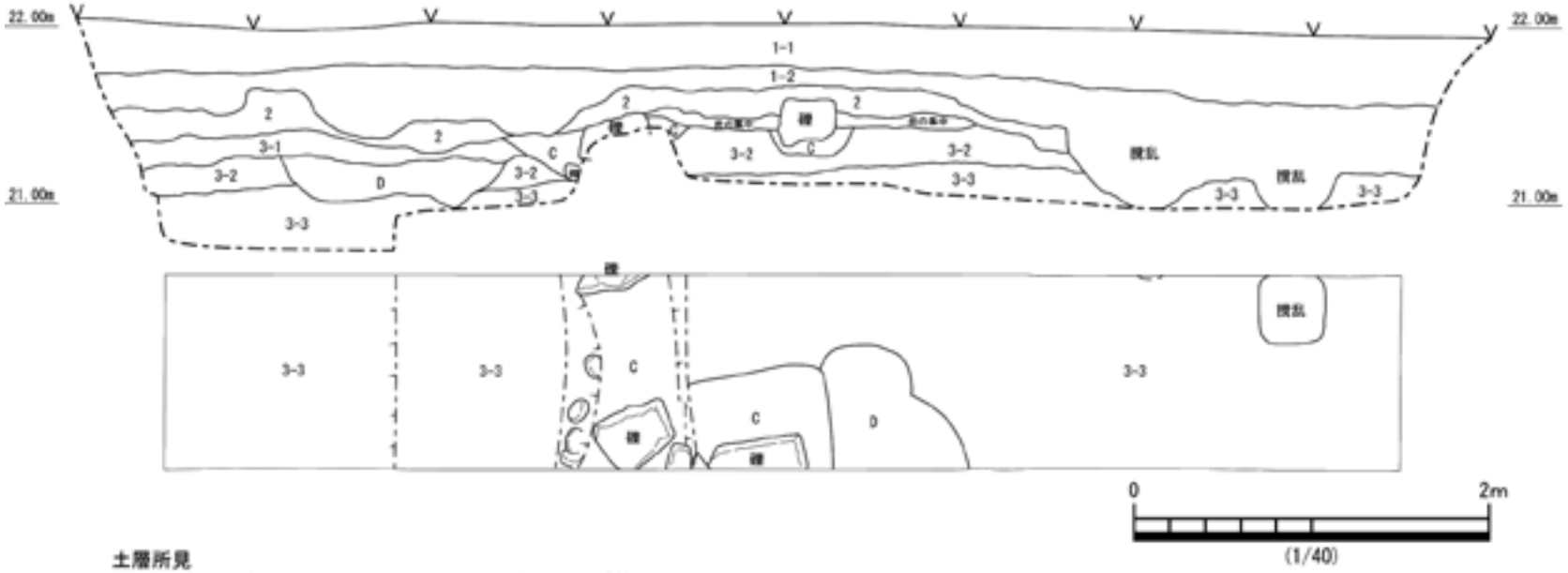
3-4層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4) しまり・粘性が強い。3-3層と同様に地山の火砕流堆積物を由来とする。近世の造成土か。（近世～近代の造成土）

遺構埋土

8層：黒褐色(Hue10YR2/2)を呈する、粒子のやや粗い砂、しまりはやや弱い、西壁面にもほぼ同じ位置に確認できる。小規模な溝と考える。

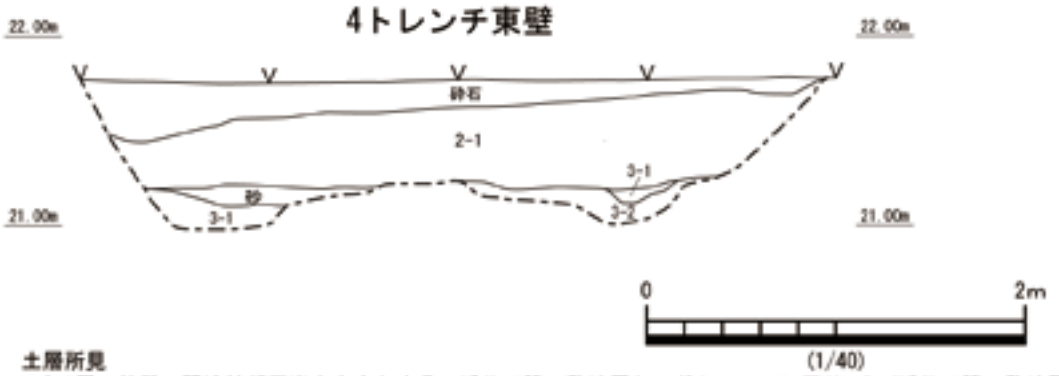
2 トレンチ土層図・平面図

3トレンチ西壁



土層所見
1-1層：表土。(2トレンチに同じ。)（現代の表土および整地層）
1-2層：現代の整地層。(2トレンチに同じ。)（現代の表土および整地層）
2層：地山の火砕流堆積物を由来とする。(近代以降の整地層か)(2トレンチに同じ。)
3-1層：地山の火砕流堆積物を由来とする。幕末～近代初頭の整地層か。(2トレンチに同じ。)（近世から近代の造成土）
3-2層：近世の表土層(遺物包含層)。(2トレンチに同じ。)（近世から近代の造成土）
3-3層：地山の火砕流堆積物を由来とする。近世の造成土。(2トレンチに同じ。)（近世から近代の造成土）
遺構埋土
C層：暗褐色土(Hue10YR3/3) しまっており、粘性は弱い。粒子は粗・細あり。焼土・炭を多く含む。
D層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3) ややしまっており、粘性は弱い。粒子は粗・細あり。
底面付近には拳大の円礫(建物基礎の栗石か)が多く存在する。3-2層を掘り込んでおり、その上位に3-1層が堆積している。(3-1層堆積以前のもの。)

3 トレンチ土層図・平面図



土層所見
2-1層：軟質の弱溶結凝灰岩を由来とする。近代以降の整地層か。(2トレンチに同じ。)（近代以降の整地層）
3-1層：近世の表土層(遺物包含層)。(2トレンチに同じ。)（近世の造成土）
3-2層：地山の火砕流堆積物を由来とする。近世の造成層か。(2トレンチに同じ。)（近世の造成土）

4 トレンチ土層図

遺構は、北側の 1 トレンチにおいて 3 層を掘り込み東西に伸びる安山岩製の開渠が検出されている。遺構埋土には近代の瓦が含まれているため、廃絶時期は近代と考えられる。安山岩を石材として使用する事例は江戸時代のものに多いが、今回の調査で検出された開渠は加工度が高く、幅が厚いなどの差異がある。また、1 トレンチからは北西に伸びる 19 世紀代の陶製土管も検出されたが、これは開渠によって破壊されていた。同じく北側の 2 トレンチの 2 層下面で小規模な溝状遺構が検出されている。南側の 3 トレンチでは近世の礎石と、円礫が集中する土坑が検出されている。

遺物は、1 トレンチから近代の瓦、2 トレンチの 3-2 層と 3-3 層から 17 世紀末～ 19 世紀の陶磁器が出土している。3 トレンチの 2-1 層から近代の瓦やレンガ、3-1 層から 18 世紀～ 19 世紀の陶磁器と近代を中心とする瓦、3-2 層からは 17 世紀～ 19 世紀の陶磁器と近世、近代の瓦が出土している。その他、丸釘や碍子が出土している。

1 トレンチ全景（北東から）

1 トレンチ検出遺構（南西から）

1 トレンチ土層断面（東から）

2 トレンチ全景（南西から）

2 トレンチ土層断面（西から）

3 トレンチ全景（北東から）

3 トレンチ土層断面（西から）

4 トレンチ全景（北西から）

4 トレンチ土層断面（西から）

1 トレンチ出土遺物（A1 層か）

1 トレンチ出土遺物（A1 ～ A2 層）

2 トレンチ出土遺物（3-1 層）

2 トレンチ出土遺物（3-3 層）

3 トレンチ出土遺物（2-1 層）

3 トレンチ出土遺物（3-1 層）

3 トレンチ出土遺物（3-1 層）

3 トレンチ出土遺物（3-2 層）

3 トレンチ出土遺物（3-2 層）

27. 三の丸外灯設置工事立会

地　　点：三の丸地区（日本国際教育支援協会駐車場）
種　　類：文化財保護法第 93 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)10 月 6 日
申請番号：―　　**原　因**：外灯設置工事
許 可 日：―　　**期　間**：令和 3 年 (2021 年)11 月 4 日・5 日
許可番号：―　　**担当者**：文化財課

方　法・概　要

申請地は三の丸地区に位置し、江戸時代には武家屋敷が存在していた場所である。工事は外灯の新設及び既存外灯の建て替えを目的としており、建て替えをしない既存外灯№1 を除いた№2 ～ 6 地点の 5 か所で重機による東西 70 ㎝・南北 80 ㎝、深さ 1.3 ｍの掘削が予定されていた。

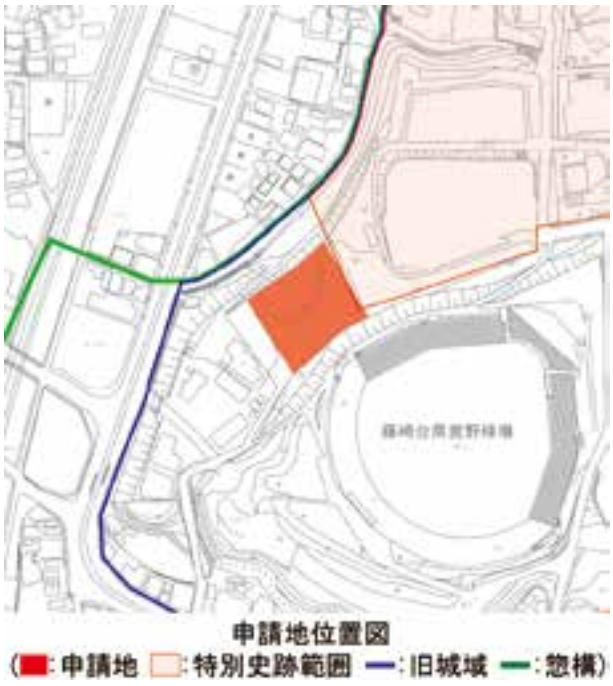
申請地は旧城域の範囲内であり、特別史跡指定範囲に隣接しているため、文化財課職員とともに熊本城調査研究センター職員（林田・永島）が工事に立ち会った。

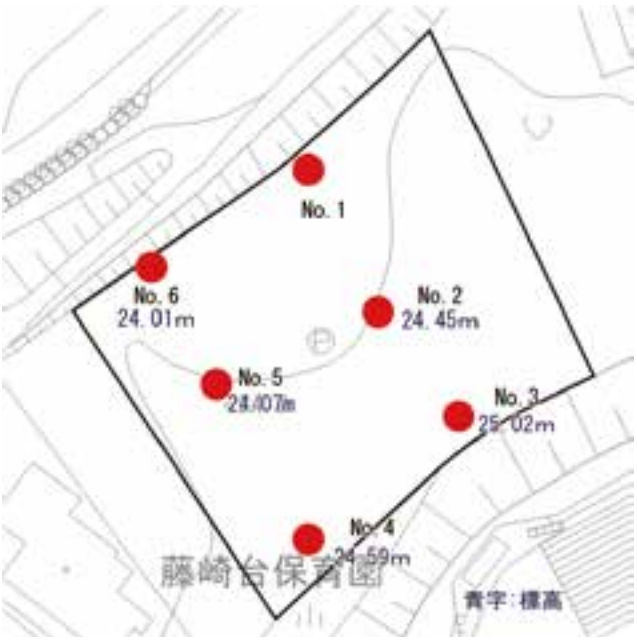
成　果

立会の結果、掘削深度は№2 地点･№5 地点で 1.25 ｍ、№3 地点･№6 地点で 1.3 ｍ、№4 地点で 1.15 ｍであった。

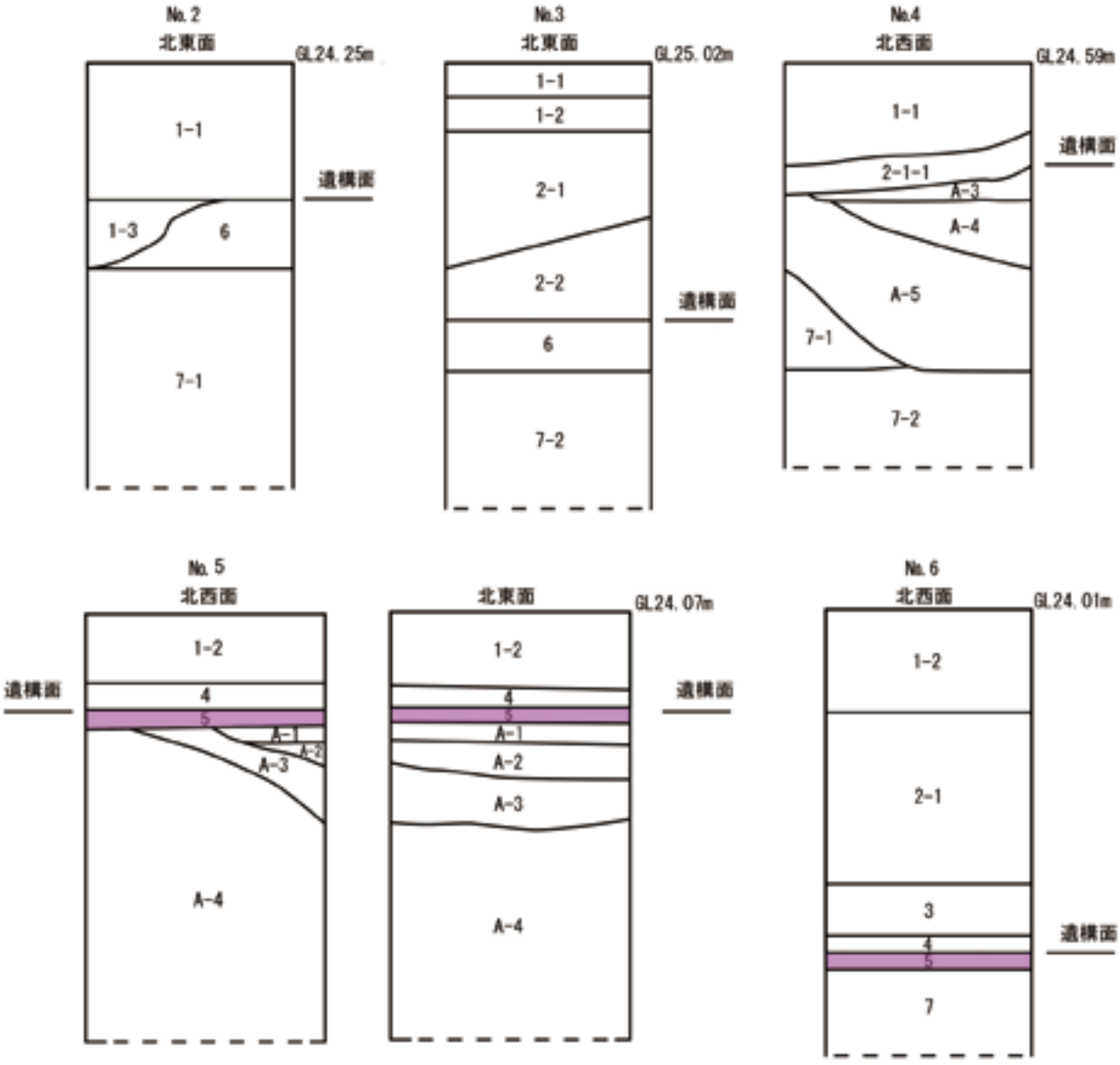
現地は北西側よりも南東側が標高が高く、最大で約 1 ｍの高低差があった。また、各地点での遺構面の高さを比較すると、北西側は南東側より深い地点で遺構が検出されており、特に№6 地点の遺構面は№2 ～ 5 地点に比べ約 1 ｍ深い地点で確認された。江戸時代に描かれた「熊本所分絵図　二丸之絵図」では、№6 地点に該当する部分には道路が描かれており、武家屋敷は道路から約 1 ｍ高い位置に築かれていたと考えられる。

遺構としては№4･5 地点で溝状遺構（A 層）が検出されており、17･18 世紀代の陶磁器が出土している。遺物はその他に、№3 地点の 6 層から江戸時代の陶磁器と目板桟瓦が出土している。





掘削地点位置図



1-1 層：砕石層
1-2 層：灰褐色土層（現代の表土）
1-3 層：円礫・角礫を含む駐車場建設以前に存在した現代建物の基礎
2-1-1 層：アスファルトやガラを含む黒褐色盛土層
2-1-2 層：円礫・ガラス片を含むしまりがややよい黒褐色土層
（近代以降の堆積層）
2-2 層：しまりのよい黒色火砕流堆積層
（火砕流堆積物を主体とした盛土層）

申請地遠景　（北から）

3 層：ガラス片を含むしまりのよい黒褐色土層
（近代以降の整地層）
4 層：炭化物堆積（西南戦争後の整地層か）
5 層：薄く互層状に堆積する黒褐色シルト層
（近代初頭の硬化面）
6 層：暗褐色粘質土層
（江戸時代の造成土
7-1 層：にぶい赤褐色火砕流堆積層（地山）
7-2 層：しまりのよい橙色火砕流堆積層
A 層：溝状遺構　4 層に分層できる
A-1 層：褐色土層　しまりよい、粘性やや弱い
A-2 層：灰褐色～褐色粘質土層　しまりよい
火砕流堆積物を主体とし撹拌が激しい
A-3 層：赤褐色粘質土層　しまり、普通～ややよい
ローム土を主体とする
A-4 層：暗褐色粘質土　しまりよく 18 世紀代の遺物
を含む

土層略図

No.2 地点土層断面　（南西から）

No.2 地点土層断面　近景

No.3 地点土層断面　（南東から）

No.3 地点土層断面　近景

No.3 地点 6 層出土遺物

No.5 地点土層断面　（南西から）

No.5 地点土層断面　（南西から）

No.5 地点土層断面　近景

No.5 地点溝状遺構出土遺物

No.6 地点土層断面　（南西から）

No.6 土層断面　近景

28. 新町 2 丁目水道施設更新事業工事立会

地　　点：新町 2 丁目周辺
種　　類：文化財保護法第 94 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)10 月 20 日
申請番号：熊水整発第 521 号
許 可 日：―
許可番号：―
原　因：配水管布設替え工事
期　間：令和 3 年 (2021 年)11 月 18 日～
令和 4 年 (2022 年) 2 月 24 日
担当者：文化財課

方　法・概　要

申請地は、熊本城遺跡群内に位置し、一部は船場町遺跡に含まれる。江戸時代は熊本城惣構内の武家屋敷・町屋・道路として利用された場所であり、船場町遺跡では現地表下 1.6 ｍで弥生時代の甕棺が出土している。水道施設更新事業に伴う水道管敷設工事について、文化財課と共に熊本城調査研究センター職員（金田・林田）が立ち会った。調査研究センターは今回の立会に対し、古城地区・新町地区の城下に関わる情報収集を目的とした。工事は、電車通りを横断するための推進工法用の立坑試掘と、現道路下の水道管掘削があり、前者を先行して行った。

申請地位置図
(■:申請地 □:特別史跡範囲 ―:旧城域 ―:惣構)

成　果

推進工法用立坑掘削で 4 地点（A ～ D)、水道管掘削で 19 地点(①～⑪、⑦～⑪は複数地点)、合わせて 23 地点において工事に立ち会い、土層観察を行った。

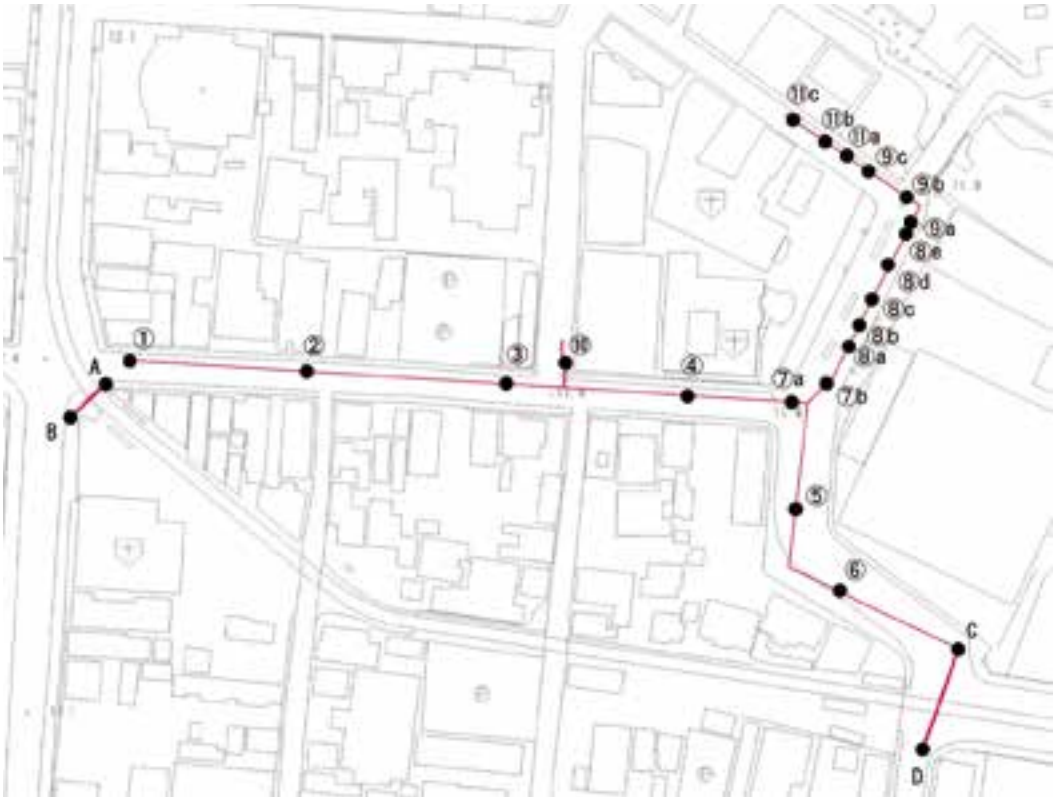
工事範囲の大半は江戸時代以来道路として使用されていたことから、土層はある程度共通している。基本となる層序と確認された地点を示す。

1 層：アスファルト・砕石（全地点）
2 層：明治 10 年西南戦争に伴う瓦礫層（B・C・D・③・④・⑤・⑥・⑦)
3 層：江戸時代の機能面（C・D・①・②・③・④・⑤・⑥・⑧・⑨)
4 層：古代～中世の遺物包含層（D・⑨ a)
5 層：自然堤防に堆積した褐色砂質土と類似層（A・D・⑧ e・⑨ a)

1 ～ 3 層まではおよそどの地点でも共通しているが、4 層以下が確認できた地点は限定される。路面の確認により、江戸時代の遺構面までの深さを特定することができた。ただし、路面は複数確認されたため、相互の対応関係については不明である。路面が確認されなかった A・B 地点は、町屋に位置していたためと考えられる。⑨ c 地点、⑪ a 地点においても路面は確認されなかったが、堀を埋め立てた痕跡が確認された。

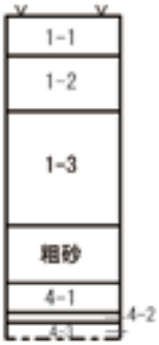
江戸時代以前の状況を確認することができたのは、A・C・D・⑥・⑧ d・⑨ a 地点である。A・D・⑧ d・⑨ a 地点で古代･中世の遺物包含層である 4 層、自然堤防の基盤層となる 5 層（褐色砂質土）を確認した。自然堤防の堆積が認められなかった C 地点・⑥地点・⑧ a 地点・⑧ b 地点は砂層やシルトが確認されたことから、旧流路であった可能性が高い。

路面を除く遺構としては、⑨ａ地点で熊本城以前の土坑を確認した。⑦ｂ地点で石組溝を確認している。⑨ｃ地点では現代まで継続使用中の石組水路を確認した。⑨ｃ地点・⑪ａ地点では堀を埋めた痕跡を確認した。立会結果より、江戸時代・明治時代の絵図を再検討し、併せて道路・町割りとの位置関係を検証した。その結果、「御土居絵図　従三淵永次郎屋敷朽木内匠屋敷迄」より、古城堀は⑨ｃ・⑪上の道路よりも南に広がっていたことが判明した。その後「熊本鎮台敷地図」より、明治９年（1876 年）までに堀を埋め立てて道路が造られたようである。



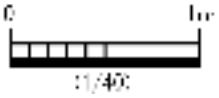
掘削地及び土層観察地点

地点Ａ　北壁

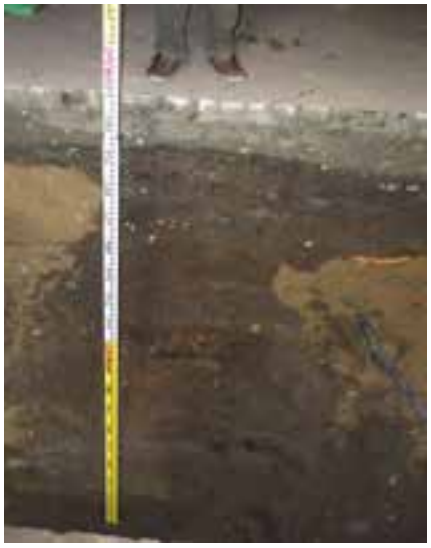


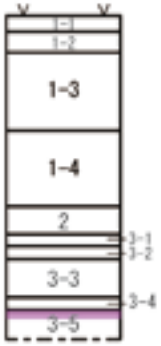
1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：埋戻土
4-1 層：黒褐色土
4-2 層：白色ブロック多い
（古墳時代？）
4-3 層：黒褐色土

所見
地表下 140 ㎝から自然堆積土。中間の白色ブロック層を境に上は古代、下は古墳時代の土層となる。



地点 B　南壁

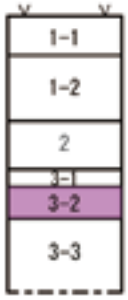




1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：黒褐色土　砕石多く含む覚乱層
1-4 層：黒褐色土　整地層　互層をなす
　　瓦片・焼土・炭化物粒など混入物多い
2　層：焼土ブロックを多く含む　下位に炭化物集中
3-1 層：黒褐色土　砂質感強い土
3-2 層：軽石を含む砂礫層　火砕流起源の土
3-3 層：暗褐色土　炭化物・焼土粒含む
3-4 層：砂質感強い　軟質　上下にうすい層
3-5 層：上面が硬化　しまり強　灰褐色粒含む

所見
2 mを超える複数の整地層があり、地表下 150 cmに路面確認。

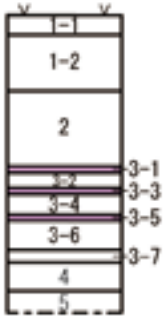
地点 C　西壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
　2 層：瓦レキ層
3-1 層：灰褐色粘質土（10YR4/1）
3-2 層：黒褐色土（10YR3/1）道路　硬化
3-3 層：オリーブ黒砂（5Y3/1）しまりややゆるい（旧流路）

所見
地表下 90 cmに路面、路面の下は自然堆積の砂層（旧流路）。

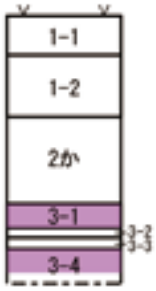
地点 D　西壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
　2 層：瓦礫　焼土　西南戦争か
　　上下にわかれる可能性あり
3-1 層：灰色硬化面　2 層直下の層
3-2 層：黒褐色土　しまり強　砂質感あり
　　焼土含む　上下にわかれて混入物
3-3 層：褐色硬化面
3-4 層：黒褐色土　しまり強　瓦・貝殻多く含む
　　江戸期の磁器碗あり
3-5 層：黒褐色硬化面
3-6 層：褐色土　しまり強
　　焼土・炭化物粒まばらに含む　土師器片出土
3-7 層：黒褐色土
　4 層：黒褐色土　しまり・粘性強　間ゲキ性あり
　5 層：黒褐色砂質土

所見
3 面の路面を確認。路面の下に中世以前の遺物包含層。
その下は 5 層に類似した自然堤防上の堆積土。

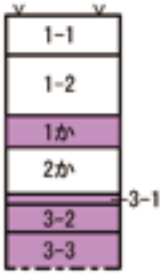
地点①　北壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
2 層か：黒褐色土　整地層　互層状に堆積
　　肉眼では分層できない
　　火砕流のような砂礫主体の層
　　間ゲキ性高くもろい
　　炭化物・貝殻・軽石含む
3-1 層：黒褐色土　やや明るい
　　上面硬化したしまり強
　　粘性強い土　焼土含む
3-2 層：黒褐色土　整地層（2 か）層に近似
3-3 層：暗褐色土　砂質感強
3-4 層：暗褐色土　上面硬化　砂質感強
　　互層をなす？

所見
地表下 55 ㎝で砂礫を主体とした互層状の整地層を確認。
地表下 120 ㎝で複数の路面を確認。

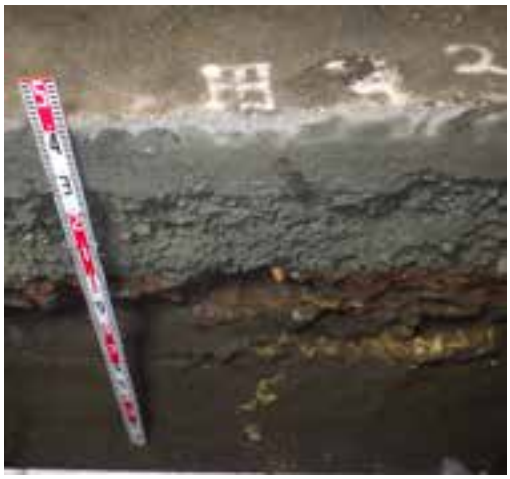
地点②　南壁

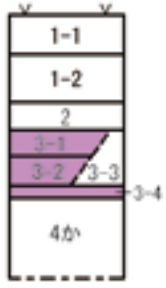


1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1 層か：黒褐色砂質土（7.5YR3/1）路面（近代か）　硬い
2 層か：灰褐色粘質土（7.5YR4/2）混じり多い　しまり普通
3-1 層：黒褐色シルト（7.5YR2.5/2）路面　硬い
3-2 層：黒褐色砂質土（7.5YR3/1）路面　混じり多い　硬い
3-3 層：黒褐色砂質土（7.5YR2/1）路面　硬い　色？は均一
　　この下は互層状に続く

所見
地表下 70 ㎝で灰褐色粘質土下に複数の路面を確認。

地点③　北壁





1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
　2 層：焼土　炭化物・瓦を多く含む
3-1 層：黒色砂（10YR3/1）砂主体
　　焼土・瓦が混じる
3-2 層：褐灰砂（10YR4/1）上面が硬化
　　ほぼ砂
3-3 層：浅黄色（2.5YR7/4）
3-4 層：硬化面　黒褐色（10YR3/1）砂主体
　　シルトが硬化
4 層か：黒褐色（10YR2/2 と 2/3 の間）
　　細かな砂又はシルト
　　軟質　粘性弱い　中世の包含層？

所見
地表下 73 ㎝から路面を 2 面確認。
路面の下は中世の遺物包含層か。

地点④　北壁

1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
2 層：焼土
3-1 層：黒褐色砂　近世
3-2 層：黒褐色砂　路面かも
3-3 層：黒褐色砂質土
（近世の二次堆積層）

所見
地表下 107 ㎝で路面。

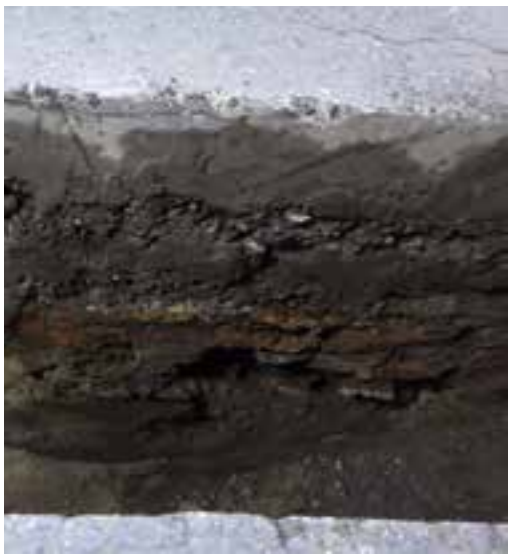
地点⑤　西壁

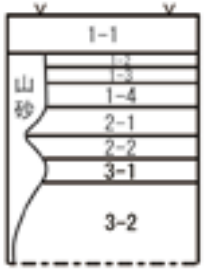
1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
2　層：瓦を多量に含む焼土　西南戦争時か
3-1 層：黒褐色土（7.5YR3/1）
路面か、かたい
3-2 層：黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
たぶん路面か、ややかたい
3-3 層：黒褐色土（7.5YR3/1.5）粘性強い、
しまりよい　路面か（ややかたい）
3-4 層：黒褐色土（7.5YR3/1）貝含む、
粘性やや強い　しまりややよい、
近世遺物あり
3-5 層：黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
もっと均質な土　ややかたい　路面か

※3-1 層以下基本は勢だまりとしての路面
3-2 層以下は硬化面とまではいえない
3-4 層は貝・遺物含むため、何らかの造成があった？
3-5 層まで近世か

所見
4 面の路面を確認。最下層の路面は間層を挟む。

地点⑥

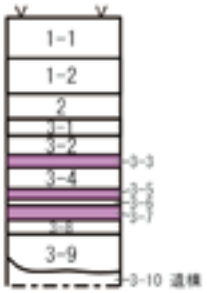




1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：黒褐色土（7.5YR2/2）。しまり強い。
粘性弱い
1-4 層：黒色土（7.5YR2/1）。砕石を含む。
しまり強い
2-1 層：焼土。基質は黒褐色土（7.5YR2/2）。
しまり強い。粘性弱い
2-2 層：焼土。基質は黒色土（7.5YR2/1）。
しまり強い。粘性弱い。
3-1 層：黒色土（7.5YR2/1）瓦を多量に含む。
しまりやや強い。粘性弱い。
モクモクした土
3-2 層：黒褐色砂（7.5YR3/2）。しまり強い。
粘性なし（旧流路）

所見
現地表下 90 ㎝で旧流路

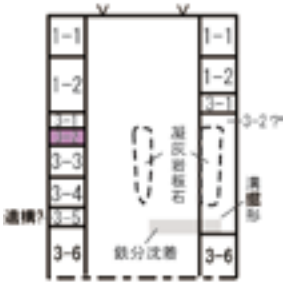
地点⑦ａ　北壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
2　層：焼瓦層
3-1 層：黒褐色土（10YR3/1）砂礫層
3-2 層：黒褐色土（10YR3/2）
　　砂質感強く軟質
3-3 層：黒色土（10YR2/1）　路面
　　砂質感強い　石炭ガラ入る
3-4 層：暗褐色土（10YR3/3）
　　しまりやや強、粘性やや強
3-5 層：黒褐色土（10YR3/2）　路面
　　褐色土粒含む
3-6 層：黒褐色土（10YR3/2）
3-7 層：黒褐色土（10YR2/2）　路面
3-8 層：黒褐色土（10YR2/2）
3-9 層：黒褐色土（10YR3/2）
　　しまり・粘性強い
3-10 層：黒褐色灰層（10YR2/2）
　　しまり・粘性弱　遺構埋土

所見
地表下 70 ㎝以下に間層を挟み 3 面の路面を確認。
最下層に灰を多量に含む土層があり、遺構の可能性高い。

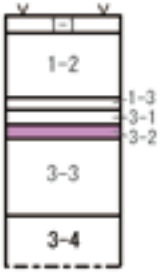
地点⑦ｂ　北壁



1-1 層：注記なし
1-2 層：注記なし
3-1 層：黒褐色土（10YR3/2）
　　地点⑦ａの 3-2 層と同じ　砂質感強く軟質
3-2 層：暗褐色土　混入物多い西面では硬化している
3-3 層：黒褐色土（10YR2/2）軟質
3-4 層：黒色土（10YR2/1）砂質感強い
3-5 層：黒褐色土（10YR2/2）褐色土多く含む　軟質
　　遺構か
3-6 層：黒色砂層（旧流路）

所見
地表下 60 ㎝で凝灰岩製の石組み溝確認。幅 25 ㎝、深さ 40 ㎝強。溝天端と路面は同レベル。
地表下 100 ㎝から砂層となる。

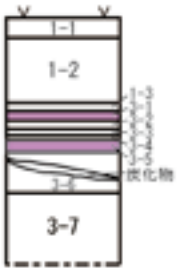
地点⑧ａ　東壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：砕石？旧路面？
3-1 層：暗褐色土　見た目明るく、きめ細かい
3-2 層：黒褐色土（10YR2/2）軟質　路面
3-3 層：暗褐色土
3-4 層：シルト（旧流路）

所見
地表下 58 ㎝で路面。

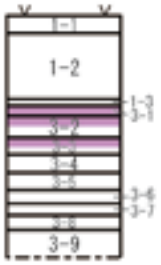
地点⑧ｂ　東壁



1-1 層：注記なし
1-2 層：注記なし
1-3 層：砂礫
3-1 層：地点⑦ｂの３－３層と同じ
　　黒褐色土（10YR2/2）軟質
3-2 層：暗褐色土　ややしまる
3-3 層：赤褐色土
3-4 層：炭化物層
3-5 層：
3-6 層：暗褐色土　軟質　イコウ？
3-7 層：シルト（旧流路）

所見
地表下 65 ㎝で路面。それより下位に大量の炭化物を含む土層堆積（遺構か）。

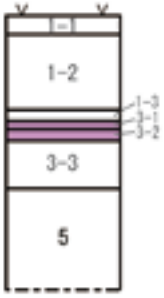
地点⑧ｄ　東壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：砂礫
3-1 層：黒褐色土
3-2 層：暗褐色土　瓦礫層
3-3 層：シルト質　ブロック土を含む
3-4 層：暗褐色土
3-5 層：黒褐色土
3-6 層：黒色砂層
3-7 層：暗褐色土
3-8 層：暗褐色土　明るい、漆喰含む
3-9 層：黒褐色土　瓦含む

所見
地表下 58 ㎝で路面。

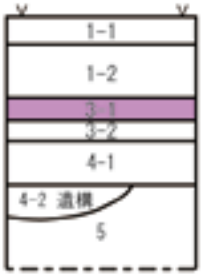
地点⑧ｅ　東壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：砂礫層
3-1 層：暗褐色土
3-2 層：暗褐色土
3-3 層：暗褐色土
　5 層：暗褐色土　砂質感強い
　　褐色土ブロック含む

所見
地表下 52 ㎝より下に路面２面。
路面下の土層は細かな整地を繰り返す。

地点⑨ａ　東壁



1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
3-1 層：路面　黒褐色（10YR3/1）
3-2 層：砂　黒色砂質土　黒色（10YR2/1）
4-1 層：褐色砂　包含層？　古代～中世
4-2 層：遺構：黒褐色（7.5YR2/2）
古代～ 中世
5 層：褐色砂層

所見
地表下 43 ㎝から 2 面の路面。

地点⑨ｃ　南壁

1-1 層　：アスファルト
1-2 層　：砕石
1-3 層　：山砂がかたまった層
1-4 層　：砂利層
2-1 層か：シルト　砂質　黒褐色（10YR2/2）
（堀埋立）
2-2 層か：黒色土（10YR2/1）　造成土
（堀埋立）
しまりない　礫を含む

所見
地表下 68 ㎝より下は堀の埋め立て土。
2 層か：明治 10 年西南戦争に伴う瓦礫より古い可能性あり。

地点⑨ｃ

所見
石組みの水路。現在も排水管の一部として利用。
石材は安山岩主体で一部に凝灰岩を使用。

地点⑩　東壁

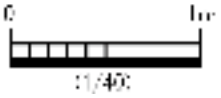
1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：暗褐～黒褐色土（7.5YR3/2.5）
既存掘削後の埋め土
撹拌されている
しまりやや悪い

所見
1-3 層より下は既存工事の埋戻し土。

地点⑪ａ　南壁

1-1 層：アスファルト
1-2 層：砕石
1-3 層：山砂　固い
1-4 層：砂利
2 層か：黒褐色粘質土（10YR3/2）

所見
地表下 61 ㎝以下は堀の埋め立て土。
2 層か：明治 10 年西南戦争に伴う瓦礫より古い可能性あり。



29. 熊本ＹＭＣＡ跡地確認調査

地　　点：新町地区（熊本ＹＭＣＡ跡地）
種　　類：文化財保護法第 93 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)11 月 19 日
申請番号：―　　**原　因**：共同住宅建設
許 可 日：―　　**期　間**：令和 4 年 (2022 年)1 月 26 日～ 28 日
許可番号：―　　**担当者**：文化財課

方　法・概　要

申請地は新町地区に位置し、江戸時代に描かれた「高麗門　塩屋町絵図」より、江戸時代には北側に城域と新町を区分する水堀、南側に勢屯と呼ばれる広場が存在していたことがわかっている。昭和 40 年（1965 年）に熊本ＹＭＣＡの建物が建設されたが、令和 3 年 (2021 年) に解体されている。その後、申請地に共同住宅が建設されることになった。工事では杭打ち・地盤改良がなされる計画となっており、埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性があることから確認調査が行われることになった。令和 3 年 11 月 19 日に土木工事等による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、令和 4 年 1 月 26 日から 28 日にかけて文化財課により調査が実施された。調査では 13 本のトレンチを設定し、重機を用いて掘削を行った。掘削面積は 57.4 ㎡であった。

申請地は旧城域の範囲内であり、特別史跡指定範囲に隣接しているため、文化財課職員とともに熊本城調査研究センター職員（林田・永島）が調査に立ち会った。

成　果

基本的な層序は以下の通りである。1 層：表土及びコンクリート、礫を含む層。熊本ＹＭＣＡ解体に伴う土層。2 層：焼土及び近代の遺物を含む黄褐色土層。西南戦争後の整地層と考えられる。3 ～ 5 層：近世の遺物を含むしまりが良く粘性の強い土層。色調・土質によって 3 ～ 5 層の 3 層に分層できた。勢屯に関連する整地層と考えられる。3 層直上が最終遺構面である。6 層：砂粒を多く含み、粘性の強い暗灰色土層。勢屯以前の堆積層と考えられる。

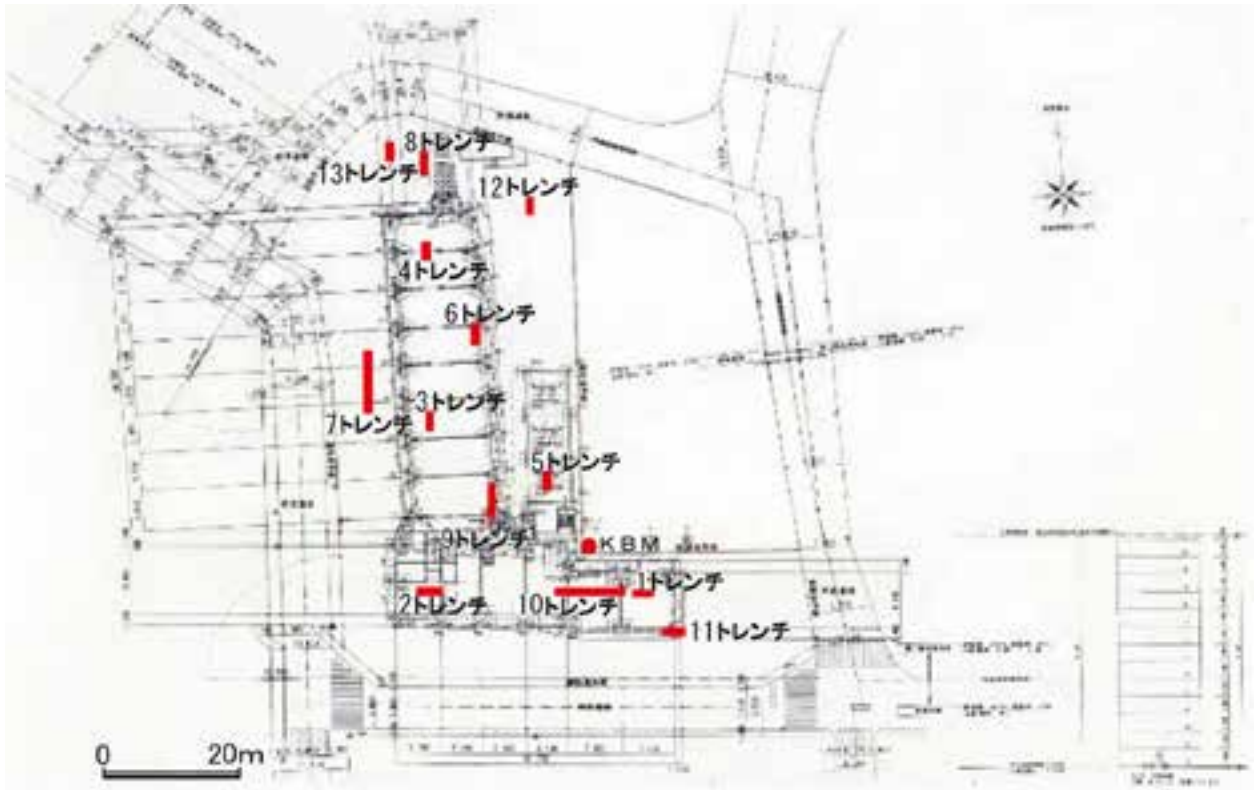
遺構は 4・6・8・11・12・13 トレンチで堀の埋土（A）が検出されている。粘性が非常に強いオリーブ黒色土である。「高麗門　塩屋町絵図」にみられるように、北西から南東へと延びる様子が窺えた。なお、この水堀は西南戦争時の政府軍と薩摩軍の配置を記した「両軍配備図」にはみられないことから明治の初めに廃絶されたものと考えられるが、今回の調査で出土した遺物からは断定できなかった。

各トレンチで出土した遺物は次の通りである。4 トレンチでは堀埋土である A 層から近世の陶磁器や瓦・木製品が出土している。6 トレンチでは A 層から近世～近代の瓦が出土している。7 トレンチでは 4 層から近世の陶磁器や、九曜紋軒平瓦などが出土している。5 層からは近世の陶磁器とフイゴ、獣骨が出土している。9 トレンチでは 3 層から陶磁器や丸瓦、木製品が、5 層からは近世の陶器のほか、漆器も出土し

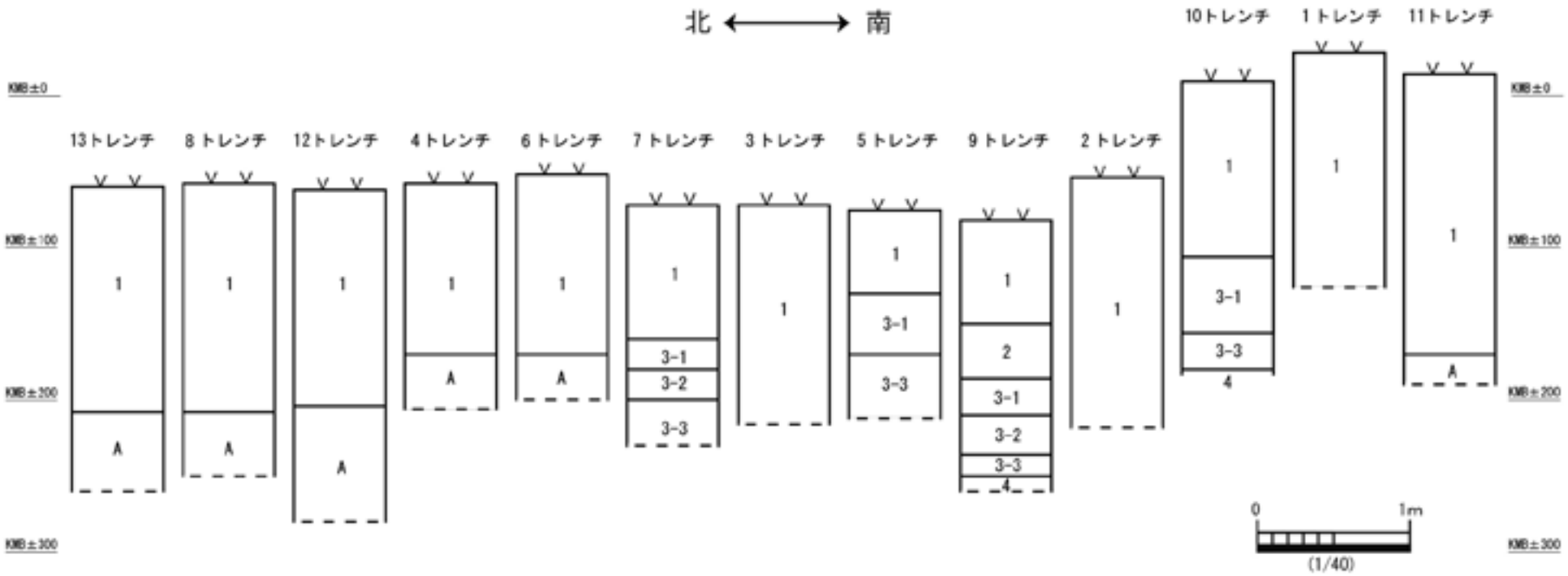
ている。12 トレンチでは A 層から近世の陶器が出土している。

「高麗門　塩屋町絵図」（熊本県立図書館蔵）

「両軍配備図」（熊本博物館蔵）



トレンチ位置図



1層：表土および礫・コンクリートを含む層。旧建物解体時の埋め戻し層。(現代の表土・整地層)

2層：黄褐色土（10YR5/6)
粘性弱い。焼土・近代の陶磁器・瓦を含む。西南戦争後の整地層か。(近代以降の整地層)

3-1層：にぶい黄褐色土（10YR4/3)
粘性強い。しまりよい。近世の陶磁器・瓦を含む。勢屯に関連する整地層か。(近世の整地層)

3-2層：褐灰色土（10YR4/1)
粘性やや強い。しまりややよい。近世の陶磁器・瓦を含む。勢屯に関連する整地層か。(近世の整地層)

3-3層：黒褐色土（2.5YR3/2）粘性強い。
しまりよい。近世の陶磁器・瓦・獣骨を含む。勢屯に関連する整地層か。(近世の整地層)

4層：暗灰色土（N3/)
粘性強い。砂粒を多く含む堆積層。(近世以前の堆積層)

A：オリーブ黒色土（7.5YR2/2)
粘性非常に強い。近世の陶磁器・瓦・木製品を含む。堀の埋土。

土層略図

申請地全景（北から）

1 トレンチ土層断面（北から）

2 トレンチ土層断面（北から）

3 トレンチ土層断面（西から）

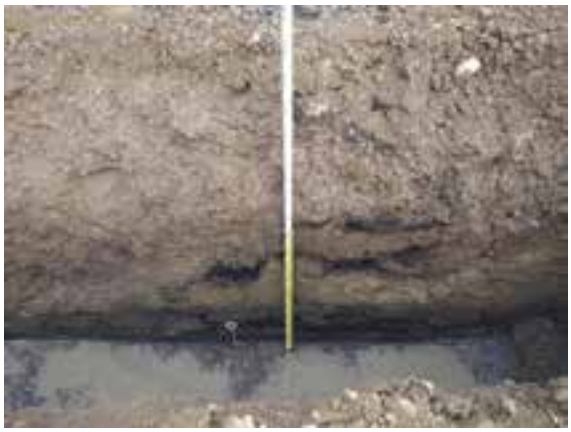
4 トレンチ土層断面（西から）

5 トレンチ土層断面（西から）

6 トレンチ土層断面（西から）

7 トレンチ土層断面（西から）

8 トレンチ土層断面（東から）



9 トレンチ土層断面（西から）

10 トレンチ土層断面（南西から）

11 トレンチ土層断面（北から）

12 トレンチ土層断面（西から）

13 トレンチ土層断面（西から）

4 トレンチ A 層出土遺物

6 トレンチ A 層出土遺物

7 トレンチ 4 層出土遺物

7 トレンチ 5 層出土遺物①

7 トレンチ 5 層出土遺物②

9 トレンチ 3 層出土遺物

9 トレンチ 5 層出土遺物①

9 トレンチ 5 層出土遺物②

12 トレンチ A 層出土遺物

30. 三の丸駐車場舗装陥没箇所復旧に伴う工事立会

地　　点：三の丸地区（三の丸第一駐車場）
種　　類：文化財保護法第 33 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)12 月 6 日
申請番号：熊本城発第 409 号　　**原　因**：舗装陥没
許 可 日：－　　**期　間**：令和 4 年 (2022 年)1 月 12 日
許可番号：－　　**担当者**：山下宗親

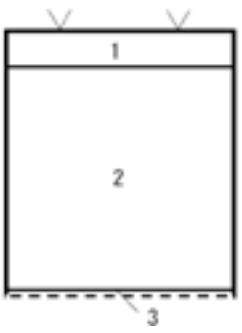
届出地は三の丸地区の駐車場内で、江戸時代には武家屋敷として利用された場所である。令和 3 年 12 月 4 日アスファルトの陥没を確認し、復旧工事を実施することとなった。復旧工事に伴い、原因の調査と遺構の確認のために工事立会を実施した。陥没箇所は 1 か所で、一辺約 30 ㎝、深さ約 50 ㎝以上の空洞を確認した。陥没箇所を復旧するために、復旧範囲を長さ 4.5 m、幅 2.3 mに設定した。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。陥没による危険箇所を除去した後、山砂で埋め戻しを行った。

届出地位置図
(■:申請地 □:特別史跡範囲 ―:旧城域 ―:惣構)

成　果

立会の結果、掘削深度は約 70 ㎝であった。陥没による危険部分の除去のため、2 層まで掘削を行った。陥没箇所は不定形な円弧を示し、陥没内部から木の根が発見された。このことから、木の根が朽ちたことにより生じた空間の陥没が、今回のき損の原因と考えられる。

東壁土層断面



1 層：アスファルト
2 層：山砂層
3 層：黒褐色土層
　　現代プラスチック片を含む

土層略図

調査前　（東から）

陥没状況確認　（東から）

検出状況　（南から）

土層断面　（東から）

31. 棒庵坂フェンス修繕工事立会

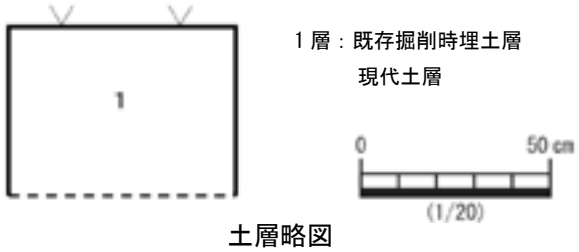
地　　点：本丸地区（棒庵坂）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 3 年 (2021 年)12 月 14 日
申請番号：熊本城発第 411 号　　**原　因**：フェンスの修繕
許 可 日：令和 3 年 (2021 年)12 月 17 日　　**期　間**：令和 4 年 (2022 年)1 月 19 日
許可番号：指令（文化財）第 80 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

申請地は、県道四方寄熊本線沿いの歩道脇である。江戸時代は棒庵坂裾の通路にあたる。令和 3 年 10 月 26 日フェンスのき損が確認され、修繕工事が計画された。内容は既存支柱の掘削範囲内を掘削し、新規の支柱と交換するものである。一辺約 18 ㎝の範囲で、2 か所の掘削が計画された。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、手作業で行われた。

成　果

立会の結果、支柱部分の掘削深度は、約 45 ㎝であり、既存の掘削範囲内に収まることを確認した。



土層略図

き損状況　（南から）

撤去作業　（南から）

南側支柱撤去　（東から）

北側支柱撤去　（東から）

32. 薬研堀横舗装補修工事立会

地　　点：二の丸地区（薬研堀横）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 4 年（2022 年）1 月 4 日
申請番号：熊本城発第 437 号　　**原　因**：舗装補修
許 可 日：令和 4 年（2022 年）1 月 5 日　　**期　間**：令和 4 年（2022 年）1 月 18 日
許可番号：指令（文化財）第 82 号　　**担当者**：山下宗親

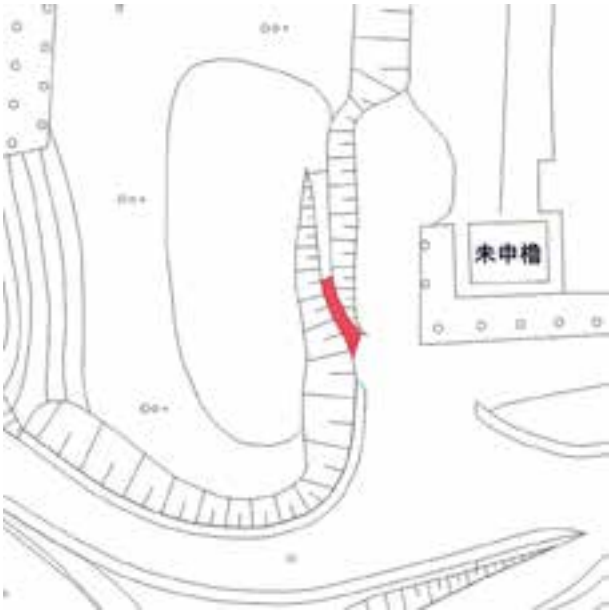
方　法・概　要

申請地は奉行丸西側の薬研堀管理用通路であり、江戸時代は空堀の東壁面であった部分に設けられている。管理用通路に経年劣化による亀裂が発生していたため、補修工事が計画された。補修は長さ約 12 m、幅約 2.8 mの範囲で予定された。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、掘削深度は約 20 ㎝であった。コンクリート舗装の下は砕石層で、既存の掘削範囲内に収まることを確認した。

申請地位置図（■：申請地　□：特別史跡範囲）



掘削地点位置図

掘削状況　（南から）

掘削断面　（南から）

33. 熊本県立美術館横舗装補修工事立会

地　　点：二の丸地区（熊本県立美術館横）
種　　類：文化財保護法第 125 条
申 請 日：令和 4 年（2022 年）3 月 3 日
申請番号：熊本城発第 539 号　　**原　因**：舗装補修
許 可 日：令和 4 年（2022 年）3 月 8 日　　**期　間**：令和 4 年（2022 年）3 月 14 日
許可番号：指令（文化財）第 98 号　　**担当者**：山下宗親

方　法・概　要

申請地は熊本県立美術館横の園路に位置し、江戸時代の住江門から二の丸武家屋敷に至る通路上にあたる。園路に経年劣化による亀裂が発生していたため、補修工事が計画された。補修箇所は 3 か所で、東側地点が 1 辺約 2 mの範囲、中央地点が長さ約 3.6 m、幅約 1.4 mの範囲、西側地点が長さ約 9.7 m、幅約 5.5 mの範囲で予定された。掘削は熊本城調査研究センター職員立会のもと、重機で行った。

成　果

立会の結果、掘削深度は 3 か所とも約 12 ㎝であった。舗装の下は山砂で、その直下に砕石を確認した。砕石までは既存園路施工に伴うものである。掘削は全て既存の掘削範囲内に収まることを確認した。

申請地位置図（■：申請地　□：特別史跡範囲）

掘削地点位置図

西側地点掘削状況　（南から）

西側地点掘削断面　（北から）

(5) 学会など、外部団体による調査

・地盤工学会　香川大学　山中稔氏、長崎大学　杉本知史氏

調査期間：平成 28 年～継続中（令和 3 年 6 月 25～26 日、10 月 21 日、12 月 11 日）

調査目的：石垣の形状による地震時の挙動検証や、簡易的な手法を用いた石垣変状の調査及び、手法の確立などを行う。

・地盤工学会　長崎大学　杉本知史氏、石塚洋一氏

調査期間：平成 29 年～継続中（令和 3 年 7 月 9～10 日、7 月 31 日、8 月 27 日、9 月 24 日、10 月 20～21 日、10 月 31 日、11 月 27～28 日、12 月 11 日）

調査目的：平成 28 年熊本地震により被災した熊本城内の石垣は崩壊に至っていないものでも、今後の被害の拡大が懸念される。変状の大きな石垣の遠隔モニタリングの手法確立と継続的な観測による石垣の健全性評価を行う。

香川大学加振電波速度試験

モニタリングメンテナンス作業

2. 委員会運営

(1) 委員会の目的

熊本市は特別史跡熊本城跡の保存と活用の在り方について幅広く総合的に検討するために特別史跡熊本城跡保存活用委員会を設置している。また、平成 28 年熊本地震で発生した石垣・建造物の文化財としての適切な復旧方法を検討するために熊本城修復検討委員会を設置している。両委員会は適宜審議内容を共有し、連携を図っている。

a. 特別史跡熊本城跡保存活用委員会委員名簿（令和 3・令和 4 年度）　（令和 3 年 4 月 1 日現在）

氏　名	分　野	役　職　等
伊東　龍一	建築学 （日本建築史）	熊本大学大学院先端科学研究部教授 熊本市文化財保護委員会委員
伊東　麗子	植　物	樹木医 （株式会社　九州開発エンジニヤリング）
小畑　弘己	考古学 （史跡）	熊本大学大学院人文社会科学部研究部教授 同付属国際人文社会科学研究センター 新資料学・歴史理論領域長
河島　一夫	地元地域	元上通商栄会会長
小堀　俊夫	文化振興	熊本県文化協会常務理事
坂本　浩	経済界 （地域活性化）	熊本商工会議所専務理事
西嶋　公一	経済界 （地域活性化）	熊本経済同友会常任幹事 熊本城前地区まちづくり協議会事務局長
服部　英雄	文化・歴史	名古屋城調査研究センター長 九州大学名誉教授
廣瀬　美樹	公募	
毛利　秀士	地元地域	一新校区自治協議会顧問
森崎　正之	観光	日本旅行業協会九州支部熊本県地区委員会副委員長
山尾　敏孝	土木工学 （歴史遺産）	熊本大学名誉教授 熊本市文化財保護委員会委員
山田　貴司	歴史学	福岡大学人文学部准教授

b. 熊本城文化財修復検討委員会委員名簿（令和３・４年度）　　（令和３年４月１日現在）

氏名	分野	役職等
伊東　龍一	建築学 （日本建築史）	熊本大学大学院先端科学研究部教授 熊本市文化財保護委員会委員
北野　博司	考古学 （石垣）	東北芸術工科大学教授
北原　昭男	建築学 （木質構造）	熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻教授
千田　嘉博	考古学 （城郭）	奈良大学文学部教授
西形　達明	土木工学 （石垣構造）	関西大学名誉教授 関西地盤環境研究センター顧問
山尾　敏孝	土木工学 （歴史遺産）	熊本大学名誉教授 熊本市文化財保護委員会委員

(2) 審議内容

a. 特別史跡熊本城跡保存活用委員会

第１回　令和３年(2021 年)7 月 27 日（火）　市役所別館自転車駐車場８階会議室

議題・報告　・今年度の委員会について
・熊本城域の基本情報
・千葉城地区（ＮＨＫ跡地等）の史跡整備計画について
・「熊本城みどり保存管理計画」について
・今年度の復旧事業予定について

出席委員　伊東(龍)委員長、伊東(麗)委員、河島委員、小堀委員、坂本委員、西嶋委員、服部委員、廣瀬委員、毛利委員、森崎委員、山尾委員、山田委員（山田委員はリモート参加）
（計 12 名）

第２回　令和３年(2021 年)11 月 29 日（月）　市役所別館自転車駐車場８階会議室

議題・報告　・史跡整備に伴うＮＨＫ跡地の発掘調査について
・「熊本城みどり保存管理計画」について
・令和３年度熊本城復旧・整備状況について

出席委員　伊東(龍)委員長、伊東(麗)委員、小畑委員、河島委員、小堀委員、坂本委員、西嶋委員、服部委員、廣瀬委員、毛利委員、山尾委員　（計 11 名）

第３回　令和４年(2022 年)3 月 29 日（火）　熊本市教育センター4 階大研修室

議題・報告　・「熊本城みどり保存管理計画」について
・熊本城復旧取組状況について
・熊本城特別公開の実施状況等について
・史跡整備に伴うＮＨＫ跡地の発掘調査について（現地視察の説明）
・委員会の事前説明について

出席委員　伊東(龍)委員長、伊東(麗)委員、小畑委員、河島委員、小堀委員、坂本委員、西嶋委員、

服部委員、廣瀬委員、毛利委員、森崎委員、山尾委員、山田委員　　（計 13 名）

b. 熊本城文化財修復検討委員会

第 1 回　令和 3 年（2021 年）5 月 31 日（月）　熊本市教育センター4 階大研修室ほか（リモート）

審議　・熊本城石垣耐震診断指針報告
・重要文化財宇土櫓下石垣（続櫓）の復旧に関する報告・検討
・飯田丸五階櫓台石垣の復旧に関する報告・検討
・北十八間櫓ほか 8 棟の耐震診断結果報告・耐震補強案検討

出席委員　山尾委員長、伊東委員、北野委員、北原委員、千田委員、西形委員
（北野委員、千田委員、西形委員はリモート参加）　（計 6 名）

第 2 回　令和 3 年（2021 年）8 月 6 日（金）　桜の馬場城彩苑多目的交流施設

審議　・飯田丸五階櫓下石垣復旧方針案
・平櫓排水路検討の発掘調査案
・本丸御殿下石垣復旧方針案
・東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓下石垣復旧方針案
・監物櫓下石垣解体完了視察
・平左衛門丸発掘調査視察

出席委員　山尾委員長、伊東委員、北野委員、北原委員、千田委員、西形委員　（計 6 名）

第 3 回　令和 3 年(2021 年)10 月 18 日（月）　熊本市国際交流会館 4 階第 3 会議室

審議　・本丸御殿下石垣復旧措置案
・東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓（北東櫓群）下石垣復旧措置案
・平櫓周辺石垣危険部位の措置について
・宇土櫓続櫓の耐震補強案の検討について
・平左衛門丸発掘調査成果報告
・要人櫓下石垣復旧完了現場視察

出席委員　山尾委員長、伊東委員、北野委員、北原委員、千田委員、西形委員
（千田委員はリモート参加）　（計 6 名）

第 4 回　令和 4 年(2022 年)2 月 2 日（水）　桜の馬場城彩苑多目的交流施設

審議　・数寄屋丸二階御広間及び南大手門の被害調査について（報告）
・東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓下石垣の基礎診断結果等について
・平櫓下石垣復旧措置案
・宇土櫓続櫓下石垣復旧措置案
・平櫓石垣解体現場視察

出席委員　山尾委員長、伊東委員、北野委員、北原委員、千田委員、西形委員　（計 6 名）

3. 啓発事業

(1)刊行物

・パンフレット「解体新書その１　特別史跡熊本城跡の石垣調査成果　本丸地区の築城工程編」
「解体新書その２　特別史跡熊本城跡の石垣調査成果　古城地区の石垣編」
「解体新書その３　天守閣下石垣復旧に伴う調査成果　大天守石垣編」
「解体新書その４　天守閣下石垣復旧に伴う調査成果　小天守・大天守附櫓石垣編」
（令和３年４月）

・パンフレット「熊本城～復興に向けて～　令和３年春夏号」（令和３年４月）

・パンフレット「熊本城～復興に向けて～　令和３年度秋冬号」（令和３年10月）

・『熊本城調査研究センター年報７（令和２年度)』（令和３年11月）

・『復興熊本城 Vol.５　長塀編』熊本市／熊本日日新聞社（令和３年12月）

・『特別史跡熊本城跡総括報告書　調査研究編第４分冊』（令和４年３月）

(2)ホームページ公開

熊本城調査研究センターの事業成果などを情報発信するために、熊本市のホームページを活用し、当センターの概要、委員会の議事など、刊行物、講演会・研修会報告などを公開している。

更新・公開履歴

４月23日	「調査研究センター概要」の更新
４月27日	「出前講座（熊本城関連）申込書」の更新
４月28日	「研究センターニュース」の更新
４月30日	「入札・契約」の更新
５月10日	「刊行物」「熊本城で自由研究！」の更新
５月25日	「令和３年度（2021年度）第１回熊本城文化財修復検討委員会の開催について」の公開
６月14日	「令和２年度　熊本城文化財修復検討委員会議事録（要旨)」の更新
６月23日	「調査研究センター概要」の更新
７月21日	「令和３年度（2021年度）第１回特別史跡熊本城跡保存活用委員会の開催について」の公開
８月　２日	「令和３年度（2021年度）第２回熊本城文化財修復検討委員会の開催について」の公開
９月　２日	ホームページのリニューアルを実施
９月10日	「文化財修復検討委員会」の更新
９月29日	「研究センターニュース」の更新
10月13日	「令和３年度（2021年度）第３回熊本城文化財修復検討委員会の開催について」の公開
10月22日	「保存活用委員会」の更新
10月29日	「文化財修復検討委員会」の更新
11月29日	「研究センターニュース」の更新
11月23日	「令和３年度（2021年度）第２回特別史跡熊本城跡保存活用委員会の開催について」の公開
12月10日	「保存活用委員会」の更新
12月23日	「刊行物」の更新
12月28日	「文化財修復検討委員会」の更新

1月 6日　「出前講座（熊本城関連）申込書」の更新
1月 26日　「令和3年度（2021年度）第4回熊本城文化財修復検討委員会の開催について」の公開
2月 15日　「【会計年度任用職員募集】熊本城調査研究センター」の公開
2月 16日　「刊行物」の更新
2月 18日　「定期講座「熊本城学」」の更新
3月 2日　「【会計年度任用職員募集】熊本城調査研究センター」の更新
3月 25日　「令和3年度（2021年度）第3回特別史跡熊本城跡保存活用委員会の開催について」の公開

(3) SNS公開

熊本城調査研究センター事業成果などを情報発信するために、熊本城公式Facebook及び公式Instagramにおいて当センターが実施する講座の実施状況や調査成果などについて公開している。

投稿記事一覧

9月 29日　【2021年度熊本城復旧シンポジウム】
11月 4日　【熊本城調査研究センターニュース：重要文化財平櫓石垣の解体調査はじまる！！】
11月 9日　【天守閣1階企画展示「天守閣復旧の現場から」開催中！】
11月 12日　【2021年度熊本城復旧シンポジウム募集終了】
11月 25日　【熊本城調査研究センターニュース：重要文化財平櫓と石垣解体修理工事の概要】
1月 5日　【熊本城調査研究センターニュース:重要文化財平櫓石垣解体の現場から～石垣の解体～】
1月 18日　【熊本城調査研究センターニュース：重要文化財平櫓石垣解体の現場から～石垣解体に伴う調査～】
2月 3日　【熊本城調査研究センターニュース：崩落石材回収作業～竹の丸五階櫓跡周辺～】
2月 17日　【熊本城調査研究センターニュース：重要文化財平櫓石垣解体の現場から～平櫓石垣解体調査完了～】
2月 18日　【熊本城調査研究センターニュース:「石垣総点検」～熊本城石垣の価値を高めるために～】
3月 3日　【熊本城調査研究センターニュース：崩落石材回収作業～棒庵坂周辺～】
3月 8日　【熊本城調査研究センターニュース：熊本城学再開！】
3月 16日　【熊本城調査研究センターニュース：センターの重要な通常業務～工事立会調査～】
3月 25日　【熊本城調査研究センターニュース：新たに発見！？二様の石垣～櫨方三階櫓下石垣～】

(4)研究ノート・連載他

a.研究ノート

木下泰葉

・松本知子・木下泰葉・芦田光代・建石治弘・山田淳「平成28年熊本地震から5年　天守閣展示全面リニューアル」『展示学　第63号』（令和4年3月）

b.連載

『熊本城』熊本城顕彰会

山下宗親

・「熊本城“復旧”報告（十四）長塀の復旧　歴史編」復刊第122号（令和3年5月）
・「熊本城“復旧”報告（十五）長塀の復旧　調査編」復刊第125号（令和4年2月）

(5) 報道

本年度当センターが対応した報道機関の取材は合計 11 件、このうちテレビ 7 件、新聞（配信含む）11 件、報道公開 16 件（内規制区域内の公開 5 件）である。

a. 報道公開（16 件） ★は規制区域内での報道公開

4 月 6 日　天守閣内部報道公開
5 月 18 日　飯田丸五階櫓台下段（要人櫓台）の石垣積み直し
5 月 31 日　令和 3 年度（2021 年度）第 1 回文化財修復検討委員会
6 月 28 日　熊本城特別公開第 3 弾（天守閣内部公開）開始
7 月 16 日　★行幸坂安全対策工事
7 月 27 日　令和 3 年度（2021 年度）第 1 回特別史跡熊本城跡保存活用委員会
8 月 1 日　天守閣ライトアップリニューアル
8 月 6 日　令和 3 年度（2021 年度）第 2 回熊本城文化財修復検討委員会
8 月 30 日　★行幸坂サクラ（危険木）への対応
9 月 10 日　★監物櫓・平櫓台石垣復旧状況
10 月 18 日　令和 3 年度（2021 年度）第 3 回熊本城文化財修復検討委員会
11 月 17 日　備前堀の水抜き作業について
11 月 29 日　令和 3 年度（2021 年度）第 2 回特別史跡熊本城跡保存活用委員会
2 月 2 日　令和 3 年度（2021 年度）第 4 回熊本城文化財修復検討委員会
2 月 18 日　★監物櫓の部材繕い・戌亥櫓の修復状況
3 月 29 日　令和 3 年度（2021 年度）第 3 回特別史跡熊本城跡保存活用委員会

b. 新聞記事見出し（当センターで把握した記事のみ）

令和 3 年（2021 年）

4 月 3 日　「熊本城、イチゴ…おじさんもキュン♡　熊本市が観光動画」（熊本日日新聞）
4 月 3 日　「伝える　備える　熊本地震 5 年　熊本城下の町屋半減　熊本市新町・古町地区　行政､保存･活用へ本腰　借り手と貸し手　橋渡しに　改装のカフェ人気」（西日本新聞）
4 月 6 日　「熊本地震　玉名高付属中 2 年・石渕さん全国『金賞』　不屈の熊本城へ　感謝の詩　復旧に勇気『私たちも負けない』」（熊本日日新聞）
4 月 6 日　「熊本復興　熊本ジレンマ　まもなく地震 5 年　『感染対策　徹底しか』」（西日本新聞）
4 月 7 日　「熊本地震　天守閣の春　絶景かな　熊本城展示も刷新　26 日一般公開」（熊本日日新聞）
4 月 7 日　「伝える　備える　熊本地震 5 年　熊本城天守閣準備ＯＫ　常設展示一新　26 日から公開」（西日本新聞）
4 月 7 日　「熊本城天守閣を公開」（西日本新聞）
4 月 7 日　「熊本城天守閣見て　触れて　展示内容一新　26 日公開へ　映像や模型　1889 年地震からの歴史も」（朝日新聞）
4 月 7 日　「石垣復旧　信念積み重ね　熊本城工事担当者　『崩れる直前の位置へ』一つずつ」（読売新聞）
4 月 7 日　「天守閣復活　26 日から公開」（読売新聞）
4 月 7 日　「熊本地震 5 年　最新技術駆使した展示に　城下町の歴史伝え　スマホ画面に明治の町並み」（毎日新聞）
4 月 7 日　「熊本地震 5 年　熊本城天守閣 26 日公開　黒と白の雄姿　再び　38 年度完了　元事務所長『まだ通過点』」（毎日新聞）

4月 7日　「熊本城天守閣内部を報道公開　平成28年熊本地震」（熊本日日新聞）
4月 7日　「熊本地震　熊本城展示も刷新　26日一般公開　天守閣の春　絶景かな」（熊本日日新聞）
4月 7日　「ＮＴＴビル高さ海抜73メートルを承認　熊本市特例3棟目」（熊本日日新聞）
4月 8日　「熊本地震5年　首長に聞く　熊本市　大西一史市長　記憶、教訓　次代につなぐ」（熊本日日新聞）
4月 9日　「街かどクリップ　丸美屋が熊本城支援」（熊本日日新聞）
4月 10日　「箱庭で江戸時代再現　菊池市　住民有志が制作展示」（熊本日日新聞）
4月 10日　「熊日の本　熊本城天守閣常設展示図録」（熊本日日新聞）
4月 11日　「熊本地震5年　天守閣の雄姿　復興の励み　熊本市の料理店「城見櫓」　14日改装オープン」（熊本日日新聞）
4月 13日　「街かどクリップ　熊本城復元整備基金に寄付」（熊本日日新聞）
4月 14日　「九州アジアリーグKAL　16日は入場無料　熊本地震復興チャリティー　藤崎台で募金も」（熊本日日新聞）
4月 14日　「熊本地震　きょう5年　これからも心ひとつに　熊本日日新聞社社長　河村邦比児」（熊本日日新聞）
4月 14日　「熊本城復興物語　第3弾の特別公開がもうすぐスタート！」（朝日新聞）
4月 14日　「熊本地震5年　熊本城の修復　見守る写真家　天守や一本石垣…『10年後も記録』」（朝日新聞）
4月 14日　「熊本地震5年特集　復興見守る天守閣」（熊本日日新聞）
4月 14日　「熊本城復旧　難題の耐震対策　完了のメド16年後　被災5年天守は完成したけれど…文化財のため現代工法は例外的に」（読売新聞）
4月 15日　「熊本地震　よみがえれ　熊本城　地震から5年　職人達の闘い」（熊本日日新聞）
4月 15日　「アラカルト　ネッツトヨタ熊本が義援金」（熊本日日新聞）
4月 16日　「熊本地震　熊本城に優しい光　加藤神社」（熊本日日新聞）
4月 16日　「古地図で歩く　城下町くまもと㉓　新町（熊本市中央区）㊤　敵防ぐ道や門　清正の知恵」（熊本日日新聞）
4月 16日　「熊本城被災の歴史　紹介　蔦屋書店三年坂で特設企画」（熊本日日新聞）
4月 17日　「くまＴＯＭＯ　ニュースｄｅ知っ解く中学生　熊本城天守閣　復旧完了　来月26日から内部公開」（熊本日日新聞）
4月 19日　「クローズアップ　カルタ文化　発信30年　大牟田市・三池の資料館　1万点収蔵　熊本城や防災関連の札も」（熊本日日新聞）
4月 19日　「熊本地震　石垣の地震対策　指針に　文化庁　熊本城の知見活用」（熊本日日新聞）
4月 19日　「城の石垣、耐震指針策定へ」（毎日新聞）
4月 20日　「読者ひろば　楽しみに待つ、熊本城の公開」（熊本日日新聞）
4月 20日　「熊日イチ押し4～5月　天守閣復旧　県民の声も　熊本城　26日一般公開」（熊本日日新聞）
4月 20日　「街かどクリップ　熊本城災害復旧支援金に寄付」（熊本日日新聞）
4月 20日　「着物と思い出　包んで　熊本市の原田さん　熊本城や肥後六花あしらった『たとう紙』」（熊本日日新聞）
4月 21日　「熊本城の入場　県在住に制限」（朝日新聞）
4月 21日　「新型コロナ　熊本城天守閣内部公開　県内在住者に限定」（熊本日日新聞）

4月21日　「熊本城天守閣公開　当面は県民に限定」（西日本新聞）
4月21日　「熊本城天守閣復旧をPR　ゆかりの著名人ら祝福動画」（読売新聞）
4月22日　「街かどクリップ　熊本城災害復旧支援金に寄付」（熊本日日新聞）
4月22日　「全国初『真夏日』　気温ぐんぐん　菊池、山鹿　30度超」（熊本日日新聞）
4月22日　「明治の熊本城　庶民どっと　150年前　解体構想で公開　天守閣の眺め
感動の日記も」（読売新聞）
4月24日　「新型コロナ　熊本市長　医療非常事態宣言『来週にも』」（熊本日日新聞）
4月25日　「天守閣内部　展示物を紹介　『復興熊本城』別冊図録　あす発売」（熊本日日新聞）
4月25日　「熊本城復旧をパネルで紹介　上通アーケード」（熊本日日新聞）
4月25日　「県内在住限定あすから公開」（朝日新聞）
4月25日　「熊本地震5年　熊本城　現れた歴史　石垣に増築跡　清正時代の櫓台も」（朝日新聞）
4月26日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン　第三弾」
（其の四）　天復活　熊本城天守閣復活記念　蘇った熊本の誇り、復興にさらなる弾み
天守閣とともに歩んだ特別な5年間　新たな価値が付加された天守閣」（熊本日日新聞）
4月26日　「熊本市　2回目『医療非常事態』　熊本城天守閣の公開延期」（熊本日日新聞）
4月26日　「新生面」（熊本日日新聞）
4月26日　「感染増　熊本城の公開延期」（熊本日日新聞）
4月26日　「熊本城天守閣　内部公開延期」（西日本新聞）
4月27日　「天守閣『登りたかった』 県内コロナ拡大　公開延期　GW直前　城彩苑も『相当痛手』」
（熊本日日新聞）
4月27日　「熊本城天守閣　公開延期　県外から来訪『残念』　連休目前、土産物店ため息」
（西日本新聞）
4月28日　「熊本城イメージ　新作釉薬を披露」（熊本日日新聞）
4月29日　「私と熊本城　復旧途上の姿　追いたい　カメラマン小田崎智裕（47）＝熊本市」
（熊本日日新聞）
4月29日　「熊本地震5年　武者返し復元　現場退く　熊本城天守閣　工場所長・黒木さん
志願し定年延長　『最後の大仕事、誇り』」（読売新聞）
4月29日　「熊本城　復興のシンボル・天守閣が完全復旧」（西日本新聞）
4月30日　「ジオ・ドラマ　くまもとの大地を歩く5　熊本地震⑤　熊本城石垣復旧　清正が選んだ
輝石安山岩」（熊本日日新聞）
5月1日　「『佐賀の乱』熊本でも騒動　明治初期　新史料発見　熊本大永青文庫研究センター
松井家文書などに記述」（熊本日日新聞）
5月1日　「城彩苑　コロナに負けず営業中　天守閣復活を記念　限定メニューＰＲ」
（熊本日日新聞）
5月2日　「小中学生新聞くまＴＯＭＯ　おさらい！ニュース　4月16日～26日　400年前の江戸城
石垣？」（熊本日日新聞）
5月3日　「小天守復旧の歩み　商店主らパネルに　熊本　中心商店街で」（朝日新聞）
5月3日　「二天一流　熊本城と共に　18代目継承　松永哲典さん（熊本市中央区）　経営『武蔵
ビル』で道場　普及に力　きょう体験会」（朝日新聞）
5月4日　「私と熊本城　魅力発信へ後進を育成　タクシー乗務員　高城弘光さん（54）＝熊本市」
（熊本日日新聞）

5月 4日　「熊本城復旧　語り継ごう　双子の作家が児童書　職員らの奮闘　紹介」(熊本日日新聞)
5月 7日　「ジオ・ドラマ　くまもとの大地を歩く6　熊本地震⑥熊本城掘削　名城　土木技術の粋結集」(熊本日日新聞)
5月 9日　「私と熊本城　完全復旧した天守閣　見たい　元会社員　草野　喜行さん(70)＝宇城市」(熊本日日新聞)
5月 12日　「福岡で熊本城パネル展」(熊本日日新聞)
5月 14日　「ジオ・ドラマ　くまもとの大地を歩く7　熊本地震⑦熊本城の井戸　釣り糸垂らし深さ計測」(熊本日日新聞)
5月 18日　「私と熊本城　天守閣もう一度　案内が夢に　熊本大1年　岩下唯愛さん(18)＝熊本市」(熊本日日新聞)
5月 20日　「熊本城の復旧技術紹介　28日、オンラインセミナー」(熊本日日新聞)
5月 20日　「私と熊本城　出会いの場所　今度は家族で　調理師　川﨑美千子（32）＝宇城市」(熊本日日新聞)
5月 21日　「古地図で歩く　城下町くまもと㉔　新町（熊本市中央区）㊥　子どもら遊んだ町囲む堀」(熊本日日新聞)
5月 27日　「思い出を見つめ絆取り戻す家族　映画「お終活」香月監督らに聞く　再生の象徴熊本城や阿蘇登場」(熊本日日新聞)
5月 27日　「私と熊本城　友人と語り合った思い出の場所　パート　及川香穂理さん（43）＝東京」(熊本日日新聞)
5月 28日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン　第三弾(其の伍)　観光地としての熊本城を支える、縁の下の力持ち」(熊本日日新聞)
5月 28日　「熊本城本丸の飯田丸　石垣復旧工事始まる」(毎日新聞)
6月 1日　「宇土櫓石垣　新たな補強案　熊本城修復検討委に提示」(熊本日日新聞)
6月 9日　「『はばき石垣』で宇土櫓補強 熊本城　市、崩落防止へ設置方針」(読売新聞)
6月 26日　「熊本城天守閣　28日から内部公開」(熊本日日新聞)
6月 26日　「熊本城天守内部　28日から公開へ」(読売新聞)
6月 26日　「28日から熊本城　天守閣一般公開」(毎日新聞)
6月 26日　「熊本城天守閣28日から公開」(西日本新聞)
6月 26日　「熊本市『医療非常事態宣言』もあす解除　熊本城天守閣内部　28日から公開開始」(朝日新聞)
6月 27日　「岐阜の山城　熊本城支援 郡上八幡城『名城の力に』寄付続け」(毎日新聞)
6月 27日　「熊本城再建　寄付続け 『日本が誇る名城の力に』 岐阜県の郡上八幡城」(西日本新聞)
6月 28日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン　第三弾」(其の六)　朝の熊本城でパワーをもらう」(熊本日日新聞)
6月 28日　「熊本城天守閣　内部を公開」(熊本日日新聞)
6月 29日　「熊本城天守閣5年ぶり眺望　地震後初の内部公開」(西日本新聞)
6月 29日　「熊本城　5年ぶりの眺め」(読売新聞)
6月 29日　「この景色　再び会えた　熊本城天守閣、内部公開始まる」(朝日新聞)
6月 29日　「熊本城の内部5年ぶり公開」(毎日新聞)
6月 29日　「記者ノート　戻ってきた　私たちの日常　熊本城天守閣　内部公開」(熊本日日新聞)
6月 29日　「熊本城天守閣　内部を公開　5年2カ月ぶり　特別見学通路も再開」(熊本日日新聞)

6月29日　「帰ってきた　城下の眺め　『復旧過程　見ていきたい』　熊本城天守閣　内部公開」（熊本日日新聞）
6月30日　「ハイ！こちら編集局　熊本城天守閣　眺めに感動」（熊本日日新聞）
7月　1日　「ハイ！こちら編集局　天守閣見学　トイレは事前に」（熊本日日新聞）
7月　1日　「射程　そこに在るのはなぜか」（熊本日日新聞）
7月　1日　「私と熊本城　楽しかった祖父との思い出　会社員　栗山建基さん（27）＝熊本市」（熊本日日新聞）
7月　2日　「街かどクリップ　バナナで熊本城災害復旧支援」（熊本日日新聞）
7月　3日　「ボトルも勇壮　熊本城天然水　デザイン人気販路拡大」（熊本日日新聞）
7月　3日　「天守閣　黄色に　社会を明るくする運動　強調月間ライトアップ」（熊本日日新聞）
7月　5日　「熊本トヨタ自動車が熊本城災害復旧支援金」（熊本日日新聞）
7月　9日　「三角保之さん死去　80歳　元熊本市長、『一口城主』発案」（熊本日日新聞）
7月11日　「廃棄食材　菓子に変身　食品ロス研究の学園大付高生　きょうまで下通で販売」（熊本日日新聞）
7月11日　「私と熊本城　宇土櫓　早く元の雄姿に　復元基金に1億円寄付　浅野敦子さん（87）　熊本市」（熊本日日新聞）
7月15日　「熊本地震　いきなり団子　北海道快走　熊本出身の山口さん夫妻　移動販売　故郷思い　売り上げ寄付」（熊本日日新聞）
7月17日　「熊本地震　明治期の盛り土確認 熊本城『行幸坂』工事現場公開」（熊本日日新聞）
7月19日　「真夏の夜は熊本城へ 22日から　閉園時間　午後8時に」（熊本日日新聞）
7月21日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン第三弾(其の七)　5年2カ月ぶり　天守閣内に笑顔咲く」（熊本日日新聞）
7月21日　「熊本城の行幸坂　整備工事を公開　11月利用開始へ」（読売新聞）
7月24日　「竹灯籠　被災者笑顔に　加藤神社　300本　天守閣に映え」（熊本日日新聞）
7月25日　「熊本城の行幸坂公開　明治の造成土も確認　地震被災　安全対策工事」（朝日新聞）
7月28日　「熊本城の樹木管理計画策定巡り議論　保存活用委」（熊本日日新聞）
7月31日　「来月2日から熊本城公開中止」（読売新聞）
7月31日　「公共施設を原則閉館へ　県と熊本市　熊本城は来月2日から」（西日本新聞）
7月31日　「熊本城　来月2日から休園」（熊本日日新聞）
8月　1日　「熊本城特別公開あすから中止に」（朝日新聞）
8月　6日　「夜の天守　表情多彩　熊本城　ライトアップ一新」（熊本日日新聞）
8月　6日　「古地図で歩く　城下町くまもと㉖　城郭・城下模型（熊本城天守閣内）　武家住宅や　町屋細かく」（熊本日日新聞）
8月　7日　「熊本城の『奇跡の石垣』　現代工法で補強修復へ　文化的価値の維持と安全両立」（西日本新聞）
8月　8日　「私と熊本城　ペルーの子と再訪したい　元教員　宮田信一さん（74）＝合志市」（熊本日日新聞）
8月14日　「20メートルエノキ倒れる　熊本城竹の丸」（熊本日日新聞）
8月14日　「長引く大雨　家屋被害も　天草、山鹿で累計500ミリ超」（西日本新聞）
8月14日　「大雨　特別警報の可能性　宇土など20河川　氾濫危険水位超え」（読売新聞）
8月14日　「大雨　天草・山鹿500ミリ超　気象台『来週にかけ降り続く』」（朝日新聞）

8月20日　「わたしを語る　熊本初アジアの時空を歩く⑳　ハリマオから石光真清へ」（熊本日日新聞）

8月23日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン第三弾（其の八）天守閣に灯る城と人をつなぐ新しい“あかり”」（熊本日日新聞）

8月25日　「『一番搾り』天守閣復旧祝う　キリンビールが限定缶発売」（熊本日日新聞）

8月26日　「熊本市　コロナ対策に20億円　補正予算案　事業見直し財源捻出」（熊本日日新聞）

8月28日　「光る竹まり　坪井川　熊本市　緑化フェアへ実験」（熊本日日新聞）

8月29日　「追想　ーメモリアル　元熊本市長　三角　保之さん　7月8日死去　80歳　平成の城づくりを推進」（熊本日日新聞）

8月31日　「行幸坂の桜　撤去開始　熊本城　倒木恐れある12本」（朝日新聞）

8月31日　「熊本市　行幸坂の桜　12本撤去　樹齢50年以上、倒木の恐れ」（熊本日日新聞）

9月　1日　「行幸坂の桜　一部撤去 熊本市、倒木の危険性」（読売新聞）

9月　3日　「古地図で歩く　城下町くまもと㉗　白川旧流路めぐり」（熊本日日新聞）

9月　4日　「熊本城のサクラ　バッサリ伐採　12本　倒木の恐れで」（西日本新聞）

9月　5日　「城下町の建物　スマホ探訪　天守閣、早川倉庫・・・360度視点　ＶＲ動画」（熊本日日新聞）

9月　9日　「根腐れ原因はキノコ　熊本城の倒木　危険17本撤去へ」（西日本新聞）

9月　9日　「熊本城内の木　17本伐採へ　熊本市　腐朽で倒木の危険」（熊本日日新聞）

9月10日　「熊本城櫓の石垣　復旧着々」（熊本日日新聞）

9月11日　「熊本地震　石垣積み直し着々　熊本城　国重文・監物櫓と平櫓　明治以降の築造明らかに」（熊本日日新聞）

9月11日　「熊本城　復旧工事で判明　監物櫓の石垣　一部明治以降　内部層に『れんが』築造時期を裏付け」（朝日新聞）

9月11日　「『監物櫓』『平櫓』を公開　昭和初期の修復跡　熊本城の石垣復旧現場」（西日本新聞）

9月11日　「熊本城石垣修復を公開　地震被害　監物櫓と平櫓」（毎日新聞）

9月11日　「倒木　キノコが原因　敷地内の17本撤去開始」（朝日新聞）

9月12日　「熊本地震　カレンダー絵の入賞12作品決定　熊本城復興支援」（熊本日日新聞）

9月14日　「コロナ禍　くまもと点描　熊本城見てエクササイズ　サクラマチ屋上を開放」（熊本日日新聞）

9月15日　「熊本城内の倒木　原因は腐朽菌　着生の17本伐採へ」（読売新聞）

9月18日　「おしゃれな町屋　にぎわい生んで　新町・古町と川尻地区　モデル事業　内装リフォームにも補助　熊本市が募集」（熊本日日新聞）

9月22日　「熊本城彩る　オレンジ色　認知症の理解ＰＲ」（熊本日日新聞）

9月24日　「古地図で歩く　城下町くまもと㉘　迎町・本山　細川氏入国　白川左岸に町」（熊本日日新聞）

9月25日　「戦後の光と影　映して」（熊本日日新聞）

9月25日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン第三弾（其の九）協業で石垣復旧　文化財の価値守る」（熊本日日新聞）

9月29日　「医療非常事態　あす解除　熊本市　熊本城、来月から再公開」（熊本日日新聞）

9月30日　「加藤神社社務所建て替え議論　熊本市文化財保護委」（熊本日日新聞）

10月　1日　「行楽の秋　祈る観光地　　県内まん延防止解除　『にぎわい戻ってきて』」

（熊本日日新聞）

10月 2日　「天守閣　2カ月ぶり間近に　熊本城の特別公開　再開」（熊本日日新聞）

10月 5日　「S編　それ、調べます　倒れた熊本城の大エノキ　どうなった？　チップに加工　一部は木工に」（熊本日日新聞）

10月 9日　「とぴっく　熊本第一信金が熊本城復旧支援」（熊本日日新聞）

10月 10日　「とぴっく　マクドナルドが熊本城復旧に寄付」（熊本日日新聞）

10月 16日　「くまモンと長塀通りを清掃」（熊本日日新聞）

10月 19日　「熊本地震　熊本城　石垣15面　解体修理へ　修復検討委了承　国重文の櫓など」（熊本日日新聞）

10月 20日　「米国の南北戦争軍用品　出土　熊本城　西南戦争直後の土層から」（熊本日日新聞）

10月 22日　「熊本地震　『一本石垣』もうすぐ見納め　熊本城「戌亥櫓」　復旧向け解体へ」（熊本日日新聞）

10月 26日　「新生面」（熊本日日新聞）

10月 26日　「熊本城を歩く　インタビュー編1　　文化財修復　価値と安全両立　千田嘉博・奈良大学教授（城郭考古学）」（熊本日日新聞）

10月 29日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン第三弾（其の拾）　緑と街と共に生きる熊本城　視点場から見守る熊本城の美景　行幸坂の歩道復旧完了　資料に残る変遷も確認」（熊本日日新聞）

11月 2日　「デスク日記　郷土史に熱い関心」（熊本日日新聞）

11月 2日　「熊本城を歩く　インタビュー編2　修復経験　全国で生かして　西形達明・関西大名誉教授（土木工学）」（熊本日日新聞）

11月 2日　「熊本地震　行幸坂　歩道通行可に　熊本城」（熊本日日新聞）

11月 5日　「アラカルト　住友生命が球磨川復興支援金」（熊本日日新聞）

11月 9日　「熊本城を歩く　インタビュー編3　伝統技術に向き合い継承を　北垣聰一郎　金沢城調査研究所名誉所長」（熊本日日新聞）」

11月 11日　「とぴっく　熊本城再建支援で感謝」（熊本日日新聞）

11月 12日　「とぴっく　熊本城災害復旧支援で寄付」（熊本日日新聞）

11月 13日　「ほっとフォト　熊本城　つまようじ11万本で描く」（熊本日日新聞）

11月 16日　「文化財として石垣残す　熊本城復旧記念シンポ」（熊本日日新聞）

11月 16日　「熊本城を歩く　インタビュー編4　観光活用から保護に力点を　稲葉継陽　熊本大永青文庫研究センター長」（熊本日日新聞）

11月 17日　「熊本城石垣、紅葉ライトアップ　19日から夜間開園」（熊本日日新聞）

11月 18日　「熊本地震　石垣工事前　在来種を救出　熊本城・行幸坂沿い　堀の水　全部抜く　大作戦!!」（熊本日日新聞）

11月 19日　「取材前線　熊本城の価値　知ってほしい」（熊本日日新聞）

11月 20日　「赤胴色の月　天守上空に　県内でも部分月食」（熊本日日新聞）

11月 20日　「坪井川の舟運　聞いて　新町有志がご当地ソング」（熊本日日新聞）

11月 22日　「活写道　熊本城に平和の花」（熊本日日新聞）

11月 23日　「熊本城を歩く　インタビュー編5　日常で市民通える仕掛けを　西嶋公一　特別史跡　熊本城跡保存活用委員」（熊本日日新聞）

11月 30日　「城内の樹木　伐採を議論　　熊本城保存活用委」（熊本日日新聞）

12月 1日　「ハイ！こちら編集局　傘に道案内・・・親切に感謝」（熊本日日新聞）
12月 4日　「藤崎台のクスノキ　熊本城籠城戦の「物証」　西南戦争の銃弾発見」（熊本日日新聞）
12月 6日　「熊本城カレンダー絵　小中学生12人を表彰」（熊本日日新聞）
12月 7日　「熊本城を歩く　インタビュー編6　保護と活用　対立軸ではない　網田龍生　熊本城総合事務所長」（熊本日日新聞）
12月 8日　「ハイ！こちら編集局　熊本城見るなら電動車いす」（熊本日日新聞）
12月 11日　「ハイ！こちら編集局　熊本城の姿に感動　勇気をもらった」（熊本日日新聞）
12月 14日　「射程　「国宝・宇土櫓」への期待」（熊本日日新聞）
12月 21日　「熊本城を歩く　天守閣復旧記念シンポ　城郭修復　史実発見の好機　郡山城、高松城発掘調査で礎石や柱跡」（熊本日日新聞）
12月 24日　「熊日の本　復興熊本城Vol.5　長塀編　令和3年度上半期まで」（熊本日日新聞）
12月 26日　「廃藩置県　貴重な史料公開　熊本大、オンラインで」（熊本日日新聞）
12月 27日　「お城と生きる　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン第三弾」（其の拾弐）多くの人が寄り添い、応援し続ける熊本城」（熊本日日新聞）
12月 28日　「年末年始『第6波』懸念　初詣『分散協力を』　県内神社、感染対策徹底」（熊本日日新聞）
12月 28日　「熊本城を歩く　石垣修復　伝統技術生かして　文化財的価値　記録残して回収進める」（熊本日日新聞）
12月 31日　「回顧2021くまもと　熊本城・被災文化財　復興のシンボル　天守閣復旧」（熊本日日新聞）

令和4年（2022年）

1月 1日　「天下分け目の”清正”対決　096ｋ熊本歌劇団ｖｓ熊本城おもてなし武将隊　新春恒例肥後狂句大合戦」（熊本日日新聞）
1月 3日　「初日の出『平穏な1年に』　熊本城二の丸広場」（熊本日日新聞）
1月 4日　「熊本地震　長塀の復旧過程　たどる　『復興熊本城』第5巻刊行」（熊本日日新聞）
1月 7日　「400年前熊本城築城　迫力の構図　グラフィックデザイナー浜崎さん　想像交え　完成まで10年」（熊本日日新聞）
1月 19日　「View　石垣解体　文化財価値との葛藤　熊本で城の修理担当者らシンポ」（朝日新聞）
1月 20日　「二の丸で外科学会懇親会　4月計画　1500人規模、ステージ設営」（熊本日日新聞）
1月 20日　「熊本城復興へ　熊日が支援金」（熊本日日新聞）
1月 29日　「企画特集「甦る、国のたから～熊本城復活への軌跡～熊本城復興支援キャンペーン第四弾（其の壱）復興第二章　熊本が誇る宝　宇土櫓　本格復旧へ」（熊本日日新聞）
2月 2日　「古写真帖に明治の「洋学生」　「『熊府諸景色』の物語」　熊本城顕彰会理事富田紘一さん刊行（熊本日日新聞）
2月 3日　「熊本市　熊本城宇土櫓の石垣復旧　コンクリート工法の検討」（熊本日日新聞）
2月 16日　「熊本城の復旧　進ちょく説明　推進調整会議」（熊本日日新聞）
2月 18日　「熊本城前の将来像発表　地権者ら協議会　3エリア特徴生かす」（熊本日日新聞）
2月 18日　「西南戦争のリアルに近づく　田原坂など遺跡発掘調査で新著　熊本博物館学芸員中原幹彦さんに聞く」（熊本日日新聞）
2月 19日　「熊本地震　雄姿復活へ着々　監物櫓　戌亥櫓」（熊本日日新聞）
2月 25日　「企画特集「甦る、国のたから　～熊本城復活への軌跡～　熊本城復興支援キャンペーン

第四弾」（其の弐）　熊本城文化財修復検討委員会　価値や安全を考慮しながら『国のたから』復旧へ」（熊本日日新聞）

3月 2日　「ロシア、ウクライナ侵攻　熊本城　平和祈るウクライナ色」（熊本日日新聞）

3月 3日　「天空の熊本城　熊本市で雲海」（熊本日日新聞）

3月 5日　「活写道　平和願う二色の光」（熊本日日新聞）

3月 5日　「ニュースひとこま　熊本城　ウクライナ色」（熊本日日新聞）

3月 16日　「復旧の熊本城天守閣　耐震改修『優秀』日本建築防災協会の国交大臣賞」（熊本日日新聞）

3月 17日　「アラカルト　アサヒビール、地震復興へ寄付」（熊本日日新聞）

3月 20日　「新生面」（熊本日日新聞）

3月 20日　「全国の武将隊いざ終結じゃ　3年ぶり『戦国パーク』熊本城二の丸広場」（熊本日日新聞）

3月 21日　「桜開花、熊本城に映え　県内、平年より2日早く　開花宣言」（熊本日日新聞）

3月 21日　「段ボール城、できた　県立美術館でワークショップ」（熊本日日新聞）

3月 22日　「城彩苑11周年武将隊ら祝う　3年ぶり誕生祭」（熊本日日新聞）

3月 25日　「行幸坂の桜、歩いて眺めて　25日から夜間開放　熊本市」（熊本日日新聞）

3月 26日　「「海抜73メートル」特例承認　中央区の19階建てマンション」（熊本日日新聞）

3月 27日　「全国の祭り集結　盛り上がれ　60団体、力強く舞う」（熊本日日新聞）

3月 27日　「てんかん　正しく知って　熊本城　紫色にライトアップ」（熊本日日新聞）

3月 28日　「時事はなしの種　耐震改修　熊本城「優秀」」（熊本日日新聞）

3月 29日　「春爛漫　染まる〝桜坂〟　県内満開に」（熊本日日新聞）

3月 29日　「熊本城の復旧工事　課題や方針を確認　熊本市、文化庁など」（熊本日日新聞）

3月 30日　「NHK跡地発掘調査状況を報告　熊本城跡保存委」（熊本日日新聞）

3月 30日　「企画特集「甦る、国のたから　～熊本城復活への軌跡～熊本城復興支援キャンペーン第四弾（其の参）　もう一つの一本石垣　戌亥櫓、復旧へ」」（熊本日日新聞）

3月 30日　「アラカルト熊本城復旧へ寄付金」（熊本日日新聞）

3月 31日　「県内自治体　キャッシュレス拡大　コロナ禍影響衛生面で利点　来月、新たに5市導入」（熊本日日新聞）

(6)視察

本年度は、合計2件のべ29名に対応した。

(7)講演・講座・説明会

熊本城調査研究センター主催、または市民・団体などからの出前講座申込・講師派遣依頼に対応したもの。

a.定期講座「熊本城学」

新型コロナ感染拡大防止のため、本年度は回数・聴講者数を制限して実施した。

回	講師	講座名	場所	実施日	聴講者数
41	金田　一精	続・清正の土木	城彩苑多目的交流室	2月19日	21名

b.シンポジウム

熊本城の復旧過程で分かってきた歴史的事実について、他城郭と比較しながら普及・啓発するシンポジウムを開催した。

名称　2021年度 熊本城復旧シンポジウム「天守閣復活‼文献と石垣からわかった熊本城天守」

日時　令和3年（2021年）11月14日（日）12時50分～17時00分
内容　報　告①「文献からわかった熊本城天守」
　　木下泰葉　（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
　報　告②「石垣からわかった熊本城天守」
　　嘉村哲也　（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
　講　演①「石垣修理からわかった郡山城の天守台」
　　十文字健 氏（奈良県大和郡山市都市計画課文化財保存活用係主任）
　講　演②「石垣修理からわかった高松城の天守台」
　　大嶋和則 氏（香川県高松市文化財専門員）
　シンポジウム　司会　下高大輔　（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
参加人数　100名

c. 講演・講座

本年度は3件行い、のべ97名が参加した。

d. 出前講座

本年度は1件行い、のべ21名が参加した。

e. 説明会

本年度は2件行い、のべ29名が参加した。

(8) その他の啓発事業

熊本城調査研究センター主催、または団体などからの依頼に対応したもの。

本年度は合計5件を行った。

a. 展示・借出（遺物・パネル・データなど）

件数	展覧会名	期間	内容	主催	会場・(機関)
1	西南戦争と当時の医療との関わりを示す展示	2021年4月1日～2022年3月31日	本丸御殿出土品　計11点	熊本市田原坂西南戦争資料館	同館
2	熊本城特別公開第3弾記念企画「発見！熊本城」	2021年4月26日（月）～6月27日（日）	長塀発掘調査出土品　計12点	熊本城ミュージアム　わくわく座	同館
3	天守閣復旧記念「天守閣復旧の現場から」	2021年6月28日～10月28日（上半期） 10月29日～12月6日（下半期）	パネル、天守跡出土品等	熊本城調査研究センター	熊本城天守閣
4	校内展示	2021年11月15日（月）～11月26日（金）	パネル6枚	熊本市立総合ビジネス専門学校	同校
5	イオンモール熊本「まなびの」イベント	2022年1月15日～1月16日	パネル8枚	イオンモール熊本	同館

4. 寄贈資料

(1)資料

鈴木喬氏蔵書・資料	一式	寄贈者　鈴木　澄子氏（令和3年11月18日）
熊本城補足瓦購入原寸図（青焼き）	計13枚	寄贈者　嶋谷　和彦氏（令和4年1月25日）

(2)図書

青森県弘前市教育委員会

・『弘前市内遺跡発掘調査報告書25』2021

石川県金沢城調査研究所

・『金沢城史料叢書39　金沢城普請作事史料6　文化五年　御造営方一件留帳』2021

・『金沢城調査研究所年報　14（令和2年度)』2021

・『金沢城研究　第19号』2021

・『金沢城史料叢書40　金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書15　金沢城跡
－鼠多門・鼠多門橋Ⅱ－』2021

石川県七尾市教育委員会

・『史跡七尾城跡整備基本計画書（概要版)』2021

・『史跡七尾城跡整備基本計画書』2021

伊丹・古文書を読む会

・『遊心　特別号　肥後様御宿永代覚　熊本藩伏見御茶屋「肥後屋文書」』2021

愛媛県松野町教育委員会

・『松野町文化財調査報告第25集　予土境界地域における中世遺跡群の調査Ⅱ』2021

大分県中津市教育委員会

・『中津市文化財調査報告　第102集　中津城下町遺跡37次調査　大分県中津市殿町における児童館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2021

・『中津市文化財調査報告　第103集　中津城下町遺跡24次調査　集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2021

・『中津市文化財調査報告　第104集　市内遺跡試掘確認調査　中近世城館確認調査（8）　市内遺跡発掘調査概報14』2021

・『集合住宅建設に伴う発掘調査報告書　中津市文化財調査報告　第106集　沖代地区条里跡51次調査』2020

大阪城天守閣

・『徳川時代大坂城関係史料集　第二十一号　元禄期の大坂城関係記録　－大阪府立中之島図書館所蔵資料－』2021

・『大阪城天守閣紀要　第45号』2021

・『大阪城天守閣復興90周年記念　テーマ展　豊臣時代』2021

岡山県津山市産業文化部文化課

・『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第93集　史跡津山城跡　保存整備事業報告書Ⅶ』2021

沖縄県うるま市教育委員会

・『うるま市文化財調査報告書第32集　市内遺跡発掘調査報告書
－田場遺跡、上江洲ウフガー、藪地洞穴遺跡－』

・『うるま市文化財調査報告書第 34 集　勝連城跡　－西原御門付近発掘調査報告書Ⅰ－西原御門付近発掘調査報告書Ⅰ－』2020

・『うるま市文化財調査報告書第 35 集　市内遺跡発掘調査報告書　－平敷屋古島遺跡、アカジャンガー貝塚、藪地洞穴遺跡－』2020
・『うるま市文化財調査報告書第 37 集　抑留 469 日　南洋群島サイパン島　嶋峯一『抑留日記』』2021

神奈川県小田原市教育委員会

・『神奈川県指定重要文化財指定記念遺跡講演会「米を作ると社会が変わる？中里遺跡の"弥生的"生活の始まり」発表要旨・資料集』2021
・『令和 2 年　小田原市遺跡調査発表会　発表要旨　～最新出土品展展示遺跡解説～』2020
・『小田原市文化財調査報告書第 195 集　酒匂北中宿遺跡第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ地点』2021
・『小田原市文化財調査報告書第 196 集　平成 21 年度小田原市緊急発掘調査報告書 3　平成 21 年度試掘調査』2021
・『小田原市文化財調査報告書第 197 集　永塚長森遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』2021
・『小田原市文化財調査報告書第 198 集　千代南原遺跡　第ＸＸⅦ・ＸＸⅧ・ＸＸⅨ・ＸＸＸ・ＸＸＸⅠ・ＸＸⅫ地点』2021
・『小田原城総構　山王東第Ⅰ地点』2021
・『神奈川県小田原市　穴部東久保遺跡第Ⅰ地点』2021

株式会社　アートボックス

・『島充の城郭模型紀行』（株）大日本絵画 2021

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2015-16　平安宮内裏跡・聚楽第跡』2015
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2016-17　円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』2017
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2017-16　円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』2018
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2016-18　寺町旧域（妙満寺跡・本能寺跡)』2018
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-2　平安京右京九条二坊四・五町跡、唐橋遺跡』2020
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-6　富ノ森城跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-7　平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-8　平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-9　平安京右京三条二坊十四町跡・西ノ京遺跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-10　平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-11　室町殿跡・上京遺跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-12　白河街区跡・吉田上大路町遺跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-1　平安京左京四条一坊跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-2　史跡賀茂別雷神社境内』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-3　平安宮中和院跡・聚楽遺跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-4　日野谷寺町遺跡』2021
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-6　山科本願寺跡』2022

熊本県天草市教育委員会

・『天草市遺跡地図　第 1 分冊（本渡・五和・有明)』2021
・『天草市文化財調査報告第 10 集　天草市内遺跡発掘調査報告書　平成 25～28 年度』2021
・『天草市文化財調査報告書　第 11 集　国指定史跡　棚底城跡Ⅵ　令和元・2 年度調査（第 7 次発掘・石積悉皆調査)』2022

熊本県嘉島町教育委員会

・『嘉島町史跡整備関連報告書　第1集　井寺古墳　井寺古墳史跡範囲確認調査報告』2021

・『嘉島町文化財調査報告書　第7集　下六嘉遺跡群1901地点　個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』2021

熊本県教育委員会

・『熊本県文化財調査報告　第341集　曽畑貝塚出土植物質資料保存処理報告』2021

・『熊本県文化財調査報告　第342集　宮園Ａ遺跡1　－益城町中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』2021

・『熊本県文化財調査報告　第343集　宮園Ａ遺跡　－益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』2022

・『熊本県文化財調査報告　第344集　中小野貝塚　－一般道下郷北新田線社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』2022

・『熊本県文化財調査報告　第345集　玉名平野遺跡群1　－玉名立花線（河崎工区）活力創生基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』2022

熊本県玉名市教育委員会

・『玉名市文化財調査報告　第51集　玉名市内遺跡調査報告書14　－令和2年度の調査－』2022

熊本県和水町教育委員会

・『和水町文化財調査報告　第10集　菊池川治水関連遺跡群Ｄ　－令和2年度菊池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』2021

・『和水町文化財調査報告　第11集　神尾城跡』2021

熊本県山都町教育委員会

・『重要文化財　通潤橋　保存修理工事（災害復旧）報告書』公益財団法人文化財建造物保存技術協会　2020

熊本市教育委員会

・『熊本市の文化財　第96集　熊本市埋蔵文化財調査年報　第23号　－令和元年度－』2021

熊本市都市政策研究所

・『熊本都市計画史図集』2021

・『熊本都市政策vol.7　熊本市都市政策研究所　年報　2019-2020』2022

熊本大学埋蔵文化財調査センター

・『三万田東原遺跡の研究　－縄文時代後期後葉の石製装身具政策遺跡－』2021

・『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報26　－2019年度－』2021

・『熊本大学埋蔵文化財調査報告書第16集　熊本大学構内遺跡発掘調査報告16　(2013・2014年度：黒髪南地区1310調査地点2)』2021

熊本大学永青文庫研究センター

・『熊本大学永青文庫研究センター　年報　第12号』2021

・『永青文庫研究　第4号』2021

・『永青文庫叢書　細川家文書　意見書編』2022

熊本博物館

・『ひとのすがた、いのりのかたち　－肖像彫刻の世界－』2020

・『[熊本博物館企画展]熊本地震から5年　震災をふりかえる　大地とモノが語る熊本地震』2021

・『熊本博物館館報　No.33（2020年度報告)』2021

・『熊本博物館　美術工芸分野　史料整理目録1　熊本博物館収蔵　陶磁器史料目録』2022

公益財団法人　永青文庫

・『季刊永青文庫　No.113　2021』2021
・『季刊永青文庫　No.114　2021』2021
・『季刊永青文庫　No.115　2021』2021
・『季刊永青文庫　No.116　2022』2022

公益財団法人　元興寺文化財研究所

・『2020 年度秋季　もの・わざ・おもい　－復元模造の世界－』2020
・『[公益財団法人　荏原　畠山記念文化財団　助成金事業]　元興寺文化財研究所　研究報告 2020』2021
・『公益財団法人　元興寺文化財研究所要覧』2021

公益財団法人　千葉県教育振興財団

・『千葉県教育振興財団文化財センター年報　No.46－令和 2 年度－』2021
・『研究連絡誌　第 83 号』2020
・『研究連絡誌　第 84 号』2021

公益財団法人　愛媛県埋蔵文化財センター

・『愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要　紀要愛媛』2021
・『愛比売　2020（令和 2）年度年報　～発掘調査事業および普及活動事業の記録～』2021

滋賀県彦根市文化財課

・『彦根市埋蔵文化財調査報告書第 72 集　稲部遺跡第 14 次発掘調査報告書　－分譲住宅建設工事に伴う発掘調査－』2018
・『彦根市埋蔵文化財調査報告書第 78 集　藤丸遺跡第 5・6・7 次発掘調査報告書　－心身障害児者施設建設・宅地造成工事に伴う発掘調査－』2019
・『彦根市埋蔵文化財調査報告書第 79 集　丁田遺跡第 10 次発掘調査報告書　－集合住宅建設工事に伴う発掘調査－』2019
・『彦根市埋蔵文化財調査報告書第 81 集　道ノ下遺跡第 2 次発掘調査報告書　－宅地造成工事に伴う発掘調査－』2020

静岡県浜松市

・『史跡　二俣城跡及び鳥羽山城跡　保存活用計画』2020
・『浜松市文化財保存活用地域計画（本編）』2021
・『浜松市文化財保存活用地域計画（資料編）』2021

静岡県浜松市教育委員会

・『浜松城跡 12』2018
・『浜松城跡 13』2019
・『浜松城跡 35 次調査の概要』2021

静岡県埋蔵文化財センター

・『静岡県埋蔵文化財センター　研究紀要　第 8 号』2022

島根県浜田市教育委員会

・『令和 2 年度　浜田市内遺跡発掘調査報告書　浜田城下町遺跡（殿町 78 番地 2）』島根県埋蔵文化財調査センター　2021
・『一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4　森原下の原遺跡　1～3 区
1．古代～近世編』2022
・『国道 432 号菅原広瀬バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1　宮尾Ⅲ遺跡』20220

・『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 26　山城原古墳　－松江市東部における古墳の調査（4）－』2022

島根県松江市歴史まちづくり部　史料調査課松江城調査研究室

・『松江城ブックレット 4　出雲の城下町・陣屋町　－出雲領国内の城下町と陣屋町の形を探る－』2021

・『松江城関係資料集 4　武家屋敷の住宅地図と居住者の変換　－松江城下町絵図と「嘉永五年　御家中屋敷割帳写」を対照する－』2021

・『松江城研究 3』2021

社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院

・『済生会熊本病院 75 年誌』2011

鶴嶋俊彦

・『上天草市　姫戸町・龍ヶ岳町編 3　中世　戦国天草の領主一揆と城』熊本県上天草市　2021

東京大学史料編纂所

・『東京大学史料編纂所附属　画像史料解析センター通信　第 92 号』2021

・『東京大学史料編纂所附属　画像史料解析センター通信　第 93 号』2021

・『東京大学史料編纂所附属　画像史料解析センター通信　第 94 号』2021

徳島県鳴門市教育委員会

・『鳴門市教育委員会文化財調査報告書 11　尼塚古墳発掘調査報告書　－用水路改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』2021

富山県埋蔵文化財センター

・『とやまの古代生産遺跡等出土品』2021

・『令和 3 年度　特別展「珠・玉・球－私たちを魅了する　たま　とは－」』2021

長野県小諸市教育委員会

・『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 37 集　宮ノ反Ａ遺跡群　向原遺跡　－県単道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』佐久建設事務所・小諸市教育委員会　2019

・『小諸市古文書目録　第三集　－市町文書・芝生田村文書－』2019

・『小諸市古文書目録　第四集　－本町塩川家文書－』2020

・『小諸市古文書目録　第五集　－柏木村小山家文書（上）－』2021

長野県松本市教育委員会

・『松本市文化財調査報告 No.244　長野県松本市　史跡松本城　北裏門東側門台石垣－保存整備事業報告書－』2021

名古屋市観光文化交流局　名古屋城総合事務所　名古屋城調査研究センター

・『名古屋城調査研究センター　研究紀要　第 2 号』2021

・『特別史跡名古屋城跡　天守台周辺石垣発掘調査報告書』名古屋市観光文化交流局　名古屋城総合事務所保存整備室 2019

・『名古屋城調査研究報告 2　埋蔵文化財調査報告書 2　名古屋城二之丸地区試掘調査報告書　第 1 次・第 2 次調査』2021

奈良県大和郡山市

・『大和郡山市文化財調査年報　令和元年度』2021

奈良大学文学部文化財学科

・『文化財学報　第三十九集　植野浩三先生・小山田宏一先生退職記念論集』2021

新潟県新発田市教育委員会

・『新発田市埋蔵文化財調査報告　第 65　新発田城跡　発掘調査報告書Ⅻ　第 4・5・6 地点』2021

新潟県村上市教育委員会

・『史跡村上城跡保存活用計画』2021

福島県白河市教育委員会

・『白河市埋蔵文化財調査報告書　第78集　小峰城跡災害復旧事業報告書　2　本丸南面・清水門跡』2018

・『白河市埋蔵文化財調査報告書　第80集　小峰城跡災害復旧事業報告書　3　竹之丸南面』2019

姫路市立城郭研究室

・『城郭研究室年報　VOL.30 』2021

兵庫県相生市教育委員会

・『相生市文化財調査報告書　第20集　相生市那波野　丸山1号窯跡　発掘調査報告書』2021

兵庫県赤穂市教育委員会　文化財課　文化財係

・『赤穂市文化財調査報告書95　発掘された赤穂城下町6　－赤穂あけぼの幼稚園園舎建替に伴う文化財調査報告書2－」2021

福井県坂井市教育委員会　文化課

・『丸岡城学術調査資料集　第1集　－昭和15～17年修理工事関係資料－』2020

・『坂井市埋蔵文化財発掘調査報告書　丸岡城跡』2021

FUT福井城郭研究所

・『FUT福井城郭研究所年報・研究紀要　2020　NO.8』2021

福岡県福岡市教育委員会

・『中世博多の港　－博多遺跡群第221次調査出土の港湾関連遺構－』2021

放送大学熊本学習センター

・『放送大学熊本学習センター　30周年のあゆみ　開設30周年記念誌』2022

宮城県仙台市教育委員会

・『史跡仙台城跡整備基本計画』2021

山形県米沢市教育委員会

・『米沢市文化財年報　No.33』2021

・『米沢市埋蔵文化財調査報告書　第119集　桐ノ木遺跡　第2・3次発掘調査報告書』2021

・『米沢市埋蔵文化財調査報告書　第120集　遺跡詳細分布調査報告書　第34集』2021

若松城天守閣郷土博物館

・『若松城天守閣郷土博物館刀剣集　「会津ゆかりの刀」』2021

Ⅲ. 研究ノート

1. 櫓台増設方法の一例 ―熊本城飯田丸五階櫓台石垣解体調査成果から―

下高 大輔（熊本博物館）

はじめに

熊本城飯田丸五階櫓台は、慶長４年（1599）から加藤清正により築城が開始される「新城」を構成する櫓台の一つである。特別史跡熊本城跡の地区区分で言えば[註1]、本丸地区の南西に配された飯田丸（加藤期末年頃は「たけの丸」と呼称[註2]）の南西隅に位置する（図１）。

江戸時代を通して存在していた五階櫓そのものは、西南戦争直前に解体され櫓台だけの状態であったが、平成17年（2005）に櫓が復元され往時の姿となっていた[註3]。こうした状況で、平成28年（2016）熊本地震で大きく被災し[註4]、櫓台石垣は「奇跡の一本石垣」として全国的に報道された（図２）。

被災後は、櫓の応急措置から解体を経て、平成30年７月から令和元年（2019）５月までに、考古学的な調査を踏まえながら大きく変状毀損した箇所の解体工事を行い、令和４・５年度に積み直し工事が実施される。また、令和２年度には、五階櫓台の下部に存在する要人櫓台の変状毀損した箇所の解体工事・調査、および五階櫓台・要人櫓台の復旧（積み直し）に関する検討を行い、翌３年度上半期に要人櫓台の積み直しが完了している[註5]。

復旧に伴う考古学的な調査成果は、復旧対象である石垣の本質的価値に関する重要な情報であることから、熊本城文化財修復検討委員会に随時報告しつつ、市民一般向けにも広く情報公開に努めている[註6]。しかしながら、調査成果をまとめる最終的な報告書の公刊は、積み直し工事完了以降となるため今しばらくの時間を要する。また、今回の調査規模やその成果については類例が少ないこともあり、検出遺構の解釈についても未だ定まっていない一面もある。

そこで本稿では、膨大な調査成果の中から今後の考古学的な石垣遺構研究・城郭遺跡研究にとっては貴重な事例と考えられる飯田丸五階櫓台の構築方法に着目し、これまでに公開された資料を再構成しながら私見を提示し、城郭石垣研究における考古学的視点による議論の素材提供を試みたい。

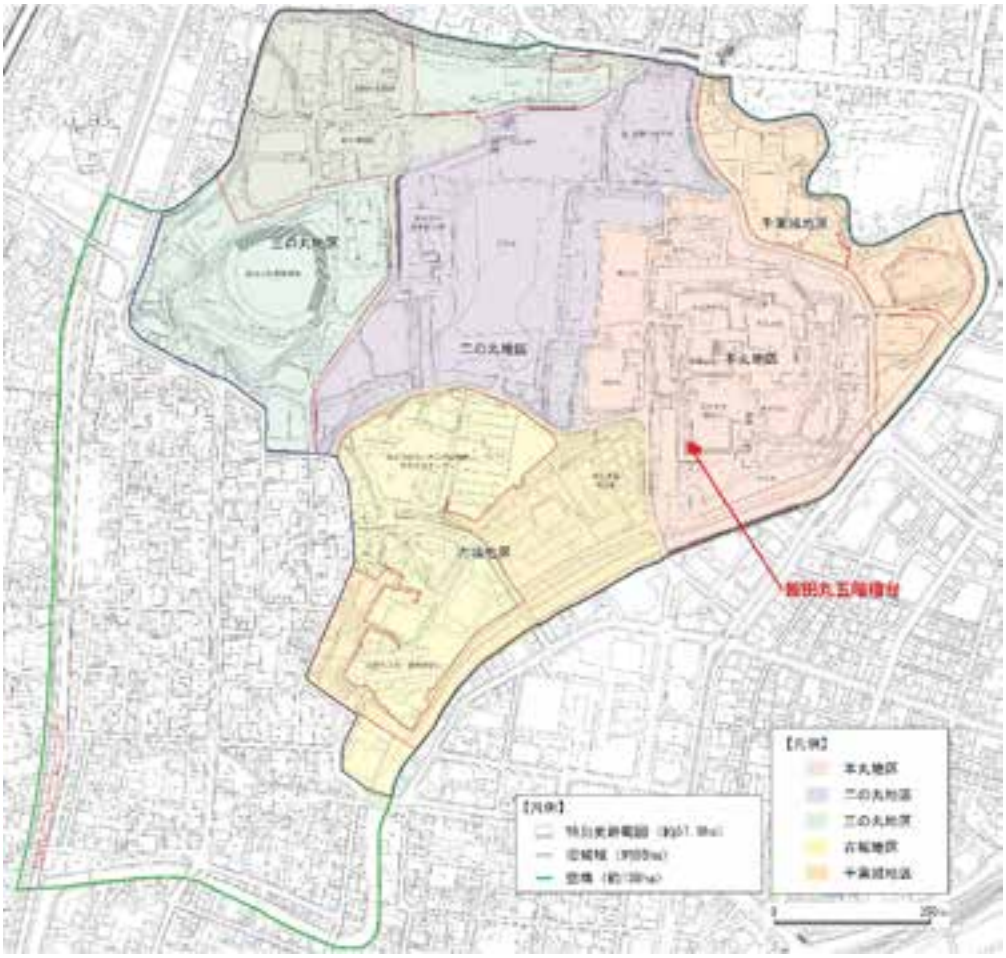


図１　熊本城飯田丸五階櫓台位置図（上が北）[註7]

図２　飯田丸五階櫓、南から（左：被災前、右被災直後）(註8)

１．調査成果の概要

（１）五階櫓台の石垣面からみた構築年代とその修理履歴

飯田丸五階櫓台は、東西南北面の合計４面の石垣に加えて飯田丸側（曲輪側）の数面の石垣で形成されている（図３）。櫓台下半分の当初石垣は、「築石部が築石数石分で目地が通り、サイズ不統一の方形石材が使用され、隅角部が算木積み、石垣面はある程度整形して方形を呈した築石石材で構成された割れ面主体」という特徴を有しているため、熊本城石垣４期（慶長 16 年～元和年間(1611～1624)）に相当する(註9)。その後、正徳５年（1715）に石垣の膨らみを解消するために櫓を取り除いて修理されていたことが文献資料調査成果で明らかとなり、その具体的な修理規模についても今回の震災復旧に伴う解体調査成果で明らかとなった(註 10)。解体調査の成果から江戸期の修理は一度のみであり、当該期の地震災害等で崩壊した事実はない。その後、櫓は西南戦争直前に撤去され櫓台のみの状態となり、明治 22 年（1889）の地震で南面（H268）を中心に崩壊して陸軍が当該箇所を修理している。そして、平成 17 年（2005）の櫓復元前に西面（H267）・北面（H266）を中心に修復している（図４）。

（２）五階櫓台と埋没櫓台の関係

五階櫓台石垣の解体に伴い、背面裏込め内より隅角部を伴う西面・南面の埋没石垣を検出している（図５）。西面石垣は先述の平成期修理の際に検出していた石垣(註 11)を再検出した形となる。南面石垣については今回初出の石垣であり、これにより五階櫓台が建造される前に旧櫓台が存在していたことがわかった。南面石垣は、西側隅角部から東に約 5.4mで天端高が変わることから、３間幅の隅櫓ないし北から続いてくる多聞櫓（「百間御櫓」(註12)）が配置されていたと考える。埋没石垣は「築石部が非目地・非方形で、隅角部が非算木積み（いわゆる重箱積み）、石垣面は平らな自然面と割れ面混在」という特徴を有しているため、熊本城石垣２期（慶長４～５年(1599～1600)頃）に相当する(註13)。五階櫓台と埋没櫓台は、五階櫓台が埋没櫓台を完全に覆う関係性で、櫓台の平面積や高さともに新櫓台である五階櫓台が旧櫓台を凌駕している状況を確認している。この旧櫓台は、五階櫓台の背面裏込めを構成する栗石によって完全に覆われており、五階櫓台の背面構造はいわゆる「総栗（そうぐり）」と言って差し支えない。

（３）五階櫓台の時期別背面裏込め

ただし、今回の解体調査で確認した五階櫓台石垣の背面構造はいわゆる「総栗」の一言では片付けられない。先述の時期別石垣面ごとに、背面裏込め状況が異なることが確認できた。明治期修理石垣は、築石大から拳大までの大小様々な栗石が用いられているのと同時に大量の土砂・瓦片等が投入されていた。江戸期修理石垣は、主に扁平な石材が投入されており、この中から 17 世紀末から 18 世紀初頭の陶器片等を確認しているがほとんど遺物は出土していない。五階櫓台当初石垣は後述するように、ある一定の高さで特殊な状況を確認しているが（図５左下）、基本的に石列を伴う栗石層であることを確認している（図６）。なお、先述の時期別石垣面とこれら背面裏込めの残存状況の高さ（平面検出時の高さ）は異なり、石垣面で見出した修理境よりも背面裏込めのほうが高い位置で検出され始めることを念のために申し添えておく。

図３　飯田丸五階櫓台構成石垣配置 (註 14)

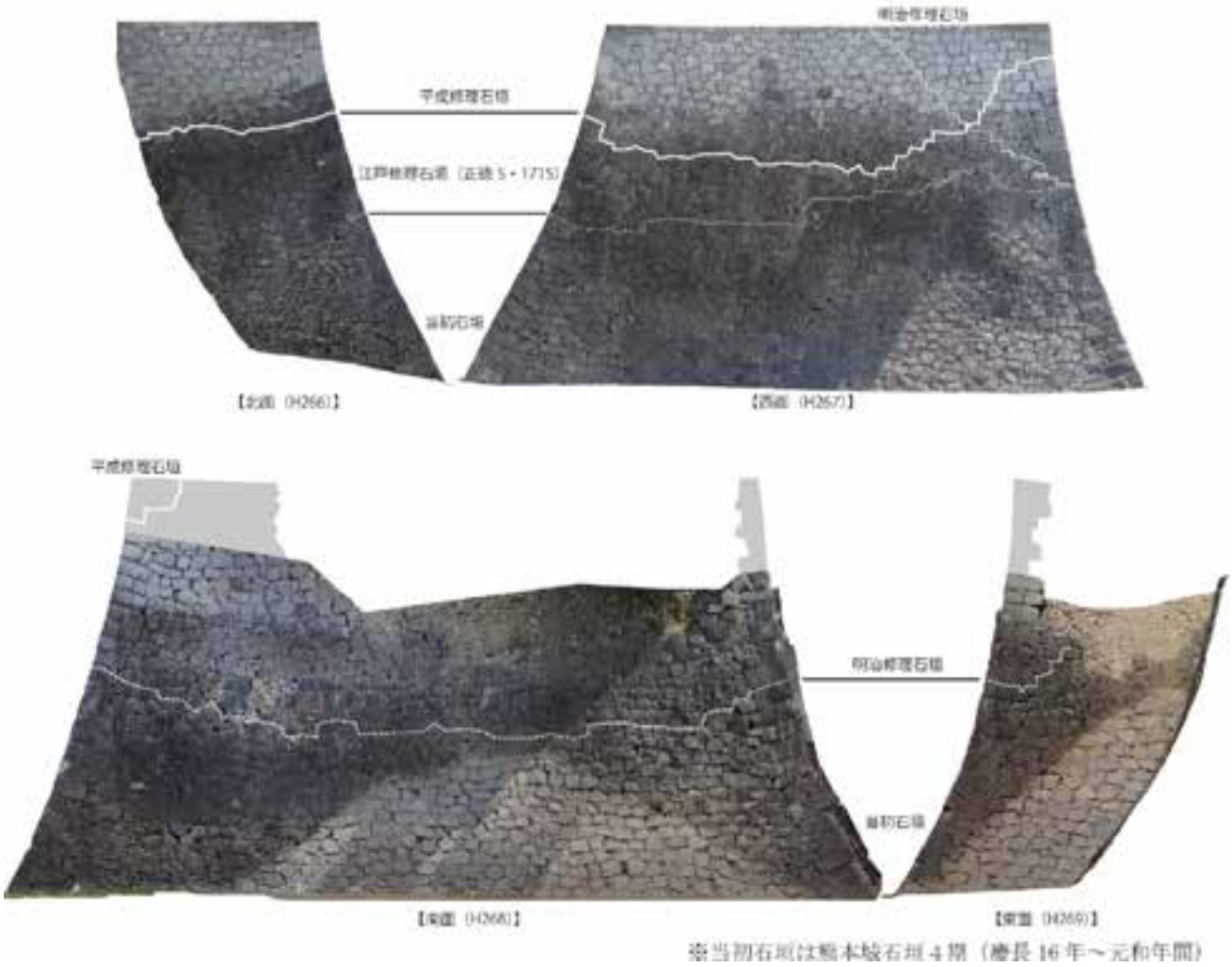


図４　飯田丸五階櫓台石垣修理履歴 (註 15)

図５　飯田丸五階櫓台内検出 埋没櫓台石垣関連 (註16)

（４）五階櫓台当初石垣の背面構造

五階櫓台当初石垣の背面構造は複数の石列を有していることが特徴であり、それらによって生じた区画を有する。以下に石列と石列間の区画の検出状況を詳述する（図６）。

石列　五階櫓台当初石垣の背面からは、石垣面に対して垂直方向に 25 ㎝大の石材が埋没櫓台石垣方向に配された石列を検出している。先述の通り、埋没櫓台石垣は五階櫓台に完全に埋め殺された状況を確認しているが、その埋没櫓台上においても石列と考えられる石材配置が見受けられた。ただし、当該部分については平面的な検出が行えなかったこともあり、解体時には「その可能性がある」としか言いようがなかった。石列と言ってもすべて同様ではなく、石材の面を一定方向に揃えたものもあれば、全く面が揃わないものも把握している。また、25 ㎝程度の石材が一直線上に配石されてはいるものの、石材同士で間隔があいていたものも確認している。しっかりと石列を形成しているものに限れば、石列を形成する各石材は乗り合い関係によって五階櫓台築石背面側から埋没櫓台石垣前面側に配石されたと言える。これらの石列は平面的に１列のみの場合もあれば複数列の場合もあり、複数列の場合は最大４列までがセットで存在することを把握している。一方、立面的には２段分を同一箇所で確認すると、その下部からは少しずれた位置関係で次の石列が検出される場合が多かった。また、１列のみあるいは複数列を一セットの石列と考えた場合、それらの間隔はすべて一定ではないことを確認している。

区画　石列間に生じた各区間は、それぞれに同じ種類の栗石が投入される傾向を把握している。例えば、円礫のみの区画や割石のみの区画、ある一定の大きさの栗石に揃えた区画などである。また、大きめの栗石が投入された区画が櫓台中央付近とその左右の等間隔で離れた区画に見られることや、築石に接する区画になると栗石が小振りになる傾向を見出すことができた。

（５）五階櫓台当初石垣の基礎と要人櫓台との関係

五階櫓台の基礎を確認するために、その四隅を中心に７つの調査区を設けて発掘調査を実施している（図７）。そのうち調査区２・６・７・８は櫓台の基底石（根石）と考えて差し支えない築石を確認している[(註17)]。五階櫓台北西隅に該当する調査区７においては熊本城石垣２期の石垣（図３左 H264）の一部を撤去した部分から五階櫓台の基底石を設置していることが確認できた。また、五階櫓台北面に該当する調査区８においては五階櫓台背面で検出したほぼ同規模の栗石上に基底石を設置している様子が窺えた。この栗石は五階櫓台の基底石に対しては、いわゆる根固め石の役割を担っていたものと推定でき、なおかつ、五階櫓台南側の調査区２・６においては五階櫓台下部に構築されていた要人櫓台の背面裏込めの可能性も指摘できる。要人櫓台の解体調査においても当初石垣背面と考えられる箇所で上部五階櫓台当初石垣の背面構造と同様に石列を確認していること（図８）[(註18)]、要人櫓台当初石垣の石垣面の特徴が熊本城石垣４期として差し支えないことから[(註19)]、要人櫓台と五階櫓台は同時期に構築されたものと考えられる。その際、五階櫓台基礎調査の土層堆積状況から（図７）、要人櫓台石垣の天端石設置を待たずに五階櫓台石垣の基底石（根石）が設置され、五階櫓台石垣がある程度積みあがった段階で、要人櫓台石垣の天端面及び櫓土台が設置される遺構面が形成されたものと考えられる[(註20)]。

２．飯田丸五階櫓台当初石垣の構築順と背面構造の解釈

まず、背面構造の構築順を整理しておきたい。①高さが約 50 ㎝程度の方形を呈した築石を石垣面ごとに一段分を築き、②築石に対して垂直方向に 25 ㎝程度の大きさの石材を築石側から埋没櫓台に向かって配石する。この石列はほとんどの場合が③二段分構築される。これにより、石列が築石一石の高さと同じ高さになり、④築石と石列で構成された区画を創出する。この区画内には⑤それぞれ同類の栗石を投入して築石一段分と石列二段分の高さより少し上の部分まで栗石を投入して櫓台全体でフラットになるようにする。これら①～⑤の工程を繰り返すことにより櫓台が構築されていた。ただし、旧櫓台石垣天端より下２ｍ程度まで五階櫓台が構築された高さで、数十センチの厚みで粘性の強い茶褐色土が水平に堆積している層を確認した（図５左下）。この層には瓦の破片が多く含まれ、現在整理調査中ではあるが熊本城跡内の出土瓦でも古い様相であることを確認してい

当初石垣 石列検出状況

築石 14 段目解体前状況、上が北

図６　飯田丸五階櫓台石垣 背面裏込め構造 (註21)

図７　飯田丸五階櫓台石垣基礎 (註22)

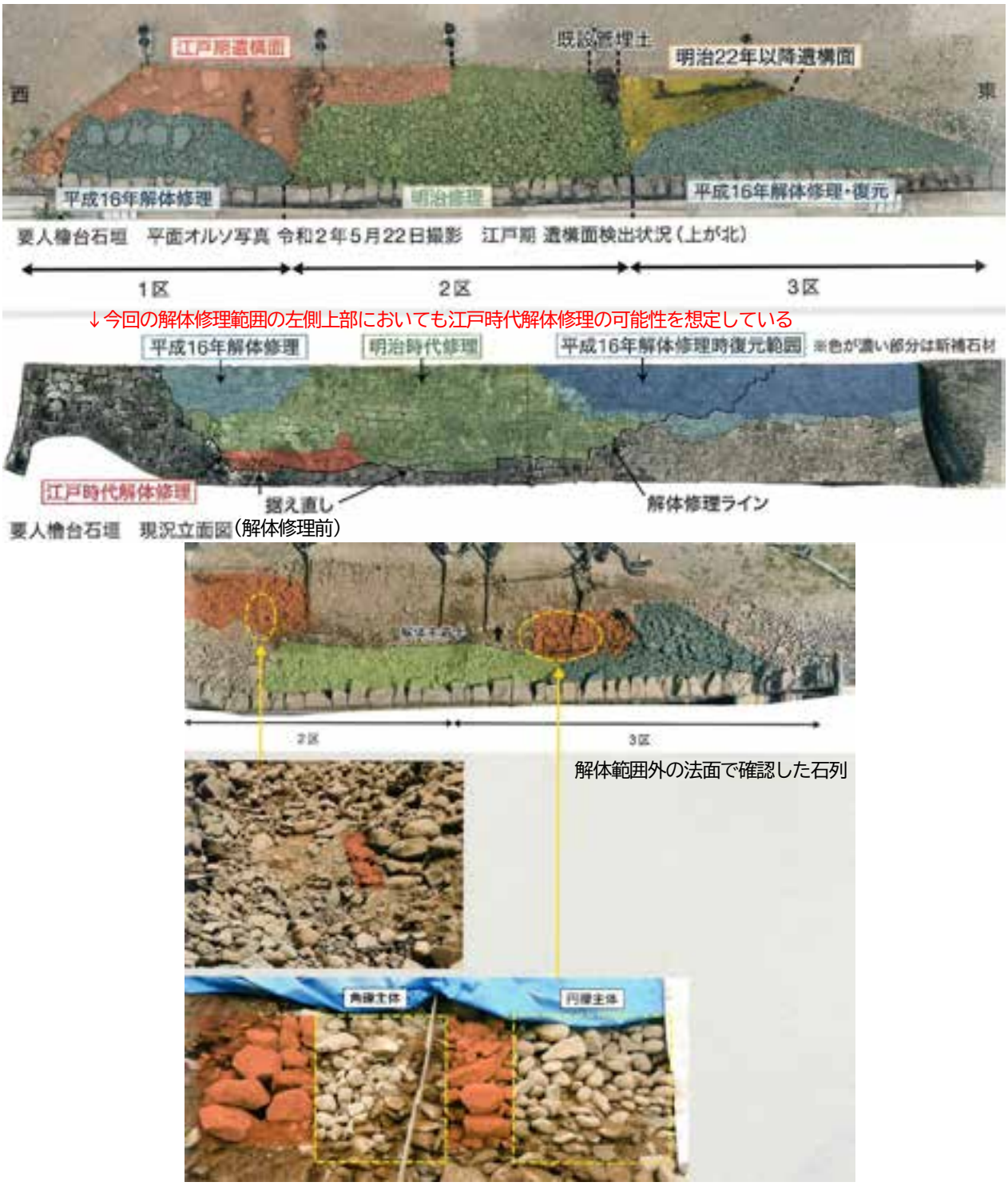


図８　飯田丸五階櫓台下部 要人櫓台石垣関連 (註23)

る。こうしたことから、これらの瓦は旧櫓に伴う可能性が高く、五階櫓台の構築は旧櫓を解体する前に建造が開始され、旧櫓台天端から下２ｍ付近の段階で、旧櫓の解体が行われたものと推察している。この一定の高さでの特殊な状況を経たのちに、上記①～⑤の工程が再度繰り返されて五階櫓台が完成したものと考える。

このような検出事例は少なく、今後の類例の増加と比較からのさらなる詳細な検討が必要と考える。また、現段階における一調査担当レベルでの背面構造の私見を以下に述べることとする。

まず、築石一石分の高さと一度に検出する石列二段分の高さは一致する。よって、これらは相互に関係し合いながら構築されていることは明らかである。その際、石列はすべてが一定間隔で構築されておらず、また、１列か複数列かなども定まらない。さらには石列として認定しにくいものまで存在していることなどを鑑みると、石

列のみで何らかの構造体を創出したり機能させたりする意図はないと考える。それでは何の意図で石列は構築されたのであろうか。この答えは、石列によって生じた各区画内の栗石種類が統一されている点が一つのヒントになるのではないかと考えている。いわゆる「総栗」で広大な平面積を有する櫓台を構築するには無作為に栗石を投入するよりもある程度の区画に分けた分業体制で栗石を投入する方が効率的な施工が可能であったのではないかと推察したい。つまり、栗石施工の作業単位であると考えている。

こうした背面構造は結果的に栗石が締め固めやすくなるという利点が生じているように思えるが、これを当時の人々が意図して施工したかどうかは文献資料なども踏まえて結論付ける必要がある。現段階で、こうした構造が例えば耐震対策などと解釈するのは行き過ぎた解釈であり、工学的に「そのような効果がある」と仮に言えたとしても、当時の人々がそれを意図して施工したかどうかは別問題と考える。またこのことは、同様の事例が検出されている福岡城・津山城・駿府城および熊本城小天守台石垣[註24]などがすべて慶長期築城・改修の城郭であるという共通点から、当該期の石垣背面の特徴であると断定することについても、解体石垣の背面構造の調査（報告）事例が少ないという現段階では早計であるとも考えている[註25]。

おわりに

今後、解体せざるを得なくなった石垣が生じた場合は、背面裏込めの調査が当たり前のように考古学的に実施され、得られた複数の情報から慎重な解釈が必要であると考える。背面裏込め構造の解明は、石垣構築工程解明にも繋がるため、特別史跡熊本城跡の石垣復旧に大いに関わることであり、重要な研究課題の一つである。

また、そこには歴史上の定説はさておき、石垣そのものの即物的観察・考古学的分析方法に基づいた時間軸の視点が必要なことは言うまでもない。

末尾ではありますが、飯田丸五階櫓台石垣復旧事業（要人櫓台石垣復旧も含む）の中でも特に調査は、浜松市（H30）・彦根市（H30・R1）・沖縄県（R1）福岡市（R2・3）からの文化財専門職の派遣職員の方々に多大なるご支援を賜り、充実した調査成果を得ることができました。本事業担当であった派遣職員の皆様をはじめ派遣いただいた自治体には記して感謝申し上げます。また、本事業の担当である熊本城総合事務所の土木技師をはじめ、関わっていただいている施工業者の方々による文化財の価値とその取扱いの難しさを理解いただいているが故の調査成果であることも敢えて記しておきたい。今後、報告書を刊行される予定であり、本報告内容と齟齬がある場合は報告書が本市における確定内容となることをご理解いただきたい。

註

1 熊本市「第４章第２節 保存管理の方法」『特別史跡熊本城跡保存活用計画』、2018 年。

2 「熊本屋鋪割下絵図」（熊本県立図書館蔵、熊本市 2019『特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史資料編』絵図・地図３）。

3 熊本市『特別史跡熊本城跡飯田丸一帯復元整備事業報告書』、2005 年。熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書１―飯田丸の調査―』（熊本城調査研究センター報告書第１集）、2014 年。

4 熊本城総合事務所・熊本城調査研究センター『特別史跡熊本城跡 平成 28 年熊本地震被害調査報告書』、2018 年。

5 熊本城総合事務所・熊本城調査研究センター『復興熊本城 vol.3・4・5』熊本市・熊本日日新聞社、2019・2020・2021 年。

6 前掲註５に同じ。熊本城修復検討委員会資料については委員会開催後に随時、熊本市 HP にて公開している。
https://www.city.kumamoto.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=5566&class_set_id=3&class_id=1982

7 前掲註１文献をもとに作成。

8 前掲註５の 2019 年文献より。

9 熊本市「第７章 付編　第１節 熊本城の石垣変遷」『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編（第２分冊）』、2020 年（下高文責部分）。これは飯田丸五階櫓台石垣の解体調査が研究・執筆のきっかけとなっている。城郭石垣を観察する上での考古学的観察視点と分析方法、加えて歴史時代の遺構としての城郭石垣を解釈する上で、いわゆる歴史考古学的研究手法による熊本城跡の石垣研究の必要性に迫られたからである。当該文献における城郭石垣の観察視点の一部は、それまでに

筆者が独自に研究・提示していたものであるため併せて参照されたい。下高大輔「豊臣城郭の石垣変遷－城郭石垣変遷が示す豊臣政権－」『織豊城郭』第 17 号 織豊期城郭研究会、2017 年。同「肥前名護屋城を中心とした「五畿内同前」考－九州への織豊城郭石垣導入に関する再検討－」『公益財団法人鍋島報效会研究助成研究報告書』第 10 号、2021 年など。

10 前掲註６に同じ。また、前掲註２文献、史料・解説の史料 170。

11 前掲註３に同じ。

12 「御城内御絵図」（明和６年（1769）頃、熊本市蔵）。前掲註２文献、絵図・地図・写真の絵図・地図 25。

13 前掲註９に同じ。

14 前掲註４、註５の 2019 年文献より作成。

15 前掲註６の委員会資料より作成。

16 前掲註５の 2020 年文献、註６の委員会資料などより作成。

17 前掲註５の 2020 年文献に同じ。

18 前掲註５の 2021 年文献に同じ。

19 前掲註９・18 に同じ。

20 ただし、要人櫓台石垣の天端面及び櫓土台が設置されていた遺構面の時期解釈は注意を要する。今回の要人櫓台天端面（五階櫓台基礎）における遺構確認調査において、要人櫓そのものの遺構面上からは加藤期に該当すると考えられる出土遺物は現状では確認できていない。なおかつ、江戸期遺構面形成土中からは原位置を保った礎石と考えて差し支えない石材も確認している。つまり、遺構面に伴う礎石とそれに先行する礎石が存在するのである。また、要人櫓台の石垣解体調査においても、当初石垣は石垣立面全体の中で下半部のみで確認しており、そのすぐ直上には江戸期の修理痕跡を見出すとともに石垣上半部は明治期と平成期の修理が施されている。これらのことから、現状における要人櫓台は当初石垣に伴う遺構面ではなく、五階櫓台基礎付近を除いたその大半が江戸期修理以降に形成された遺構面となる可能性が高い。

21 前掲註５の 2019 年文献より作成。

22 前掲註５の 2020 年文献より作成。

23 前掲註５の 2021 年文献より作成。

24 福岡城については、https://bunkazai.city.fukuoka.lg.jp/news/detail/19。津山城については、津山市『史跡津山城跡保存整備事業報告書Ⅶ』、2021 年。駿府城については調査中に筆者実見。熊本城小天守台石垣についても調査中に筆者実見とともに、熊本城調査研究センター『熊本城解体新書その４（天守閣下石垣復旧に伴う調査成果 小天守・大天守附櫓石垣 編)』(パンフレット)、2021 年。なお、本パンフレットには、今回の解体修理に伴う積み直しに際して、作業工程上自然発生的に構築された石列の写真も掲載されており興味深い。

25 ただし、前掲註 24 の各資料や実物を見る限り、石垣の修理履歴を現状で筆者が確認することができなかった福岡城の事例を除けば、構築当初石垣に石列が伴っている。津山城の事例においては、石垣解体直前に石垣天端面で検出した石列と解体完了後に検出された石列は様相が異なっており（註 24 津山市 2021 年文献)、後者の石列は構築当初石垣に伴うもので、その石垣面は熊本城石垣４期（慶長 16 年～元和年間(1611～1624)）の特徴と酷似する。熊本城小天守台石垣も同様に４期となる。また、駿府城については、石列が検出された箇所の石垣は慶長後半期で熊本城石垣３期（慶長 11～12 年（1606～1607)）相当となる。これに加えて直近の事例で、同様に当初石垣を３期とする熊本城平櫓台石垣でも石列が検出されている（https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=5&id=5566&sub_id=172&flid=289463)。これらのことから、現状では慶長期後半から元和年間相当の石垣背面を中心に検出されていることについても今後の調査においては注意を払うべきと考える。

【追記】本稿は筆者が熊本城調査研究センターに在籍していた令和３年度中に草稿して本書に投稿予定であったものを諸般の事情で投稿を取り下げていたが、同センターよりの依頼（令和４年（2022）８月 12 日付け城調発第 000076 号）に基づき本書へ寄稿したものである。

78	(万延二年正月以降)	1861	本御式　御謡初之控	宇野	―	仮綴	13.5×20.0	19丁		
79	天保二年卯十月	1831	上悪中好下用 (馬術相伝書)	住谷常之進正因(印)(花押)	関唯吉殿	巻子	18.8×286.2	―		継目糊離れ
80	文政十丁亥四月吉日	1827	扱心流初段表目録	入江熊次郎藤原貞勝(印)(花押)	関只吉殿	巻子	18.0×298.1	―		継目糊離れ
81	天保二年卯十月	1831	中目録 (大坪流馬術相伝書)	住谷常之進正因(印)(花押)	関唯吉殿	巻子	18.7×292.5	―		継目糊離れ
82	嘉永元年七月吉日	1848	佐々木流炮術目録	志賀何右衛門親英(印)(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	18.5×195.5	―		継目糊離れ
83	文化三丙寅年三月吉辰	1806	扱心流初段表目録之巻	江口吉太夫鎮俊(印)(花押)	木下熊門殿	巻子	18.3×385.2	―		継目糊離れ
84	文化四年丁卯十月吉日	1807	御当流伝法仕付方目録	安田多峯敬光(印)(花押)	木下熊門殿	巻子	16.7×268.0	―		継目糊離れ
85	嘉永三年十一月吉日	1850	佐々木流砲術極意目録	志賀何右衛門親英(印)(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	18.8×280.0	―		継目糊離れ
86	嘉永二己酉年六月吉日	1849	解龍流用方目録	河本真津兵衛常政(印)(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	19.0×167.5	―		継目糊離れ
87	嘉永二己酉年六月吉日	1849	解龍流馬方目録	河本真津兵衛常政(印)(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	19.0×223.5	―		継目糊離れ
88	嘉永二己酉年六月吉日	1849	解龍流馬方目録	河本真津兵衛常政(印)(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	18.5×110.0	―		継目糊離れ
89	嘉永五壬子八月吉日	1852	十文字鎌目録	門司源兵衛直英(印)(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	18.3×320.3	―		継目糊離れ
90	嘉永二己酉歳九月吉日	1849	当流居合目録	小堀平右衛門闊有(印)(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	18.5×190.0	―		
91	嘉永四年九月	1851	寺見流兵法之書目録	中島源之允勝定(花押)	元田繁兵衛殿	巻子	18.3×316.0	―		継目糊離れ
92	慶応元乙丑九月吉日	1865	当流居合目録	安田市助源貞方(印)(花押)	関素兵衛殿	巻子	18.7×126.0	―		継目糊離れ
93	文政十一年二月吉日	1828	新陰流外物謀略之巻	吉田五郎左衛門近(印)(花押)	関只吉殿	巻子	18.0×447.5	―		継目糊離れ
94	天保九年戊三月	1838	上悪中好下用 (馬術相伝書)	住谷常之進正因(印)(花押)	関十九郎殿	巻子	18.2×182.0	―		
95	嘉永四辛亥年五月吉祥	1851	極秘五之規矩［　　］	平野清右衛門	元田繁兵衛殿	巻子	19.3×115.0	―		継目糊離れ
96	天保九年戊三月	1838	中目録 (大坪流馬術相伝書)	住谷常之進正因(印)(花押)	関十九郎殿	巻子	18.1×179.0	―		継目糊離れ
97-1	(江戸時代)		藤孝公御短冊	―	―	掛軸装	143.5×24.2 (本紙35.5×5.3)	―	97-1～4木箱入り　木箱墨書「幽斎様御短冊」	
97-2	(江戸時代)		極札	―	―	極札	1.3×14.2	―	包紙あり　「細川玄旨法印類名　極」(包紙上書)	
97-3	(江戸時代)		細川藤孝公御歌 (和歌の写)	―	―	切紙	7.3×39.0	―	包紙あり「細川藤孝公御歌関氏」(包紙上書)	
97-4	文化元子年八月十一日	1804	〔覚〕 (藩主より藤孝公の掛軸拝領)	関素兵衛道廣	―	切紙	15.5×25.6	―		
98-1	(明治時代以降)		〔清浦奎吾書幅〕	(清浦奎吾)	―	掛軸装	212.0×43.4 (本紙130.7×30.4)	―	箱あり「清浦圭吾先生之御書」	
98-2	大正十二年一月三十日	1923	〔勲七等瑞寶章勲記〕	賞勲局総裁正二位勲一等伯爵正親町實正(印)	関繁	賞状	45.4×58.6	―		
99	寛文七年八月十五日	1667	〔細川綱利知行宛行状〕	綱利(花押)	関山三郎とのへ	竪紙	42.7×58.0	―	包紙あり 菊池・合志両郡のうち150石	

70－1	文化九年九月十八日	1812	目録	服部武右衛門(印)(花押) 小山門喜(印)(花押) 大河原次郎九郎(印)(花押) 宮本傳右衛門(印)(花押) 町孫平太(印)(花押)	関素兵衛殿	続紙	36.0× 155.5	—	知行目録 包紙あり「関素兵衛殿　御奉行中」(包紙上書)	
70－2	文化二年二月朔日	1805	関素兵衛御加増知行所附目録	宮本傳右衛門(印)(花押) 奥田権之允(印)(花押) 白石清兵衛(印)(花押) 町孫平太(印)(花押) 嶋田嘉津次(印)(花押)	山鹿　河井藤兵衛殿(印) 　　中村庄右衛門殿(印) 合志当番　伊藤権七殿(印)	続紙	35.8× 166.7	—	知行目録 包紙あり「関素兵衛殿　御奉行中」(包紙上書)	
70－3	(天明二年ヵ) 寅八月廿八日	1782	差紙	小坂九郎助(印)(花押) 町孫平太(印)(花押) 藪市太郎(印)(花押) 石寺甚助(印)(花押) 吉海市之允(印)(花押)	菊池　柳井瀬太郎殿(印) 合志　水野傳左衛門殿(印)	切継紙	18.4× 105.5	—	包紙あり　「御知行引渡差紙」(包紙上書)	
70－4	(享保十一年ヵ) 午六月四日	1726	差紙	野口又之允(印)(花押) 元田尉大夫(印)(花押) 金森兵左衛門(印)(花押) 井上新之允(印)(花押) 佐分利十右衛門(印)(花押)	菊池　金津十次郎殿(印) 合志　曽根安右衛門殿(印)	切継紙	18.5× 101.5	—	包紙あり　「関右太郎殿　奉行所」(包紙上書)	
70－5	(明治四年)六月七日	1871	〔達〕 (関洞雪の隠居願と素の家督相続の許可を達す)	藩庁	関洞雪　同素	切継紙	20.7× 61.7	—		
70－6	(延享三年ヵ) 寅正月十六日	1746	差紙	大槻次郎兵衛(印)(花押) 真下源太兵衛(印)(花押) 出在ニ付無判　陣又兵衛 上村理右衛門(印)(花押)	菊池　井関岡右衛門殿(印) 合志　蟒江長兵衛殿(印)	切継紙	17.9× 91.0	—	包紙あり　「関十九郎殿　奉行所」(包紙上書)	
70－7	(嘉永六年ヵ) 丑八月三日	1853	差紙	高本敬太郎(印)(花押) 小山門喜(印)(花押) 真野源之助(印)(花押) 佐田吉左衛門(印)(花押)	山鹿　横田善左衛門殿(印) 菊池合志　蒲池太郎八殿(印)	切継紙	17.6× 125.0	—	包紙あり　「御知行引渡差紙」(包紙上書)	
70－8	(文化五年ヵ) 辰十二月五日	1808	差紙	渡邊善右衛門(印)(花押) 高本傳右衛門(印)(花押) 奥田権之允(印)(花押) 白石清兵衛(印)(花押) 町孫平太(印)(花押) 下津久馬(印)(花押)	山鹿　河井藤兵衛殿(印) 菊池　吉村嘉善太殿(印) 合志　佐藤勝之助殿(印)	切継紙	18.0× 159.4	—	包紙あり　「御知行引渡差紙」(包紙上書)	
70－9	(寛文～延宝期) 巳ノ八月十一日		差紙	鎌田杢之介(花押)(印) 奥村次郎右衛門(花押)(印) 相煩無判　瀬戸五兵衛	菊池　熊谷三郎右衛門殿(花押)(印) 合志　魚住新右衛門殿(花押)(印) 　　吉村勘左衛門殿(花押)(印) 　　藤間孫兵衛殿(花押)(印)	切継紙	18.4× 74.7	—	包紙あり　「関山三郎殿　勤方」(包紙上書)	
71	文久元年四月吉日	1861	佐々木流炮術矢込巻	志賀何右衛門親英(印)(花押)	関只吉殿	竪紙	29.8× 34.0	—	包紙あり　「佐々木流炮術矢込巻」(包紙上書)	
72	弘化二年六月吉日	1845	佐々木流炮術矢込巻	志賀何右衛門親英(印)(花押)	元田繁兵衛殿	竪紙	30.7× 44.1	—	包紙あり　「佐々木流炮術矢込巻」(包紙上書)	
73	慶応四年辰八月	1868	水学口伝	小堀清左衛門(印)	関素兵衛殿	切紙	15.8× 45.7	—		
74	慶応四戊辰年八月	1868	〔武芸目録〕 (游術相伝書)	小堀清左衛門闊芳(印)(花押)	関素兵衛殿	切紙	15.8× 45.5	—		
75	嘉永二年酉五月吉祥	1849	楠流兵法切紙之傳	平野清右衛門勝政(印)(花押)	元田繁兵衛殿	切継紙	19.5× 111.5	—		継目糊離れ
76	文久三年十二月	1863	関素兵衛殿江申達候事 (解龍流馬術の目録進達)	久保又作清則(花押)	(関素兵衛)	折紙	39.5× 54.0	—		
77	嘉永ニ己酉年閏四月吉日	1849	元田繁兵衛殿へ申達事 (解龍流馬術の目録進達)	河本真津兵衛常政(印)(花押)	(元田繁兵衛)	折紙	35.8× 50.7	—	包紙あり「元田繁兵衛殿へ」(包紙上書)	

55-7-1	(安政五年以降)	1858 以降	〔覚〕 (安政5年正月登城、奉行所・時習館ほか藤崎宮・六所宮への参詣について)	—	—	切継紙	15.2× 11.1	—	端裏書「年頭手扣ニ出入筈御国」	
55-7-2	(江戸時代後期)		〔覚〕 (中桂之御間御出座の際、供の面々の通行について)	—	—	切継紙	15.1× 22.0	—	端裏書「御国」	
55-8	(江戸時代後期)		〔覚〕 (正月儀礼についての覚)			切継紙	15.0× 26.0		端裏書「年頭手控ニ出入筈御国」	
55-9	(文久元年)	1861	〔覚〕 (御供二番箱に入れる衣服の覚)	—	—	切紙	14.8× 23.0	—	「文久元七月泰勝寺御参拝之節御召別段包」(端裏書)	
56	明治十七年六月廿五日	1884	仮学証 (三等仮試験の合格証)	熊本縣皇典講究分所(印)	関　洞雪	切紙	20.5× 28.7	—		
57	寛永拾五年七月十九日	1638	〔細川忠利知行宛行状〕	忠利(花押)	関三十郎とのへ	竪紙	36.5× 51.2	—	包紙あり 菊池郡赤星村・合志郡久米村・井原村50石	
58	寛永拾五年七月十九日	1638	〔細川忠利知行宛行状〕	忠利(花押)	関右太郎とのへ	竪紙	36.5× 51.2	—	包紙あり 菊池郡赤星村・合志郡久米村・林原村都合150石	
59	寛永拾八年八月朔日	1641	〔細川光貞知行宛行状〕	光貞(花押)	関三四郎とのへ	竪紙	37.2× 51.6	—	包紙あり 菊池郡赤星村・合志郡久米村・井原村50石	
60	寛永拾八年八月朔日	1641	〔細川光貞知行宛行状〕	光貞(花押)	関右太郎とのへ	竪紙	36.0× 50.2	—	包紙あり　「右太郎を改源兵衛ニ被成申候」(包紙貼紙) 菊池郡赤星村・合志郡久米村・林原村都合150石	
61	寛文元年八月五日	1661	〔細川綱利知行宛行状〕	綱利(花押)	関権左衛門とのへ	竪紙	41.7× 57.0	—	包紙あり 菊池・合志両郡のうち50石	
62	享保十九年十一月朔日	1734	〔細川宗孝知行宛行状〕	宗孝(花押)	関九左衛門とのへ	竪紙	43.1× 57.7	—	包紙あり 菊池・合志両郡のうち150石	
63	正徳六年二月十八日	1716	〔細川宣紀知行宛行状〕	宣紀(花押)	関九左衛門とのへ	竪紙	42.7× 57.4	—	包紙あり 菊池・合志両郡のうち150石	
64	寛延元年九月朔日	1748	〔細川重賢知行宛行状〕	重賢(花押)	関十九郎とのへ	竪紙	42.7× 57.5	—	包紙あり 菊池・合志両郡のうち150石	
65	天明六年九月朔日	1786	〔細川治年知行宛行状〕	治年(花押)	関只吉とのへ	竪紙	42.2× 57.5	—	包紙あり 菊池・合志両郡のうち150石	
66	天明八年九月十八日	1788	〔細川斉茲知行宛行状〕	斉茲(花押)	関素兵衛とのへ	竪紙	42.7× 57.5	—	包紙あり 菊池・合志両郡のうち150石	
67	文化九年九月十八日	1812	〔細川斉樹知行宛行状〕	斉樹(花押)	関素兵衛とのへ	竪紙	42.2× 57.2	—	包紙あり 菊池・合志両郡のうち150石に加え、養父素兵衛へ加増した山鹿・合志両郡の100石	
68	文政九年九月十八日	1812	〔細川斉護知行宛行状〕	斉護(花押)	関素兵衛とのへ	竪紙	43.2× 58.1	—	包紙あり 菊池・合志・山鹿郡のうち250石	
69	万延二年三月朔日	1861	〔細川慶順知行宛行状〕	慶順(花押)	関繁兵衛とのへ	竪紙	43.6× 58.0	—	包紙2枚あり　「御書出　関繁兵衛」(包紙上書) 菊池・合志・山鹿郡のうち250石	

41	(文久二年)	1862	三田八幡仮殿之図	関扣	―	竪紙	31.0× 43.8	―	「文久二年正月七日御参拝之節図也」	
42	(江戸時代)		泰勝寺	―	―	竪紙	31.0× 44.5	―	敷地見取り図か	
43	(文久二年)	1862	妙解寺奥座敷ニ而召上リ之略図 (文久二年八月十七日参詣時の藩主・給仕配置図)	宇野	―	竪紙	26.8× 39.0	―		
44 - 1	(江戸時代後期)		於鹿之御間玄猪御餅頂戴之図	関扣	―	竪紙	28.0× 40.5	―	包紙「鹿之御間九曜中桂之両御間　玄猪御餅頂戴之図　弐枚　関扣」 端裏書「鹿之御間玄猪御餅頂戴之図　関扣」	
44 - 2	(江戸時代後期)		玄猪九曜之御間・中桂之御間御餅頂戴之図	―	―	竪紙	28.2× 40.3	―	端裏書「九曜之御間中桂之御間玄猪御餅頂戴之図」	
45	(江戸時代後期)		年頭板床御間之図	関	―	竪紙	27.0× 39.3	―	端裏書「年頭板床御間之図 関」	
46	(天保十三年以降)	1842 以降	御城鐘之段之図	宇野	―	竪紙	27.0× 39.2	―	「根役茂見図を写置　宇野」	
47	(江戸時代後期) 九月廿五日		御花畑御門御警固之扣	御奉行中	松村十之進殿	切継紙	15.2× 70.7	―		
48	安政七年仲春	1860	御城御居間之図	宇野	―	竪紙	27.0× 39.3	―	「安政七年仲春茂見控を借受写置也」	
49	安政四年正月	1857	上野本覚院之図	宇野	―	続紙	44.0× 61.0	―	「安政四年正月安田図ヲ借請写之　宇野」	
50	嘉永四辛亥年正月写之	1851	公義御精進日 (江戸幕府将軍と細川家当主の没年・墓所・法名等を記したもの)	元田永定	―	切継紙	15.2× 239.0	―	末尾に「于時嘉永四辛亥年正月写之　元田永定」とあり	
51	(文久三年二月)	1863	天授庵之図	―	―	続紙	41.4× 39.5	―	「文久三年二月御参詣之節図也」	
52	(江戸時代後期)		表海御末家様御取遣之図	関	―	竪紙	26.7× 39.0	―		
53	(文久三年)	1863	〔覚〕 (文久3年10月11日の顕光院・風臺院慰の能についての配置図)	―	―	切紙	15.5× 44.5	―		
54	(江戸時代)		縁日之覚 (江戸城下の縁日の日付の覚)	―	―	切継紙	15.0× 45.3	―		
55-1	(文久二年以降)	1862 以降	覚 (各種儀礼の際の熨斗に関する覚書)	―	―	切継紙	14.1× 63.0	―		
55-2	安政三年四月十九日	1856	御馬之取扱之覚	―	―	切継紙	15.5× 103.5	―	付札末尾に「万延元年七月尾藤・堀田記録」とあり	
55-3	(安政五年以降)	1858 以降	生馬御召初	―	―	切継紙	16.0× 65.0	―	端裏書「年頭役扣　御国」	
55-4	(文久元年)	1861	〔覚〕 (文久元年7月29日に行われた蓮性院御法事の経過等の覚書)	―	―	切紙	15.3× 41.0	―		
55-5	(江戸時代後期)		〔御礼式〕	―	―	断簡	14.1× 不明	―	一部固着し展開不可	虫損
55-6-1	(江戸時代後期)		〔覚〕 (儀礼の際の酒肴の数を記したもの)	―	―	切紙	15.5× 15.3	―		
55-6-2	(江戸時代後期)		宇土様御家督後初而御出	―	―	切紙	15.2× 15.8	―		

21	万延元年庚申九月写之	1860	御道中御行列立之控	肥後　関	―	横半帳	8.4×18.5	17丁		
22	明治二年	1869	明治二年巳七月十七日東京御発駕御休泊御小立附	関	―	仮綴	8.5×17.5	9丁		
23	(江戸期)		年頭当番心得	―	―	仮綴	8.3×17.8	8丁		
24	文久二年	1862	文久二年戌十二月廿三日ゟ　御休泊附	関	―	仮綴	8.4×17.3	15丁		
25	(江戸時代後期)		御小姓役手控	―	―	横半帳	8.7×18.0	―	虫損のため途中展開不可	虫損
26	(江戸時代後期)		勤方手扣	―	―	横半帳	8.8×18.2	―	虫損のため途中展開不可	虫損
27	(江戸時代後期)		御国御先番手控	関	―	横半帳	7.8×17.8	32丁	本丸御殿・天守・奉行所・時習館・藤崎宮・本妙寺・泰勝寺・妙解寺等の儀礼における藩主・給仕者の配置図あり	虫損
28	天保七年	1836	泰勝寺御法事之図式	宇野	―	竪紙	27.0×39.5	―	「内山図を写置」とあり 端裏書「泰勝寺御法事御詰之図　宇野扣」	
29	(江戸時代後期)		目録 (宇野家から関家へ渡された絵図・文書等の目録)	宇野	関様	切継紙	15.0×91.3	―		
30	(江戸時代後期) 九月廿日		〔達〕 (讃州金毘羅宮へ代参のため来る二十三日出立のこと奉行所より通達)	関繁兵衛殿	御供表御用人中	切継紙	15.4×48.0			継目糊離れ
31	(江戸時代後期)		〔覚〕 (正月儀礼での花畑屋敷表門の人員配置を記したもの)	―	―	竪紙	26.5×39.5	―		
32-1	(慶応二年七月)	1866	〔覚〕 (行列配置を記したもの)	関	―	切継紙	15.3×98.0	―	包紙あり　「御備立御道押四竪合横　御近習三極御供立様之扣　慶応二年寅七月廿三日記■　関」(包紙上書)	
32-2	(慶応二年七月)	1866	〔覚〕 (行列配置を記したもの)	関	―	切継紙	15.3×67.0	―		
32-3			〔覚〕 (行列配置を記したもの)	―	―	切継紙	15.4×57.0	―		
33	(元治元年七月)	1864	御出馬之節御近習向御行列略図	―	―	切継紙	15.0×80.3	―	端裏書「已前之図ニ而尚扣置候、此図者当時不用候事」	継目糊離れ
34	(江戸時代)		御城西ノ丸御先番ニ罷越候節控置候図	―	―	竪紙	26.5×39.0	―		
35	(文久元年以降)	1861	小峯山調練御覧之図	宇野	―	竪紙	26.7×39.0	―		
36	(万延元年)	1860	御城御居間之図	宇野	―	竪紙	27.0×39.0	―	端裏書「万延元年十一月朔日御入国後初御登城之節之図」	
37	天保十一年扣候	1840	表海御間若殿様取遣之図	関	―	竪紙	39.5×26.8	―		
38	(安政三年以降)	1856以降	清光院之図	宇野	―	竪紙	30.6×44.2	―	「安田図借請写　宇野」とあり	
39	(江戸時代)		天授庵御廟	―	―	切継紙	15.3×72.0	―		
40	(文久元年)	1861	文久元年八月三日御政事向為御聴御家老間江被為入候節之図	―	―	竪紙	26.5×39.5	―		

15 - 2-1	(安政四年以降)	1857以降	山王之図	宇野	―	竪紙	27.8×40.0	―	15-2-1～5まで包紙あり「山王并観理院図式并書付一通」(包紙上書)	
15 - 2-2	(嘉永二年以降)	1849以降	観理院 (観理院での座配を記した図)	(安田)	―	竪紙	30.6×44.2	―	端裏書「安田同人より貰受宇野」	
15 - 2-3	嘉永元年四月朔日	1857以降	観理院 (観理院での給仕に関する覚)	安田	―	竪紙	16.3×130.0	―	末尾に「嘉永元年四月朔日認吉田　右借受写置之　安田」とあり	
15 - 2-4	(安政三年以降)	1856以降	〔覚〕 (安政3年正月13日山王参詣につき観理院へ向かう際の服装等について)	―	―	切紙	15.5×11.0	―		
15 - 2-5	(安政四年以降)	1857以降	〔覚〕 (山王社参詣・観理院での儀礼に関する覚)	―	―	切継紙	28.0×31.6	―		虫損
15 - 3	(嘉永五年以降)	1852以降	芝明神社	宇野	―	竪紙	30.8×44.0	―	「嘉永五年四月三日御社参之節之図也」「安田ヨリ貰請宇野」とあり	
15 - 4	(弘化五年以降)	1848以降	増上寺御宿坊之図	宇野	―	竪紙	27.7×40.2	―	「安田ヨリ貰請　宇野」とあり	
15 - 5	(江戸時代後期)		烏森之図	宇野	―	竪紙	27.9×40.3	―		
15 - 6	(江戸時代後期)		白金中庭三社	宇野	―	竪紙	27.7×40.0	―		
16 - 1	(江戸時代後期)		妙解院御廟之図 (妙解寺の宣紀ほか廟の配置図)	―	―	続紙	26.8×53.2	―	包紙あり　「江戸御寺御先番切図　関」(包紙上書)	
16 - 2	(安政六年以降)	1859以降	妙解院御年回御詰被為在候節之図	関写之	―	竪紙	27.0×39.0	―	付札あり	
16 - 3	(江戸時代後期)		少林院御廟之図	関扣	―	竪紙	27.0×39.5	―	「少林院惣御廟之図」(本紙外題)	
16 - 4	(江戸時代後期)		山王社御参詣之図式	―	―	竪紙	27.0×39.5	―		
16 - 5	(江戸時代後期)		少林院之新図	関	―	竪紙	26.8×39.5	―		虫損
16 - 6	(江戸時代後期)		松光寺新規建立之図	―	―	竪紙	27.0×39.5	―		
16 - 7	(江戸時代後期)		観理院之図	―	―	続紙	26.8×51.5	―		
16 - 8	(江戸時代後期)		神明社新図	関扣	―	竪紙	27.0×39.5	―	「芝神明社新図」(本紙外題)	
16 - 9	(江戸時代後期)		妙解院之新図	関	―	竪紙	26.9×39.5	―	「妙解院居間書院新造之図」(本紙外題)	
16 - 10	(江戸時代後期)		清光院之図	関	―	竪紙	27.0×39.5	―		
17	安政五年午正月	1858	御国年頭手控	宇野	―	折本	14.5×164.0	―	巻末に「安政四年十二月根役■山扣を借受写置候者也　宇野」とあり	両面筆
18	(元治二年以降)	1865	神護寺ノ図	宇野	―	竪紙	30.2×44.0	―	包紙あり　「神護寺御参詣之図　壱枚　宇野」(包紙上書)	
19	(江戸時代後期)		御礼式帳 (御礼式　年頭五節句御礼之次第座配相定覚)	―	―	仮綴	7.0×18.7	17丁		
20	(元治元年以降)	1864以降	御馬取扱之控	関扣	―	仮綴	8.2×19.0	14丁		

関家・宇野家文書目録

凡例
一、番号は購入時に付されていた番号を踏襲し、必要に応じて枝番を付した。
一、年代は原史料の表記に従った。内容から推定したものには（　）を付した。
一、史料名は概ね原史料の表記に従った。内容により仮題をつけたものは〔　〕で示した。内容については（　）に記載した。
一、判読できない文字は、文字数が分かるものは■で、文字数が不明な場合は［　　］で示した。
一、そのほか特記すべき内容については備考欄に記載した。

番号	年　代	西暦	史料名（内容）	差出・作成	宛所	体裁	法量（縦×横）	丁数	備考	状態
1	安政五午二月	1858	御参勤御休泊附　小倉路　中国路 播磨路　美濃路　東海道	関	－	横半帳	7.0× 15.8	21丁		
2	万延元年	1860	諸控 一、若殿様御目見被為済於表海御間御両殿様御取遣 一、御隠居御家督下タ調	宇野	－	仮綴	27.0× 19.8	9丁	表海御間ほか図入　末尾に「万延元年斎護君御隠居御家督被為在候筈ニ而下調有之候控　宇野」とあり	
3	安政四巳年	1857	御給仕一件之控　正月ヨリ十二月マテ	宇野　貞次	－	仮綴	13.2× 20.0	65丁	末尾に「此壱冊ハ松岡控を借請写置候者也　安政四巳年 宇野貞次」とあり	
4	（弘化二年以降）	1845 以降	御具足御召初之控	関	－	仮綴	12.5× 17.3	27丁	天保７年の雅之進（慶前）、弘化2年の訓三郎（慶順）の御具足召初の控	
5	（弘化四年以降）	1847 以降	手控　御具足御召初御略式之覚 御書出頂戴之扣　御乳縄之節之扣	関	－	仮綴	9.0× 20.0	14丁	花畑屋敷歌仙之御間・鹿之御間の図あり	
6	万延二年	1861	年頭控　万延二年元日ゟ七日迄	宇野	－	折本	13.5× 222.0	－		
7	万延元年九月十一日	1860	初御礼之繰合	宇野	－	折本	13.7× 96.0	－		継目糊離れ
8	安政四年二月	1857	〔手控〕 （天保五年～六年の江戸勤番日記の控と安政三年「御任官一件」）	宇野	－	横半帳	7.5× 15.3	28丁	後半は「安政三辰歳十二月御任官一件之扣」	虫損
9	（安政期以降）		御國江戸年頭手控	関	－	横半帳	7.5× 15.8	29丁	花畑屋敷中桂御間の図あり	虫損
10	子ノ正月		年頭手控 （年頭の料理と給仕者の名前を記したもの）	関	－	折本	16.3× 90.0	－		虫損
11	（近世）		伊勢路・東海道御休泊御小立帳	関	－	仮綴	8.5× 17.5	11丁		
12	（近世）		〔覚〕 （小倉から隈本までの宿場と距離を記したもの）	－	－	竪紙	25.0× 37.8	－		
13	（天保～安政期）		手控 （在国１年間の儀礼をまとめたもの）	関	－	仮綴	5.7× 15.5	31丁		
14	慶応四年七月写之	1868	御礼式 （細川家家臣の名前と席次を記したもの）	関	－	仮綴	8.7× 19.0	22丁		
15－1	（江戸時代後期）		三田八幡之図	宇野	－	竪紙	27.9× 40.0	－	15-1～8まで包紙あり「〇山王　〇観理院図并書付一通　〇烏森　〇芝明神　〇三田八幡　〇白金三社　〇増上寺御宿坊各図弐合七通入」（包紙上書）	

一、天保十三年月日御武器為　御覧被為　入候節、御召御継上下尤御熨斗上ヶ不申候、右之節御先番年□（後カ）

根役茂見図を写置

「御城鐘之段之図」（史料三）は大天守最上階である「鐘之段」（御上段）で行われた儀礼の座配を記したものである。この時の藩主の服装は長裃で、史料中に「クヽリ」とあるのは給仕者が天守に入る際に藩主の袴の裾を括ったもので、最上階の部屋に入る前にこれを解いた。大天守北側の階段を登ってきた藩主は中央十八畳の部屋に入ると、西を向いて着座する。藩主の背後には御居間から給仕が持参した刀敷が敷かれ、刀を置いた。その後、藩主は城代・家老を順に召し出し対面したのち、熨斗鮑を下賜する。この時対面者は脇差を帯びず、部屋の外に置くようになっていた。南西隅には「霊符」が祀られており、年頭儀礼の場合は参拝が行われるため、給仕者が手水を用意した。

このほかにも、年頭や藩主就任時には別日程で本丸御殿において一門衆から町人まで対面（「家中御礼」）も行われ、盃や御肴の下賜が行われた。「御居間」や「鐘之段」での儀礼と比較すると、これらの部屋で行われる対面は城代・家老・御留守居大頭・奉行といった限定された人々で、下賜する品も熨斗鮑と定められており、熊本城内の特定の建物で行われた特別な儀礼といえるだろう。

おわりに

以上、「関家・宇野家文書」について紹介した。このほかに熊本藩の小姓役を勤めた家の文書として、熊本市立図書館が所蔵する「中根家文書」がある。この中にも「御城御居間之図」や「鐘之段之図」が含まれているが（註6）、「関家・宇野家文書」に収録されているものと内容が酷似し、宇野家・中根家ともに同じ原図を写したものと考えられる。図の描写は「関家・宇野家文書」のものが精緻だが、小姓役の間で情報を共有していた事実がうかがえるものとして興味深い。また、藩主の儀礼に関する史料は永青文庫にも多く残されており、特に十一代藩主細川慶順の藩主就任時に行われた儀礼に関するものがまとまって残されている（註7）。本稿では史料紹介にとどまったが、今後こうした関連史料の調査を進め、熊本城内で行われた儀礼の具体像から天守や本丸御殿といった城内建物がどのような役割や用途をもったのか明らかにできればと思う。

註

（1）「先祖附」南東24-17　（公益財団法人永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託）。本稿では熊本県立図書館所蔵複写本を閲覧した。

（2）「熊本県公文類纂」（熊本県立図書館蔵）

（3）「先祖附」南東31-17、註1に同じ。宇野丈之助（二〇〇石）、宇野理兵衛（一〇〇石）、宇野一之助（三〇〇石）、宇野雲四郎（二〇〇石）、宇野貞雄（一〇〇石）の5家である。

（4）西山禎一『熊本藩役職者一覧』熊本藩政史研究会、二〇〇七年

（5）『特別史跡熊本城跡総括報告書　歴史資料編　史料・解説』熊本市、二〇一九年所収195・196号文書

（6）「御城御居間之図・時習館之図・御家老間之図・弓樹之図・鐘之段之図・水前寺御茶屋之図」中根家文書-893（熊本市立図書館蔵）

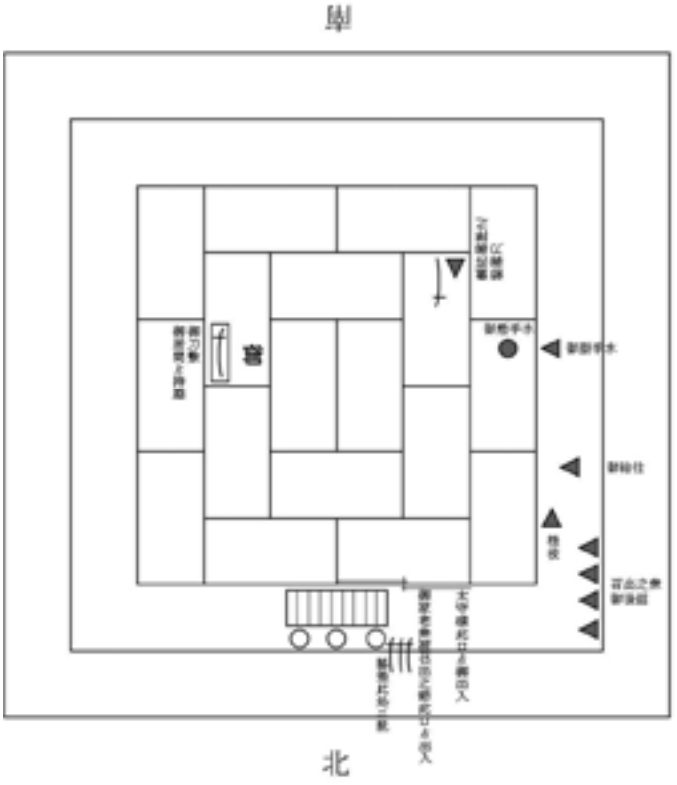
（7）「萬延元年庚申　御入国一巻」永青文庫細川家文書4．5．178．1、「萬延元年庚申年　慶順公御家督初而御入国御祝御規式帳　十月　二冊之内」永青文庫細川家文書135（いずれも公益財団法人永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託）

尤副役御奉行ニハ不被下候間、其前御三方下ヶ候事
一、御家老御手熨斗頂戴相済、南之方御入側列席
一、御刀ハ御床御刀敷之上ニ置之
一、御刀敷ハ鐘之段へ御上リ之節、直ニ持越候事
一、御烟草盆等一切上ヶ不申候事
一、御給仕帯劔御手伸送廻リ之事
一、御城代被召出ハ御立着迄ニ而、年頭ハ不被為在候事　但、鐘之段ニ而も本文同様之事
一、天保十三年　月　日御武器被為　御覧被為　入候節、御召御鑓上下、尤御伸不上候事、御烟草盆・御樽ハ上ヶ可申、組脇右図床之筋へ打合候処、上ヶ候方可然との事ニ而上ヶ候事、夕御膳も被　召上候事
　但、右之節御先番平服
　安政七年仲春茂見控を借受写置之

宇野

「御城御居間之図」（史料二）は年頭または藩主就任時に行われた登城の際、本丸御殿御居間で行われた儀礼の座配を記したものである。花畑屋敷を出発し、熊本城に登城した藩主は本丸御殿地下の御玄関から鶴之間に入り大広間の部屋を巡ったのち、御殿の北端にある御居間に入る(註5)。この部屋は奥向に設けられており、登城の際の藩主の休息所でもあった。史料二によると御居間は十五畳の部屋で、藩主は西にある上段の前に東を向いて着座し、刀は部屋の北側の床に敷かれた刀敷の上に置く。その後、藩主が城代・家老・御留守居大頭・奉行を召し出し、対面者は御居間の東にある次の間まで進み、ここで対面する。対面すると藩主は、長寿や家の永続を祝う縁起物である熨斗鮑を自ら家臣に下賜する。城代との対面は藩主の就任時のみで、年頭の場合は召し出されなかった。御居間での儀礼が終わったのち、藩主は御居間を出て天守へ向かう。大天守の各部屋を巡覧したのち、最上階「鐘之段」にて儀礼を行った。

【史料三】（目録番号46）
鐘之段之図



一、御上リ之上御クヽリ御解、御懸手水差上之、霊符　御拝、此節御刀引下リ図之処ニ持之帛無シ
　但、霊符御拝ハ正月迄ニ而御立着も不被為在候事
一、右被為済、御座着之上、御刀敷之上ニ図之通置之、御熨斗ニ方突付ニ上之御手熨斗ニ直シ御城代并ニ御家老衆被　召出、御手熨斗被下之、相済御立
一、御刀ハ御後ロ御刀敷之上ニ置之、尤御刀敷ハ御居間ゟ持越候事
一、文政十三年六月十八日御刀上ヶ様相改、御後ロニ御柄之方南向候様上ヶ置候由、右ハ嶋田源吾ニも相談致シ、旧復之由之事
一、御給仕之儀、文化十二年帯劔ニ相極候由、天保十一年六月廿三日根取清原小左衛門より演舌致候由承ル

（三）武芸相伝書

武芸目録等の相伝書については二五点あり、八代只吉のものが五点、九代九郎助（木下熊門）のものが二点、十代繁兵衛のものが最も多く十二点、繁兵衛の子の素兵衛のものが四点、天保九年（一八三八）の関十九郎宛のものが二点である。

（四）その他

関家に伝来した掛軸二点があった。そのうち「藤孝公御短冊」（目録番号97－1）は細川家初代細川藤孝（幽斎）の筆とされる和歌の短冊を掛軸にしたもので、八代只吉（素兵衛）が文化元年（一八〇四）に藩主より拝領したものであることが史料から判明する（目録番号97－4）。もう一点は熊本出身で第二三代内閣総理大臣となった清浦奎吾の書幅で（目録番号98－1）、関洞雪（十一代繁兵衛）に贈られたものである。

三．「関家・宇野家文書」にみる熊本城内の儀礼

儀礼に関するものは多岐にわたっているが、本稿では特に熊本城内で行われた儀礼について紹介したい。城内で行われた儀礼としては年頭の藩主登城・拝謁、藩主就任時の登城・拝謁、城内の櫓等の巡覧などがある。「関家・宇野家文書」の中で熊本城内の儀礼やその座配について記したものとしては「御国御先番手控」（目録番号27）、「御城鐘之段之図」（目録番号46）、「御城御居間之図」（目録番号36・48）などがある。

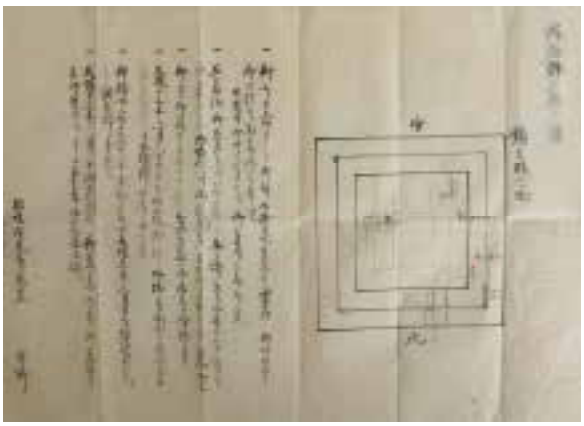
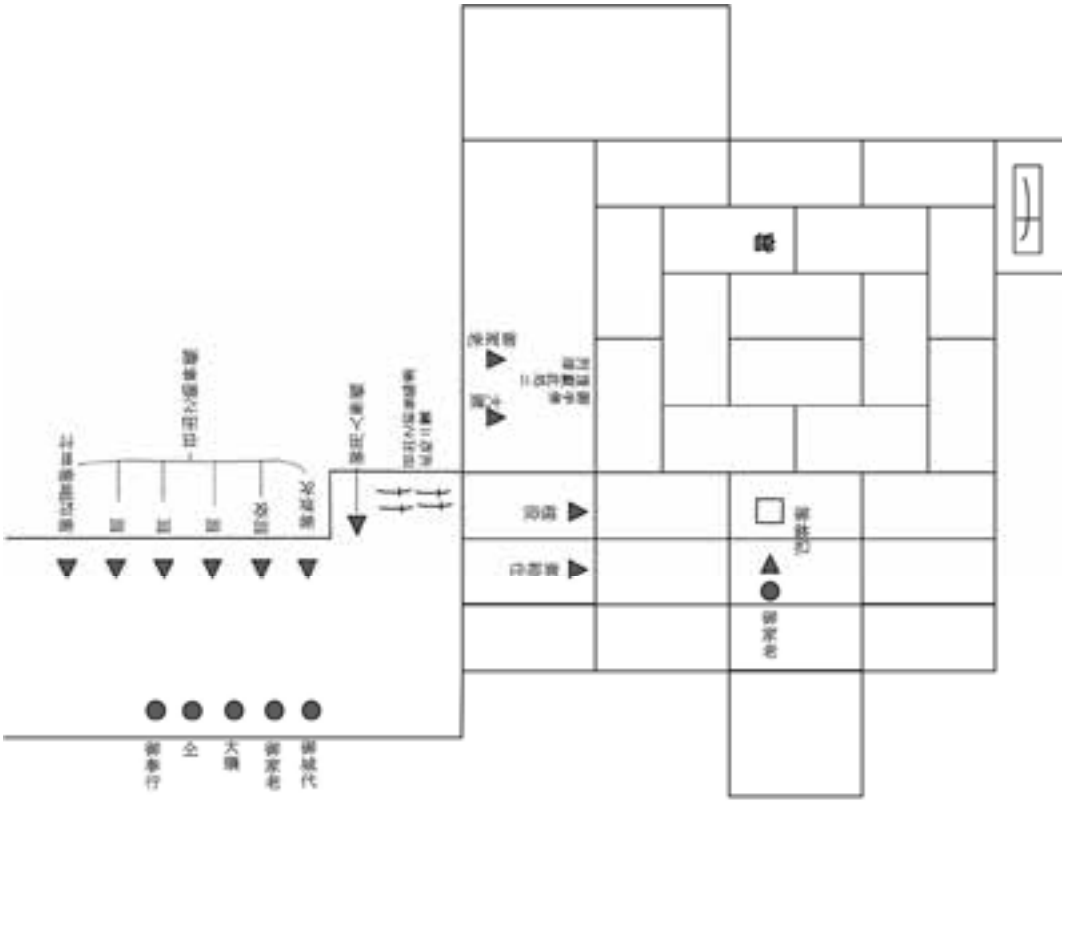


図２　「御城鐘之段之図」

【史料二】（目録番号48）
御城御居間之図



一、被為　入御クヽリ御解、図之処　御座着之上、御熨斗三方突付ニ上之直ニ御手伸ニ直し、御城代初御家老、御留守居大頭、御奉行被召出、御手熨斗被下之、

史料一は「御城之図」・「神護寺之図」をはじめとした儀礼関係の図面や冊子を目録として書き上げ、宇野から関へ譲ったことが記される。表1は史料一に記載された図面等の名称と「関家・宇野家文書」に含まれる文書の表題を比較したものである。これによると多くが一致しており、宇野が所有していた図面等が江戸時代後期のある時期に関へと渡され、その後関家で所持し続け現在に至っていることがわかる。譲られた経緯の詳細は不明だが文中で「御同役中ニ而御用罷立候ハヽ無此上大慶奉存候」と述べており、「同役」つまり御小姓役の「御用」（職務）の役に立つようにと宇野から関へ渡ったものである。なお、宇野から譲られた文書のなかには、同じ御小姓役の茂見や安田、内山、松岡らから図を借用し写したものも散見される。このことからも、御小姓役の間で職務に関する情報や記録を共有していたものと考えられる。

表1　宇野家から関家へ渡された文書

(29)「目録」に記載の図名称等	関家・宇野家文書	備考
御城之図　御居間　鐘の段　松の御間	**(36)御城御居間之図** **(48)御城御居間之図** **(46)御城鐘之段之図**	松の御間は紛失とあり
神護寺之図	**(18)神護寺ノ図**	
御政事向　御聞御家老間へ御出	**(40)文久元年八月三日御政事向為御聴御家老聞江被為入候節之図**	
小峯山調練	**(35)小峯山調練御覧之図**	
泰勝寺図　四枚	**(28)泰勝寺御法事之図式** **(42)泰勝寺**	
妙解寺図　二枚	**(43)廟解寺奥座敷ニ而召上リ之略図**	
玄猪御餅頂戴之図　二枚	(44-1)於鹿之御間玄猪御餅頂戴之図 (44-2)玄猪九曜之御間・中桂之御間御餅頂戴之図	包紙に「関扣」とあり
両御寺時替出仕		
歌仙之御間御出座一門衆初頂戴		
御馬御扱	**(55-2)御馬之取扱之覚**	
御本式御謡初之扣　壱冊	**(78)本御式　御謡初之控**	
出地板床御礼之図　二枚	(45)年頭板床御間之図	端裏に「関」とあり
上使		
本覚院	**(49)上野本覚院之図**	
板床講釈		
妙解院御法会	(16-2)妙解院御年回御詰被為在候節之図	「関写之」とあり
山王　観理院書付添　烏森　三田八幡 **白金三社　神明　増上寺御宿場**	**(15-2-1)山王之図** **(15-2-2)観理院** **(15-2-3)観理院** **(15-5)烏森** **(15-1)三田八幡之図** **(15-6)白金中庭三社**	
妙解院　清光院　松光寺　少林院	**(38)清光院之図** **(16-6)松光寺新規建立之図**	
御任官一件　二冊	**(8)〔手控〕**	
御両殿様御取遣并ニ御隠居家督下調へ	**(2)諸控　一、若殿様御目見被為済於表海御聞御両殿様御取遣　一、御隠居御家督下夕調**	
八代家督出府之扣		
御給仕一件之扣	**(3)御給仕一件之控**	
外惣日供之扣　江戸御観御能之図		「是も相見へ不申候」とあり

（二）知行関係

関宛の知行宛行状が十四通、知行目録が八通数えられる。知行宛行状は寛永十五年（一六三八）に初代藩主細川忠利から初代右太郎と三十郎に発給されたもの（目録番号57、58）が最も古い。続いて二代藩主細川光尚（光貞）から寛永十八年（一六四一）に三四郎と右太郎に発給されたもの（目録番号59、60）、三代藩主細川綱利から寛文元年（一六六一）に権左衛門に発給されたもの（目録番号61）、寛文七年（一六六七）に二代山三郎へ発給されたもの（目録番号99）、四代藩主細川宣紀から正徳六年（一七一六）に二代九左衛門（山三郎）に発給されたもの（目録番号63）、五代藩主細川宗孝から享保十九年（一七三四）に四代九左衛門へ発給されたもの（目録番号62）、六代藩主細川重賢から寛延元年（一七四八）に十九郎（五代素兵衛か）へ発給されたもの（目録番号64）、七代藩主細川治年から天明六年（一七八六）に八代只吉へ発給されたもの（目録番号65）、八代藩主細川斉茲から天明八年（一七八八）に八代素兵衛（只吉）へ発給されたもの（目録番号66）、九代藩主細川斉樹から文化九年（一八一二）に九代素兵衛へ発給されたもの（目録番号67）、十代藩主細川斉護から文政九年（一八二六）に九代素兵衛へ発給されたもの（目録番号68）、十一代藩主細川慶順から十一代繁兵衛へ万延二年（一八六一）に発給されたもの（目録番号69）である。歴代藩主から発給された知行宛行状が良好に伝来したといえる。

知行目録は寛文～延宝期とみられる二代山三郎のもの（目録番号70－9）、享保十一年（一七二六）とみられる右太郎（四代九左衛門か）のもの（目録番号70－4）、延享三年（一七四六）とみられる十九郎（五代素兵衛か）のもの（目録番号70－6）、天明二年（一七八二）とみられる八代只吉のもの（目録番号70－3）、文化二年（一八〇五）の八代素兵衛のもの（目録番号70－2）、文化五年（一八〇八）とみられる九代九郎助（素兵衛）のもの（目録番号70－8）、文化九年（一八一二）の九代素兵衛のもの（目録番号70－1）、嘉永六年（一八五三）とみられる十一代繁兵衛のもの（目録番号70－7）がある。

宇野家の文書が関家に伝来した理由としては婚姻や養子が考えられるが、先祖附等からは関家と宇野家の間に縁戚関係は認められなかった。伝来の理由についてうかがえる史料を紹介する。

【史料一】（目録番号29）

目録

一、御城之図
　御居間、鐘の段、松の御間
　但、松の御間御礼明細之図紛失
一、神護寺之図
一、御政事向　御聞御家老間へ御出
一、小峯山調練
一、泰勝寺図　四枚
一、妙解寺図　二枚
一、玄猪御餅頂戴之図　二枚
一、両御寺時替出仕
一、歌仙之御間御出座御一門衆初頂戴
一、御馬御扱
一、御謡初（御本式）之扣　壱冊
　往生院　藤崎　時習館
　祇園　御礼御能
　是丈ヶ相見へ不申候

江戸

一、出地板床御礼之図　二枚
一、上使
一、本覚院
一、板床講釈
一、妙解院御法会
一、山王　観理院書付添　烏森
　三田八幡　白金三社　神明
　増上寺御宿場
一、妙解院　清光院　松光寺
　少林院
　右図式
一、御任官一件　二冊　書付数通入
一、御両殿様御取遣并ニ御隠居御家督下調へ　壱冊
一、八代家督出府之扣　壱冊
一、御給仕一件之扣
一、外惣日供之扣
　江戸御観御能之図
　是も相見へ不申候

先、右之分差上申候、此外ニ餘計御座候へとも、私心覚へノ扣ニ而差出候而も却而御迷イ被成可申候間差出不申、火中仕候節ニ而御渡候事
一、切図段々相見へ不申、人ニ借置候様も無之とも自然借置候事とも難計、御同役中ニ而御用罷立候ハヽ無此上大慶奉存候、若又宿ニ而紛失も難計候間、跡書見出し候ハヽ早速差出可申候
一、江戸年頭一切先番扣、右ハ江戸へ取落でも致候哉、是又相見不申候
一、此節御用ニ立候扣も御承知通候愚筆ニ而相認メ御なり被成間敷、少シニ而も御用相立候ハヽ無是上大慶奉存候
　已上
　十二月八日　宇野
　関様

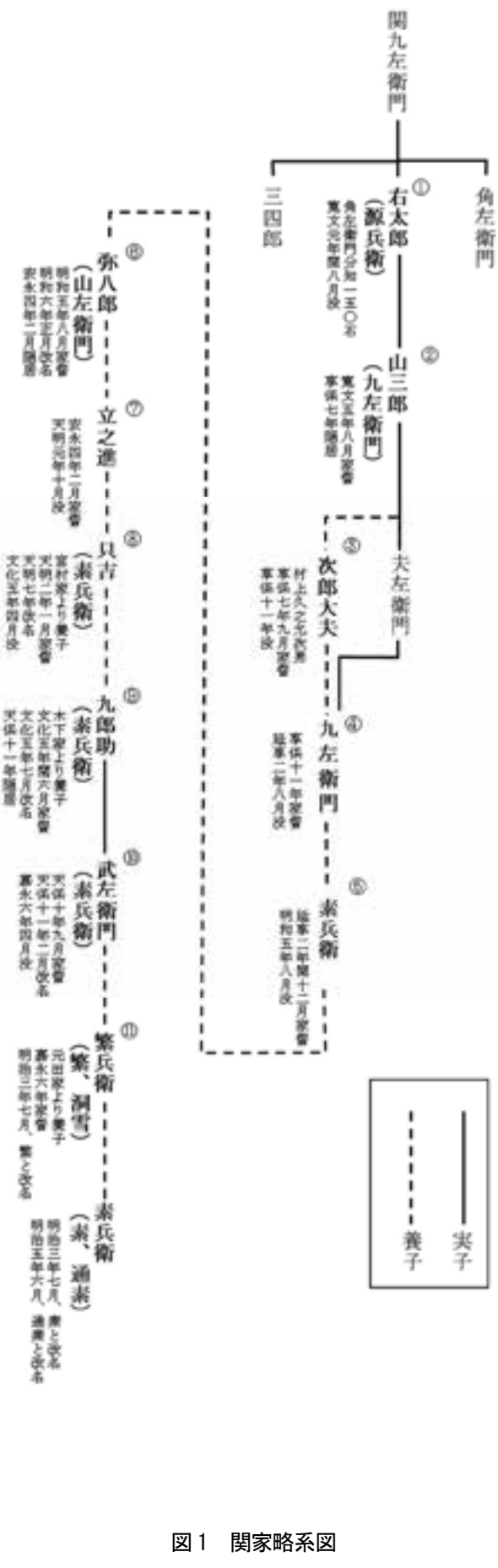


図１　関家略系図

（二）宇野家

本史料群で差出または作成者が「宇野」となっているもののほとんどが姓のみ記載し、一部に「宇野貞次」（目録番号3）の記載がある。「先祖附」によると宇野家は五家あるが[註3]、「貞次」を名乗る人物が見当たらない。史料の内容から安政～万延期に御小姓役を勤めたと考えられるので、同時期に御小姓役を勤めた宇野貞雄家に伝来したものと考えられるが、確定には至らなかった。参考までに宇野貞雄家の概要を述べておくと、祖である治部大夫は播磨国明石に居住し、菊池家に縁があって大永年間ごろに西国へ下ったとされる。初代八左衛門が寛文十年（一六七〇）に町方十人組として二人扶持切米七石で召し抱えられ、三代良助の時に奉行所根役などを勤め知行一〇〇石が与えられた。六代貞之助の時に足高のうちから新知加増され一八〇石となっている。七代貞雄は安政二年（一八五五）十月から安政七年（一八六〇）一月まで、万延元年七月から文久元年（一八六一）十二月まで御小姓役を勤め、明治元年（一八六八）から三年（一八七〇）まで玉名、菊池、合志、山本、山鹿、小国、野津原・鶴崎の郡代を歴任している[註4]。

二．「関家・宇野家文書」の概要

史料総数は一四二点で、詳細は目録を参照されたい。内容は関家・宇野家ともに御小姓役を勤めた家であることから、参勤や藩主の儀礼に関するものが大半を占める。また、関家歴代当主の知行宛行状や知行目録、武芸相伝書があり、関家の由緒を示すものとして理解できる。以下、項目ごとに概要を述べる。

（一）儀礼関係

年頭儀礼や熊本城への登城、江戸・熊本の寺社への参詣などの藩主が行う様々な儀礼について、給仕者の覚や座配を記した図などがあり、七〇点余を数える。多くが江戸時代後期、特に嘉永・安政期以降に作成されたもので、関家十一代の繁兵衛の時期にあたる。このうち、宇野が差出または作成者であるものが二三点あり、宇野作成ではないが同じ御小姓役を勤めた安田家から宇野が譲り受け、関家に渡ったとみられるものが三点ある（目録番号15－2－2、15－2－3、15－3）。

二．史料紹介「関家・宇野家文書」

木下　泰葉

はじめに

「関家・宇野家文書」は令和二年度（二〇二〇年度）に熊本城調査研究センターで購入した文書群で、現在は熊本博物館に保管している。関家・宇野家ともに熊本藩士で御側役・御小姓役などを勤めた家系である。本文書群は「関家・宇野家文書」と呼んでいるが主に関家に伝来したもので、一部の儀礼関係の文書が宇野家から江戸時代のある時期に同じ御小姓役である関家へ譲渡されたものと考えられる。史料群の中には熊本城天守や本丸御殿、花畑屋敷や妙解寺・泰勝寺などの藩領内の諸建物のほか、江戸の藩邸等で行われた儀礼に関するものが多く含まれている。本稿では文書群の概要をまとめ全体像を目録として公開することで、今後の活用を期したい。なお、本稿で参考・引用する史料については、目録中の整理番号（目録番号〇）で示した。

一．関家・宇野家の概要

本史料群に関係する関家・宇野家の由緒について「先祖附」[註1]・「有禄士族基本帳」[註2]などをもとにまとめた。

（一）関家

関家の祖は九左衛門で、はじめ浪人だったが初代藩主細川忠利に召し抱えられ二〇〇石を拝領した。九左衛門の病死後にその子の角左衛門が跡目相続し、御児小姓を仰せつけられた。さらに弟の右太郎（のち源兵衛に改名）と三四郎も御児小姓として召し出され、角左衛門の知行から右太郎へ一五〇石、三四郎へ五〇石が配当された。この右太郎に始まる家系が、本文書群の伝来した関家である。

二代の山三郎（九左衛門）の時、御中小姓に召し加えられたのち、御切米奉行や大坂定詰御買物奉行を勤めている。三代次郎大夫、四代九左衛門と続き、五代素兵衛の時には寛延元年（一七四八）藩主・重賢の入国御用を勤めた。その後、素兵衛は郡奉行を勤めたのち、願により御小姓組や番方に召し置かれたが、宝暦四年（一七五四）十一月より作事所目付役に任じられ、同六年からは江戸詰めとなり、足高として五〇石を拝領した。江戸では増上寺御手伝御用などを勤めたことで幕府や藩主から品々を拝領しており、これ以降の関家当主が「素兵衛」を名乗ることが多いことからも、功績の大きさが伺える。六代・七代は病気のため早くに隠居または死亡している。宮村家から養子となった只吉（素兵衛）が天明二年（一七八二）に十九歳で関家の名跡を相続し八代目となり、同年御小姓組に属した後は御給仕役や参勤の供を度々命じられている。そうした実績から寛政六年（一七九四）に御小姓役根役・御給仕根役、翌七年（一七九五）には御側御取次を命じられ足高五〇石を下された。さらに寛政十二年（一八〇〇）に御近習御次組脇・御側御取次兼帯となり足高一〇〇石、享和三年（一八〇四）には昨年以来の御用繁多のなか昼夜抜群の働きをしたとして足高一〇〇石を下された。文化元年（一八〇四）には与えられた役について抜群の働きをしたとして、それまでに与えられた足高のうち一〇〇石を知行として与えられ、江戸留守居次座の座席となった。文化二年にはさらに足高一〇〇石と着座の席次となり、近習御次組脇となり御用人不足の際は助勤を勤めるよう命じられ、文化五年（一八〇八）には御用人代として御留守居詰を仰せつけられている。こうした只吉（素兵衛）の卓抜した働きによって九代九郎助（素兵衛）以降は知行二五〇石が与えられており、いずれも御小姓役や御留守居役を勤めた。

熊本城調査研究センター年報８
令和３年度

2022 年10月

※図・写真の無断転載は固く禁じます

発行　熊本市熊本城調査研究センター
〒860-0806
熊本市中央区花畑町 9-6
TEL　(096) 355 - 2327